

**鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報
22・23**

平成18・19年度

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

2009年3月

序

鹿児島大学キャンパスには、後期旧石器時代から近代までの、貴重な遺跡が包蔵されていることが、鹿児島大学埋蔵文化財調査室の発掘調査によって、次第に明らかにされています。その成果は、これまでに『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Vol. 1～21、『鹿児島大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書』第1～3集として逐次報告されてきました。

今回は、鹿児島大学埋蔵文化財調査室の平成18年度ならびに平成19年度の事業報告として『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』22・23を合冊で刊行することになりました。

平成18年度は、発掘調査3件、試掘調査1件、立会調査20件を実施しました。平成19年度も発掘調査3件、試掘調査1件、立会調査20件が実施されており、本年次報告には、それらの概要等が掲載されています。

現在、キャンパス内では、多くの建物の建築や周辺整備などが行われ、それに先立って必要な埋蔵文化財調査が行われています。学内施設整備が円滑に進むよう、埋蔵文化財調査室は全力を尽くしております。大学キャンパス内から出土する貴重な大学の財産、県民・国民の財産としての埋蔵文化財の調査および研究を行うための体制の実現について、重ねて全学的なご理解、ご支援をお願い申し上げます。

平成21年3月

鹿児島大学埋蔵文化財調査室長
鹿児島大学埋蔵文化財調査委員長
新田 栄治

例言

1. 本報告は、鹿児島大学構埋蔵文化財調査室が、2006（平成18）年度、2007（平成19年度）に行なった事業の年次報告である。
2. 本書に掲載している調査は、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が担当した。立会調査は、主に鹿児島市教育委員会が担当した。
3. 本書の作成にあたっては、埋蔵文化財調査室が行なった。担当者は以下の通りである。

2006（平成18）年度

実測（相美伊久雄・真邊彩・赤尾和洋・河野裕次・新里貴之・寒川朋枝）

製図（新里・濱田綾子・寒川） 作表（新里） 執筆（新里） 写真（新里）

2007（平成19）年度

実測（真邊・寒川・中村直子） 製図（中村・濱田・寒川） 作表（中村・新里）

執筆（新里） 写真（新里）

編集（新里・中村・寒川）

4. 本報告の出土遺物について、陶磁器は、渡辺芳郎氏（鹿児島大学法文学部教授）のご教示を受けた。石材については寒川による。また、近現代遺物については、株式会社パイロットコーポレーション九州支社（本社：東京）、株式会社カネボウ化粧品（東京）、丸美屋食品工業株式会社（東京）、キリンビール株式会社（東京）、ハウス食品株式会社（東京・大阪）、「漂流牛乳」HP（東京；<http://www.citymilk.net/index.htm>）、第一三共株式会社（東京）、株式会社東京タイプライター商店（東京）、日本ガラスびん協会（東京）、ニッコー株式会社（石川）、美濃窯業株式会社（岐阜）、岐阜県陶磁器工業協同組合連合会、岐阜県セラミックス研究所、鍋屋バイテック会社（岐阜）、株式会社シャンソン化粧品（静岡）、株式会社資生堂（静岡）、カゴメ株式会社（愛知・東京）、小林製薬株式会社（大阪）、株式会社エヌ・エヌ・シー大阪営業所（本社：福岡）、磯じまん株式会社（大阪）、株式会社ナニワ商会（大阪）、株式会社マンダム（大阪）、五木食品株式会社（熊本）、日の出製粉株式会社（熊本）、南日本酪農協同株式会社（宮崎）、あらた同窓会事務局（鹿児島大学）、鹿児島大学生協、ウィンザー&ニュートン社（イギリス）の情報提供・ご協力を賜った。
5. 発掘調査による遺物の保管は、埋蔵文化財調査室の管理のもと、各学部、部局が収蔵している。また、図面・写真などの資料は埋蔵文化財調査室に保管している。

凡 例

- 1 昭和60年6月1日の埋蔵文化財調査室の設置を機として、鹿児島大学構内におけるこれからの埋蔵文化財調査室に便であるように、鹿児島大学構内座標を郡元団地と桜ヶ丘団地(旧宇宿団地)とに設定した。その設置基準は、以下の通りである。
 - (1) 郡元団地では、国土座標第2座標系(X=-158.200, Y=-42.400)を基点として一辺50mの方形地区割りを行なった(Fig.3参照)。
 - (2) 桜ヶ丘団地では、国土座標第2座標系(X=-161.600, Y=-44.400)を基点として一辺50mの方形地区割りを行なった(Fig.4参照)。
- 2 本年報におけるレベル高は、すべて海拔を表し、方位は真北方向を示す。
- 3 本書で使用した遺構の表示記号は、以下の通りである。

SK:土坑状遺構 SD:溝状遺構 P:ピット
- 4 観察表等で使用した土器の編年観については、弥生時代を中園聡1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第9号、古墳時代を中村直子1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号に拠った。また、観察表の「種別」について、様式・型式名の不明なものは、弥生土器・成川式として記す。陶磁器類の編年観は渡辺芳郎氏のご教示に拠る。ガラス瓶の各種用語に関しては、桜井準也2006『ガラス瓶の考古学』六一書房に拠った。編年観に関しては、同書とともに各社のご教示に拠る。
- 5 土層・遺物の色調は『新版標準土色帖』(農林水産技術会議事務局監修)を使用した。
- 6 遺物に関しては観察表を作成した。その標記、表現については以下の通りである。

調整:調整名称の前の()は、調整方向を表す。(—):横位方向, (|):縦位, (\):左上がりの斜位, (/):右上がりの斜位とした。→は、調整の新旧関係を表す。

色調:『新版標準土色帖』(農林水産技術会議事務局監修)を使用し、この色調に当てはまらないものについては「～に類似」、あるいは一般的な色調で表記した。

胎土:粒子の大きさで、礫(2mm～)・粗砂粒(1～2mm)・砂粒(0.2～1mm)・細砂粒(0.2mm以下)に分けた。また、砂粒の種類について特定できないものは、その色調で表記した。胎土中の砂粒の多さについては、便宜的に1～5の5段階に分けた。5:15%以上, 4:10～15%, 3:5～10%未満, 2:1～5%未満, 1:1%以下, とした。

サイズ:遺物の大きさの単位はセンチメートルである。復元によるサイズは、()をつけた。
- 8 遺物実測図中、—はスス付着の境界ラインを示す。
- 9 本文中の遺物番号は、挿図、図版、遺物観察表と一致している。
- 10 挿図・表・写真は通し番号を付す。

目次

2006 (平成18)年度

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会規則	1
鹿児島大学埋蔵文化財調査室規則	1
I 2006 (平成18)年度の事業概要	3
II 試掘調査	8
1 調査にいたる経緯	8
2 調査期間と調査体制	8
3 調査経過	8
4 各地点の状況	8
5 基本層序	9
6 遺構	9
7 遺物	9
8 まとめ	10
III 立会調査	25
IV 遺跡説明会	59
V 整理作業	59
VI 刊行物	60

2007 (平成19)年度

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会規則	61
鹿児島大学埋蔵文化財調査室規則	61
VII 2006 (平成18)年度の事業概要	63
VIII 立会調査	67
IX 遺跡説明会	93
X 体験発掘	94
XI 公開講座	95
XII 整理作業	95

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会規則

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人鹿児島大学常置委員会規則(平成16年4月1日制定)第3条第3項に基づき、国立大学法人鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会(以下「委員会」という)に関し、必要な事項を定める。

(組織)

第2条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

(1) 鹿児島大学埋蔵文化財調査室長(以下「調査室長」という)。

(2) 各学部の教授、准教授又は講師のうちから選出された者各1名。

2 前項第2号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員を生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする(審議事項)。

第3条 委員会は、次に掲げる事項について審議する。

(1) 調査実施計画に関すること。

(2) 埋蔵文化財調査室の予算に関すること。

(3) その他埋蔵文化財の業務に関すること。

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、第2条第1項第1号をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第5条 委員長は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数の場合は、議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

(事務)

第7条 委員会に関する事務は、施設部企画課において処理する。

(雑則)

第8条 この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附則

1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。

鹿児島大学埋蔵文化財調査室規則

(趣旨)

第1条 この規則は、鹿児島大学学則(平成16年4月1日制定)第7条第2項の規定に基づき、鹿児島大学埋蔵文化財調査室(以下「調査室」という)に関し、必要な事項を定める。

(目的)

第2条 調査室は、鹿児島大学(以下「本学」という)の埋蔵文化財の調査に関する業務を行い、本学内に存在する埋蔵文化財の保護対策を講ずることを目的とする。

(業務)

第3条 調査室は、次の業務を行う。

(1) 調査実施計画の立案

(2) 発掘調査、分布調査および確認調査

(3) 調査報告書の作成

(4) その他必要な事項

(職員)

第4条 調査室に、次の職員を置く。

- (1) 調査室長(以下、「室長」という)
- (2) 主任
- (3) その他必要な職員

第5条 室長は、本学の考古学に関連する教員の中から国立大学法人鹿児島大学学内共同研究施設等人事委員会(以下「委員会」という)が推薦し、学長が選考する。

- 2 室長は、調査室の業務を掌理する。
- 3 室長の任期は2年とし、再任を妨げない。
- 4 室長に欠員を生じた場合の補欠の室長の任期は、前任者の残任期間とする。

(主任等)

第6条 主任は、調査室の職員の中から、特に埋蔵文化財に関する専門知識を有する者を委員会が推薦し、学長が選考する。

- 2 主任は、室長の命を受けて調査室の業務を処理する。
- 3 職員は、調査室の業務に従事する。

(事務)

第7条 調査室に関する事務は、施設部企画課において処理する。

(雑則)

第8条 この規則に定めるもののほか、調査室に関し必要な事項は、別に定める。

附則

- 1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。
- 2 この規則施行後、最初の室長は学長が指名した者をこの規則により選考したものとみなす。

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会(平成18年4月1日現在)

委員長 新田栄治(埋蔵文化財調査室 室長)

委員 本田道輝(法文学部)

日隈正守(教育学部)

稲田浩一(理学部)

築瀬 誠(医学部)

山崎要一(歯学部)

筒井俊雄(工学部)

南 雄二(農学部)

佐野正昭(水産学部)

山崎要一(大学院医歯学総合研究科)

鹿児島大学埋蔵文化財調査室(平成18年4月1日現在)

室長(併) 法文学部教授 新田 栄治

主任 准教授 中村 直子

助教 新里 貴之

技術補佐員 篠原美智子

福永美保子

I 2006(平成18年度)の事業概要

2006(平成18)年度は、発掘調査3件、試掘調査1件、立会調査20件を実施した(Tab.1)。農学部PFI関連事業がその主体となっている。

その他、発掘調査に伴う遺跡説明会は1件、整理作業2件、また、発掘調査報告書1冊、年報1冊を刊行した。発掘調査の概略は以下のとおりである。試掘調査、立会調査の詳細に関しては、II章以下に記す。

Tab.1 2006(平成18)年度事業一覧

事業	コード	地区	調査名	日程	担当者	備考
発掘調査	2006-2	郡：D・E-5	農学部1号館改修工事に伴う発掘調査	2006.6.19～10.21	新里	国際航業
	2006-3	郡：Q～S-4・5	教育学部附属小学校改修工事に伴う発掘調査(2次)	2006.6.27～9.15	中村	国際航業
	2006-4	郡：C-4～6	農学部2号館改修工事に伴う発掘調査	2006.10.10～11.30	中村	国際航業
試掘調査	2006-1	桜：C～G-5・6・8・9	桜ヶ丘団地の試掘調査	2006.4.25～5.25	新里	国際航業
立会調査	2006-A	郡：G-4	総合研究博物館掲示板設置工事	2006.4.10	市：有川・岩戸	新里
	2006-B	郡：D-6, G～I-4・7・8, O-6, K-8・10・11, L-6	鹿児島大学(郡元)学園環境改善整備工事	2006.5.22～24.7.11.8.7	市：有川・岩戸・佐々木	中村・新里
	2006-C	郡：D・E-5～8	農学部1号館中庭植栽移設工事	2006.6.5・6	市：有川	新里
	2006-D	郡：D～F-4～9	農学部4号館井水・配管工事	2006.8.7～9・16・17・21・29.9.6・7・13	市：有川・佐々木・児之原	新里・中村
	2006-E	郡：D・E-4～6, E・F-7・8	農学部1・4号館土木工事	2007.1.12.3.13・20.4.4・9・13	市：佐々木・有川・岩戸	新里
	2006-F	郡：D-5	農学部1号館土木工事	2007.3.30	新里	
	2006-G	郡：D～F-3・4	郡元団地正門土木工事	2006.11.17.12.18・26.2.7	市：有川	中村・新里
	2006-H	郡：C-4・5, D・E-4・7	農学部1・2号館植栽移設工事	2006.9.26・28・29.10.2	市：有川・児之原	中村
	2006-I	郡：E-7・8	農学部4号館改修工事	2006.5.8	市：佐々木	中村
	2006-J	郡：Q-9・10	教育学部附属中学校プール工事	2007.1.15	市：有川	中村
	2006-K	郡：C～E-5・6	農学部土木工事(焼酎学講座棟)	2006.12.15.2007.4.13・16・17.5.23	市：佐々木・有川・立部	新里
	2006-L	郡：F-4	連合農学研究科棟前ガス漏れ工事	2006.12.14	新里	(緊急)
	2006-M	郡：D・E-6	農学部1号館電気土木工事	2007.2.21	市：児之原	新里
	2006-N	郡：L-7・8	共通教育3号館雨排水取替工事	2007.3.23	市：佐々木	中村
	2006-O	郡：N・O-6・7	教育学部給水本館修繕工事	2007.3.20	中村	
	2006-P	郡：I-9・10, J-12・13	工学部電気電子工学科棟等空調設備改修工事	2007.3.1	市：岩戸	中村
2006-Q	郡：E-9,F-7	農学部記念碑文・物置設置工事	2007.3.30	中村		
2006-R	郡：J-6, K-7	共通教育棟2号館樹木移植工事	2007.3.9	市：岩戸	中村	
2006-S	郡：D・E-5	農学部1号館配管土木工事	2007.3.20・28・30.4.4・9	市：佐々木・岩戸	新里	
2006-T	郡：H-11	工学部漏水工事	2007.3.29	中村	(緊急)	
遺跡説明会	2006-2	郡：D・E-5	農学部1号館改修工事に伴う発掘調査遺跡説明会	2006.8.12	新里	
整理作業	2005-3	郡：Q-10	教育学部附属中学校保存住居跡埋め戻工事に伴う発掘調査		洗浄・注記・実測・トレース	
	63-1	郡：Q-10	教育学部附属中学校敷地内遺跡(1963年：河口貞徳氏調査)		洗浄・注記・接合・実測	
	93-1・95-1	郡：K・L-5・6	中央図書館増建設に伴う発掘調査(C～E地点)包含層遺物		実測・トレース	
刊行物	発掘調査報告書第3集		鹿児島大学構内遺跡郡元団地Q-10区, K・L-5・6区	2007年3月	新里・中村	
	年報		鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報21	2007年3月	中村・新里	

2006-2 農学部1号館改修工事に伴う発掘調査

調査地点 農学部1号館中庭(郡元団地D・E-5区)

調査期間 平成18年6月19日～10月21日

調査担当 埋蔵文化財調査室 新里貴之

PFI関連事業に伴い、農学部1号館中庭約1200㎡の発掘調査を行なった。調査の結果、弥生時代・古墳時代・近世・近代にいたる包含層が確認され、弥生時代中期の竪穴住居跡、近世・近代の水田跡や多数の土坑、鹿児島高等農林学校の建物跡などの遺構が確認された。弥生時代中期の住居跡の存在は、郡元団地内で初めて検出されたもので、同地点まで弥生時代の居住域が存在することが判明した。山ノ口I式と考えられる土器や剥片石器が得られている。また、近世・近代の遺物は陶磁器類がほとんどで、どれも小さく破片になっており、水田から出土する陶磁器の特徴となっている。近世の大畦をつくる際に、小型の建物を畦付近に設置したことも判明し、近世農業のあり方を具体的に示す遺構として重要と考えられた。正式報告書は2009年度に刊行予定である。

2006-3 教育学部附属小学校改修工事に伴う発掘調査(2次)

調査地点 教育学部附属小学校建物外周(郡元団地Q～S-4・5区)

調査期間 平成18年6月27日～9月15日

調査担当 埋蔵文化財調査室 中村直子

附属小学校改修工事に伴い、小学校校舎約500㎡の発掘調査を行なった。調査の結果、古墳時代から古代(わずかに弥生時代遺物も含む)、近世から近代の水田層が確認された。最下層の地山砂層は河川氾濫層であった。近世から近代の水田層には耕作痕のほか溝状遺構がある。古墳時代から古代にはピットや溝状遺構が確認された。遺物は土器や石器が一定量得られている。

2006-4 農学部2号館改修工事に伴う発掘調査

調査地点 農学部2号館建物外周(郡元団地C-4～6区)

調査期間 平成18年10月10日～11月30日

調査担当 埋蔵文化財調査室 中村直子

PFI関連事業に伴い、農学部2号館を南北と東に挟んだ約250㎡の発掘調査を行なった。東側では表土下2.5mまで河川跡であった。それ以下も河川埋土である。河川埋土より、陶磁器や土器がわずかに出土した。北側では河川跡もしくは氾濫層であった。一部で上部は水田跡、下部が河川跡となっている。南側では、調査区東端に河川跡があり、西側では水田跡が認められ、河川跡岸部分に軽石礫の集積遺構が確認された。遺物から推定して下部の河川跡は、中近世で、上部の水田跡は近世以降のものと考えられる。正式報告書は2009年度に刊行予定である。



PL.1 2006-2



PL.2 2006-3

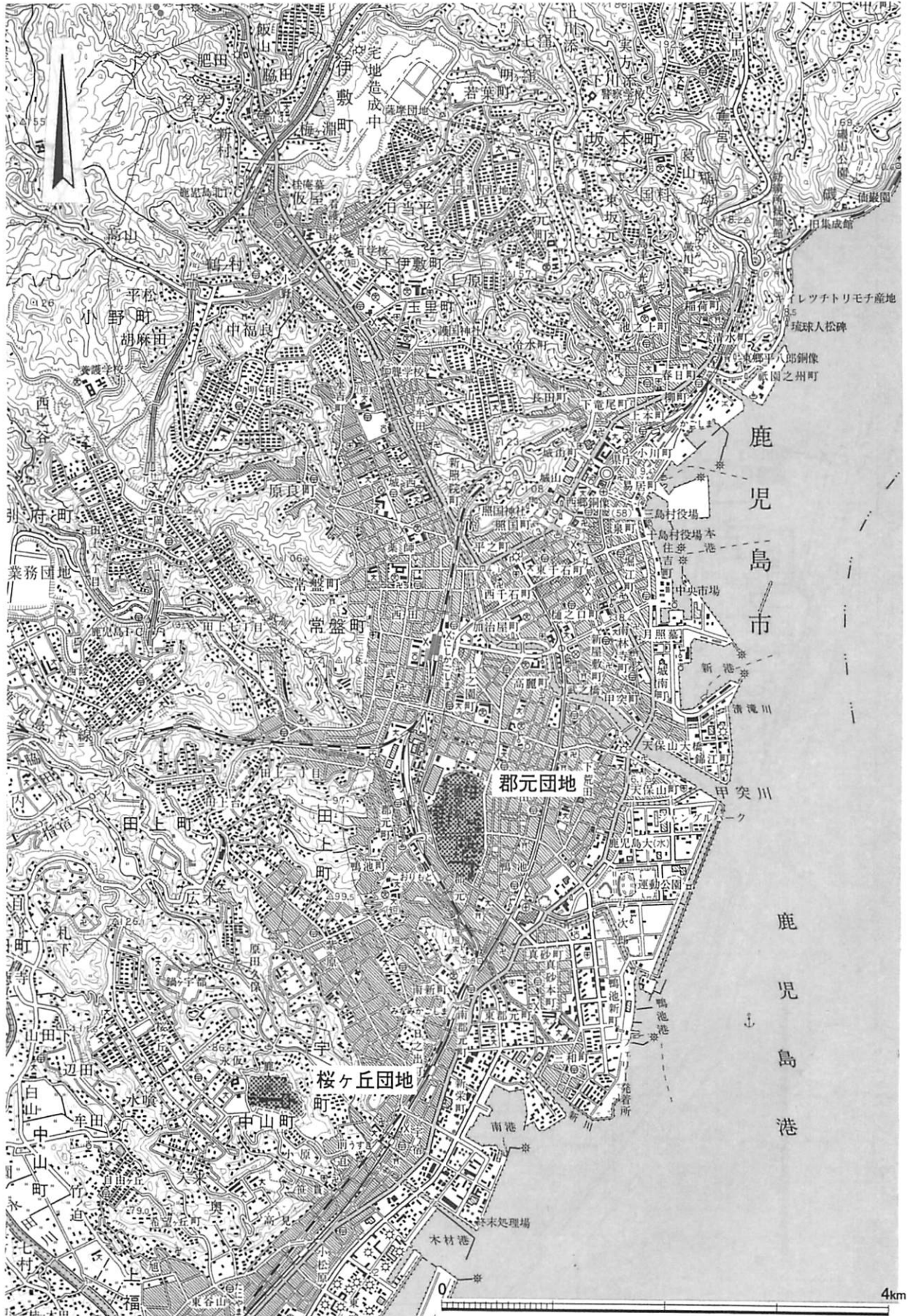


Fig.1 鹿児島大学構内遺跡の位置図 (S=1/50,000)

I 2006 (平成18年度)の事業概要

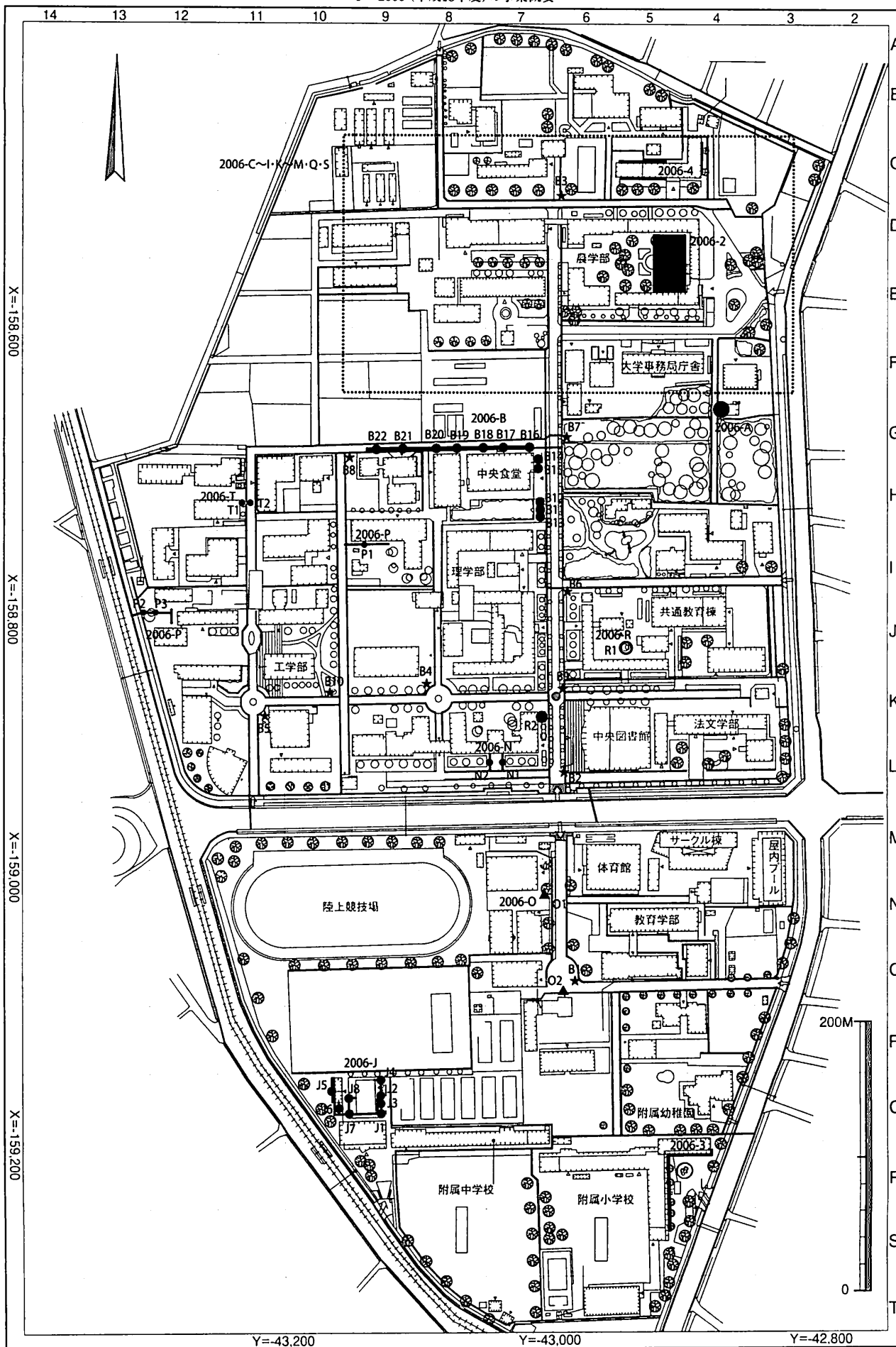


Fig.2 鹿児島大学構内遺跡郡元団地 (S=1/4,000)

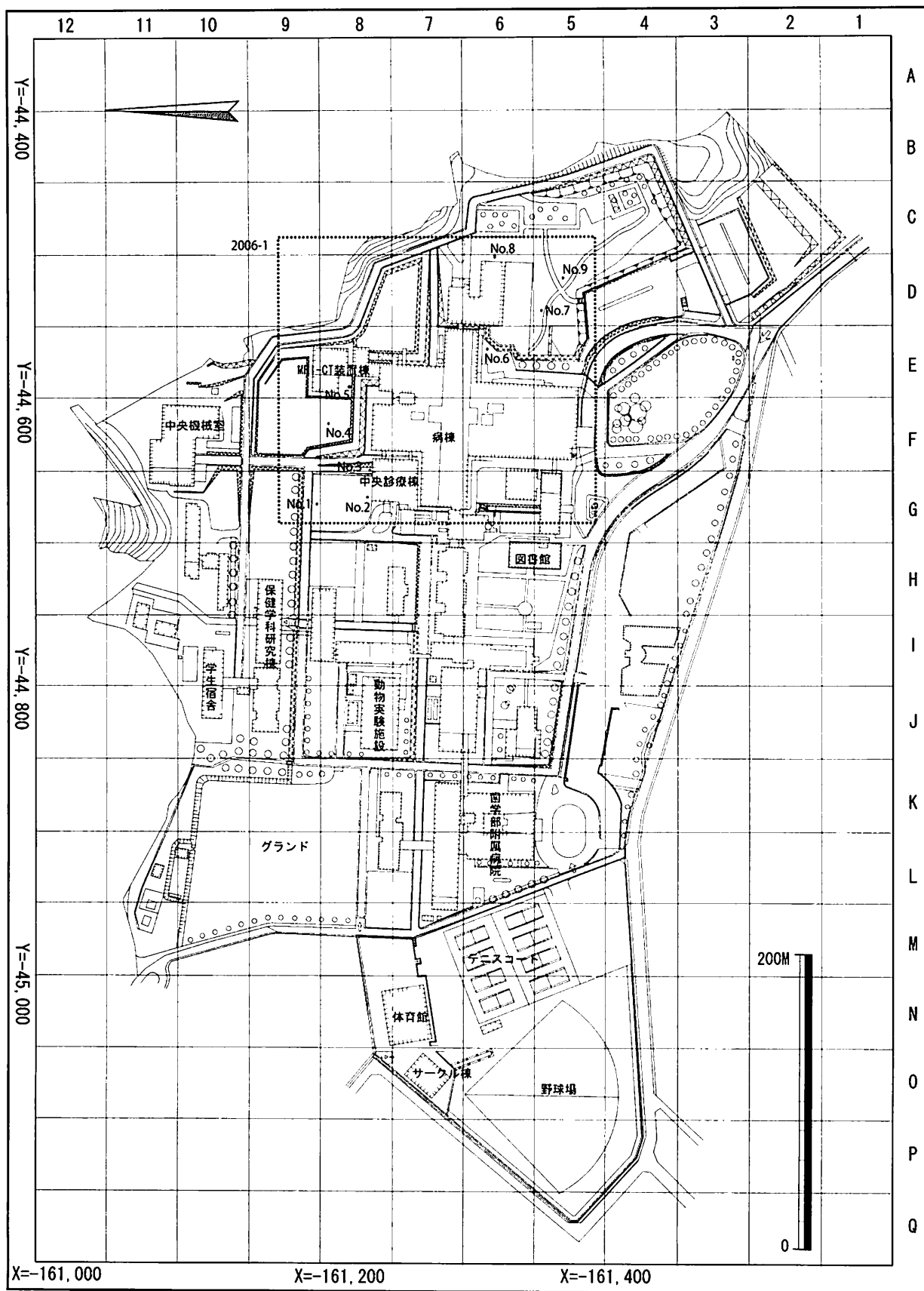


Fig.3 鹿児島大学構内遺跡桜ヶ丘団地 (S=1/4,000)

II 試掘調査

2006-1 桜ヶ丘団地C～G-5・6・8・9区における試掘調査

1 調査にいたる経緯

鹿児島大学では、平成19年度～22年度にかけて、「鹿児島大学構内遺跡」桜ヶ丘団地に、病院・その他病棟・研究棟の増築が計画されている。その予定地区付近ではMRI-CT装置棟で、縄文時代草創期の石鏃や、縄文時代早期の土器・石器¹⁾、後期旧石器時代～縄文時代草創期の細石刃²⁾などが確認されている。

このような状況から、同予定地においても埋蔵文化財の包蔵が予想され、建設予定地及びその周辺施設の全域を対象として、試掘調査を行なうこととなった。

2 調査期間と調査体制

試掘調査は、以下の体制で行なった。

所在地 鹿児島市桜ヶ丘八丁目

調査面積 38.5㎡

調査期間 2006(平成18)年4月25日～5月25日

調査体制 主体者：鹿児島大学埋蔵文化財調査室 室長 新田栄治

担当者：鹿児島大学埋蔵文化財調査室 室員 新里貴之

国際航業株式会社 管理技師 飯田英樹

調査員 長尾聡子

発掘作業員 仮谷アキ・仮谷秋雄・仮谷郁雄・仮谷マサ子・

川島秀義・矢住純子

3 調査経過

試掘調査は、2006年4月25日～5月25日の1ヶ月間実施した。調査地点は、建物の建設地点に9箇所とした。攪乱層である表土と、無遺物層であるサツマテフラは、重機による掘削を行なうこととした。アカホヤテフラは、遺物を含む二次堆積層の場合が多く、人力による掘削となった。各トレンチの掘削面積は、基本的に2×2m・深さ2mとしたが、障害物や遺構の存在、そして最下部の包含層を確認するという関係上、変更を余儀なくされたのが、No3・5・6・8トレンチである。各トレンチは、土層・遺構の平面・壁面ともに実測・写真撮影を行い、埋め戻し・アスファルト舗装を行なって原状に復し、試掘調査を終了した。

4 各地点の状況 (Fig.3～12, PL.3～13)

試掘場所は、標高・方位などから大きく2区に分けられるので、北の標高の高いNo.1～5トレンチを北ブロック、南側の標高の低いNo.6～9を南ブロックとした。現地表面の最高値 (No.4トレンチ)と最低値 (No.6トレンチ)の比高は、約8.5mある。

北ブロック

No.1は、2×2m、深さ2mの範囲で掘削を行なった。包含層の大半が削平されている状況にあり、5d層以下ATテフラ上部まで確認された。

No.2は、2×2m、深さ2mの範囲で掘削を行なった。サツマテフラの下部とチョコ層が確認されている。

No.3は、2×2m、深さ1mの範囲で掘削を行なった。表土除去後、ATテフラのうちいわゆるピンクシラスが確認され、1mほど掘削した時点で調査終了とした。

No.4は、2×2m、深さ2mの範囲で掘削を行なった。アカホヤテフラ・縄文時代早期層・サツマテフラ上部を確認することができた。一部樹根か倒木による土層の乱れが確認できた。表土層から縄文時代晩期から弥生時代の無文土器胴部小破片が1点出土している。

No.5は、支障鉄柵の存在から、1.6×2.4m、深さ2mの範囲を掘削した。結果、チョコ層下部からATテフラ上面までが確認された。

南ブロック

II 試掘調査

No.6は、2×2m、深さ1mの範囲で掘削を行なった。表土除去後、ATテフラのうちいわゆるピンクシラスが確認され、1mほど掘削した時点で調査終了とした。

No.7は、2×2m、深さ2.3mの範囲で掘削を行なった。アカホヤテフラ以下チョコ層上面まで確認することができたが、樹根と倒木痕によって土層が乱されている。表土除去後に層位横転、サツマテフラ上面においても土層の乱れが確認された。表土除去後の縄文早期層上面で、ピット1基が確認された。表土層より黒曜石製鏃の基部片や土器小破片が出土している。

No.8では、2×3.3m、一部を深さ3mまで掘削を行なった。表土直下のアカホヤ層上面で、性格不明の土坑(SK1～3)やピット(Pit1～4)、溝状遺構(SD1)などを確認することができた。これらの遺構は、試掘調査では部分的な検出で性格が確認できないため、本調査を待つこととし、半裁状態のまま埋土を残した状態で埋め戻し保存した。表土層より土器小破片2点、アカホヤテフラ層から無文土器胴部片1点出土した。また、同トレンチでは、アカホヤ中に粒状に木炭らしき炭化物が混じっており、遺構内にも確認されたため、サンプルを採取した。

No.9では、2×2m、一部を深さ2.3mまで掘削を行なった。縄文時代早期層以下チョコ層上面まで確認することができた。一部に樹根による土層の乱れが確認できた。

5 基本層序 (Fig.4～12, PL.3～13)

桜ヶ丘団地の基本層序は、現在のところ、I層(桜ヶ丘団地造営以後)、II層(桜ヶ丘団地造営以前の畑層：ごくまれに中近世遺物が混じる)、III層(黒ボク土：縄文時代晩期～古墳時代前期)、IV層(アカホヤ二次堆積土)、V層(縄文時代早期)、VI層(サツマ)、VII層(チョコ層)、VIII層(シラス)であるが、今回の試掘調査では、最も残りの良い箇所(No.8・9トレンチ)でも基本土層のII・III層が削平されている。しかし、アカホヤテフラ二次堆積土や縄文時代早期層上面で確認されている遺構内に充填している黒色土層は、III層起源のものであると考えられる。

今回は基本土層として、

- 1層 アスファルト舗装や客土、桜ヶ丘団地造成時の攪乱。
- 2層 アカホヤテフラ(K-Ah；約7,300年前)の二次堆積土。今回、1点の土器の出土があった。
- 3層 縄文時代早期層。
- 4層 サツマテフラ(Sm；約12,800年前)。厚い場所で2m程度ある。
- 5層 チョコ層。今回は遺物・遺構の出土・検出なし。
- 6層 シラス；ATテフラ(AT；約29,000年前)。

として記載する。また、No.4、No.6トレンチの表土下位で確認されているATテフラのいわゆるピンクシラスは、6層の深部ではあるものの、全トレンチから序列が決められなかったため、前出2トレンチでは、適宜記載した。

6 遺構 (Fig.10～12, PL.9～13)

No.7トレンチにおいては、表土掘削後、縄文時代早期包含層が確認されたが、その上面でピットが確認されている。

No.8トレンチにおいては、表土掘削後、土坑3基、ピット4基、溝状遺構1基が確認された。また、アカホヤ層掘り下げ中に、明瞭になった土坑やピットもある(SK3・Pit4)。SD1については、上面で現代遺物が出土していることや溝断面が膨れ状を呈すること、遺構ラインが明瞭であることなどから、現代(桜ヶ丘団地造営前)のイモ穴である可能性が高い。

その他の遺構の性格は不明であり、サツマテフラまで掘り下げて、平面や壁面の観察を行なうと、かなりの確率で、局部的な層位横転(倒木痕)が見出される。また、ピットもかなり深いものもあり、樹根を思わせる。ほかにもアカホヤ火山灰が二次堆積層である可能性が高いこと、遺物の少ないことなどから考えあわせると、遺構として認定したものについても、調査範囲が狭小のため、局部的層位横転を誤認した可能性もある。したがって、遺構認定は急がず、同地点の正式調査において再確認を行なうこととし、遺構は半裁した状態で埋土を残して埋め戻した。

7 遺物

No.4トレンチの表土層で土器無文胴部片が1点得られている。また、No.7トレンチ表土層で石鏃が出土している。石鏃 (Fig.10-1, PL.9)は先端が欠失しているが、幅1.2cm、最大厚0.5cmを計る。三船産黒曜石製と考えられる。No.8トレンチでは、表土層で土器無文胴部片2点とアカホヤテフラ層で土器の無文胴部小破片1点がえられている (PL.10)。

また、No.8トレンチにおいては、アカホヤ層や同層検出遺構などから、木炭粒と思しき炭粒が多量に出土したため、サンプリングを行なった。しかし、黒色化した樹根の可能性もある。

8 まとめ

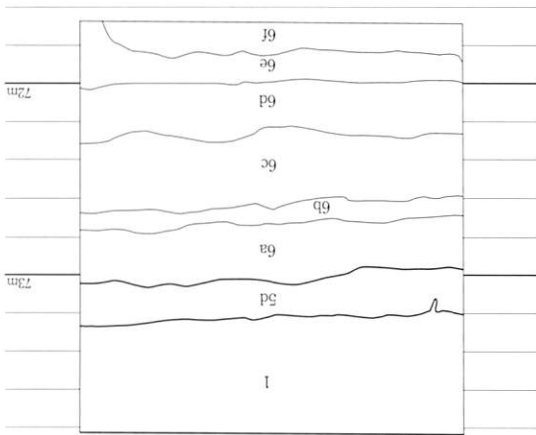
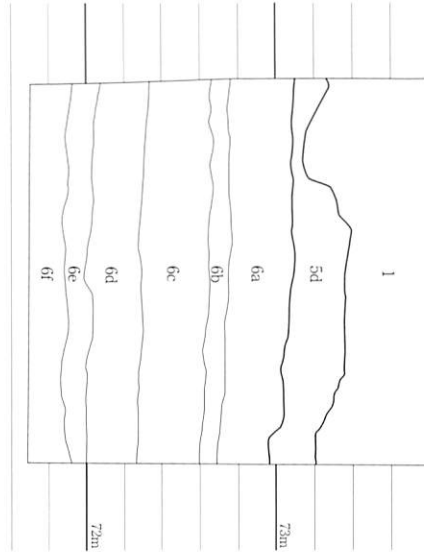
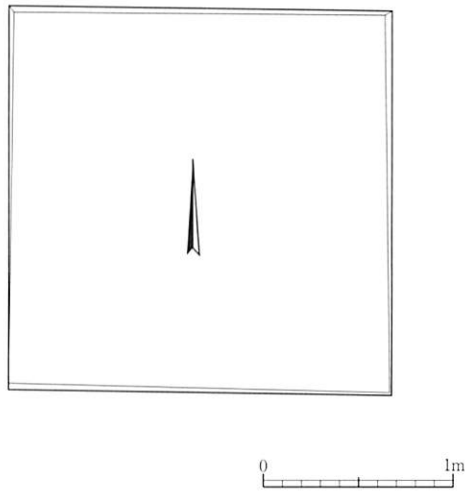
今回の試掘調査の結果からは、ほぼ現地地形が旧地形を反映しているものと考えられ、桜ヶ丘団地の北側から南側と東側に傾斜していくものと判断された。遺物の出土は極端に少ないが、No.7・8トレンチでは、遺構らしきものが確認され、包含層の残存状況も南ブロックでは良好であった。

これらの両試掘ブロックの北西側部には、縄文時代早期の住居跡が確認されたI・J-10区：受水槽設置地点³⁾、後期旧石器時代～縄文草創期の時期に属すると考えられる陥穴が確認されたH・I-8・9区：保健学科建設地⁴⁾、弥生時代前期の住居跡や弥生時代終末期の住居跡、溝状遺構が確認されたI-8区：難治性ウイルス疾患研究センター、K-8区：現グラウンド^{5)・6)・7)}などがあり、今回の試掘調査の北側ブロック東側に位置するE-8・9区：MRI-CT装置棟^{1)・2)}では、チョコ層より、後期旧石器時代～縄文時代草創期と考えられる細石刃や縄文時代草創期の石鏃が確認されている。

桜ヶ丘団地では、後世の削平も著しいが、地点によって各層から遺構・遺物の検出・出土が見られるため、工事に際しては、埋蔵文化財への慎重な対応が必要である。

文献

- 1) 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1990「鹿児島大学宇宿団地E-8・9区 (MRI-CT装置棟建築地)における発掘調査報告」[鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報]V
- 2) 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1996「鹿児島大学構内遺跡桜ヶ丘団地E-8・9区 (MRI-CT装置棟増築地)における埋蔵文化財発掘調査事業報告」
- 3) 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 2000「桜ヶ丘団地I・J-10区 (受水槽設置地点)における発掘調査」[鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報]14
- 4) 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 2001「鹿児島大学構内遺跡桜ヶ丘団地H・I-8・9地点 (医学部保健学科棟建設地)における発掘調査事業報告」
- 5) 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1988「鹿児島大学宇宿団地I-8区 (医学部臨床研究棟増築地)における発掘調査報告」[鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報]III
- 6) 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 2002「桜ヶ丘団地I-8区 (難治性ウイルス疾患研究センター増築地)の発掘調査」[鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報]16
- 7) 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 2003「2001-D 医学部保健学科新営その他工事に伴う立会調査」[鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報]17



- 1層 攪乱。
- 5層 チョコ層。
- 5d層 黒褐色10YR2/2シルト。締まりやや悪い。やや粘質。
- 6層 ATテフラ。
- 6a層 褐色10YR4/4シルト。0.1～2cm大のパミス混じり(少)。かなり締まり良い。樹根が多数入る。
- 6b層 褐色10Y4/4シルトに、明黄褐色7.5YR5/8のパミス(0.1～3cm大)混じり(多)。かなり締まり良い。部分的にパミスは消失する。
- 6c層 褐色10YR4/4シルト。0.5～3cm大のパミス混じり(少)。締まり良い。
- 6d層 明黄褐色10YR6/6シルト質細砂。0.5～3cm大のパミス混じり(少)。締まりやや悪い。部分的に茶色のシミが混じる。
- 6e層 浅黄色2.5Y7/3シルト質細砂。0.5～3cm大のパミス混じり(少)。締まりやや悪い。
- 6f層 明黄褐色10YR6/6、黄褐色10YR5/6、にぶい黄色2.5Y6/4粗細砂。明黄褐色2.5Y6/6パミス(0.5～15cm大)混じり(極多)。締まり悪い。

Fig.4 No.1トレンチ土層 (S=1/40)



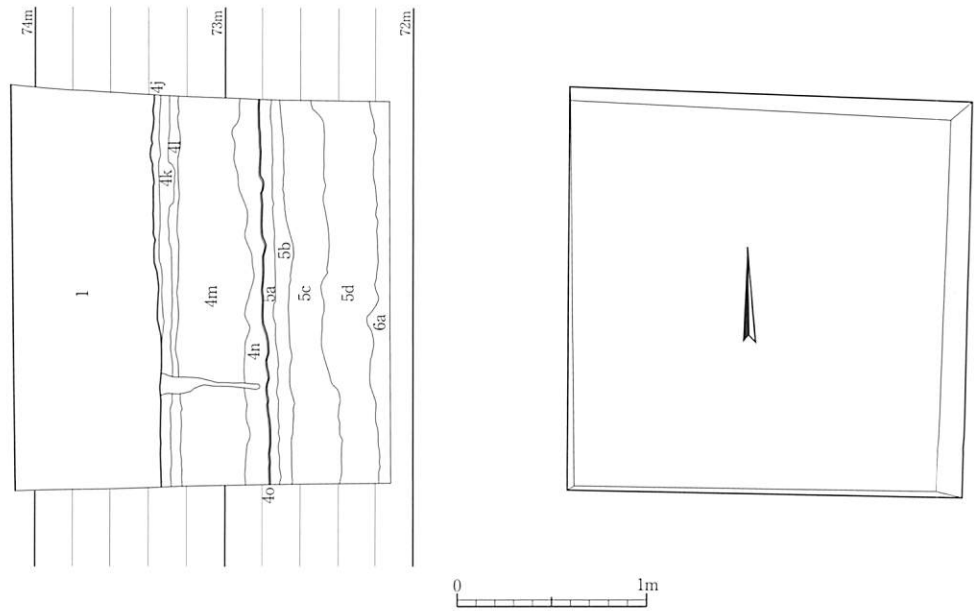
No.1トレンチ東壁



No.1トレンチ南壁

PL.3 No.1トレンチ壁面

II 試掘調査



- 1層 攪乱。
 4層 サツマテフラ。
 4i層 黄褐色10YR5/5粗砂。0.5～5cm大のパミス混じり。もろい。
 4j層 黄褐色10YR5/6シルト質粗砂。0.5～2cm大のパミス混じり。堅い。
 4k層 黄褐色10YR5/6粗砂。0.5～5cm大のパミス混じり。もろい。
 4l層 褐色10YR4/6シルト質粗砂。0.5～2cm大のパミス混じり。堅い。
 4m層 明黄褐色10YR6/8パミス。0.5～5cm大のパミス混じり。もろい。
 4n層 にぶい黄褐色10YR6/4粗砂。0.5～5cm大のパミス混じり。もろい。
 4o層 黄褐色10YR5/4細砂。もろい。
 5層 チョコ層。
 5a層 黒色10YR2/1シルト。締まりやや悪い。粘質。
 5b層 黒褐色10YR2/3シルト。締まりやや悪い。粘質。
 5c層 褐色7.5YR4/3シルト。締まりやや悪い。粘質。
 5d層 黒褐色7.5YR2/2シルト。締まりやや悪い。やや粘質。
 6層 ATテフラ。
 6a層 暗褐色10YR3/4シルト。締まりやや悪い。やや粘質。

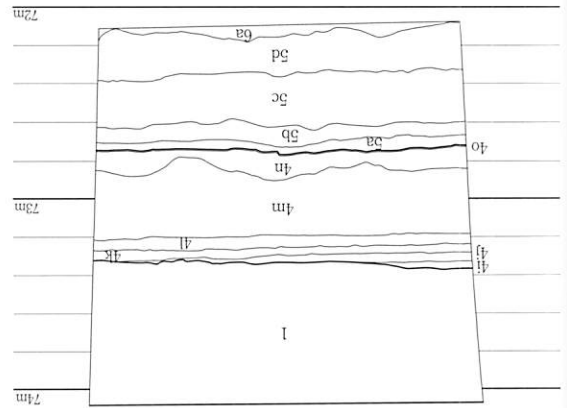
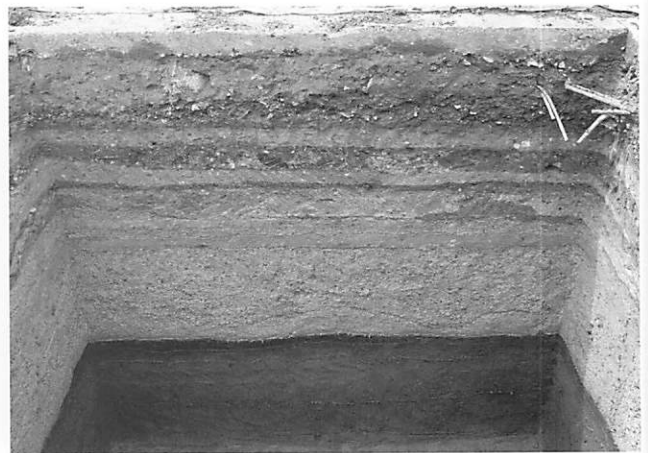


Fig.5 No.2トレンチ土層 (S=1/40)



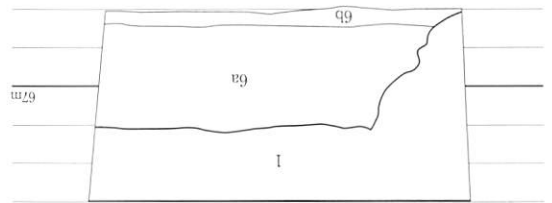
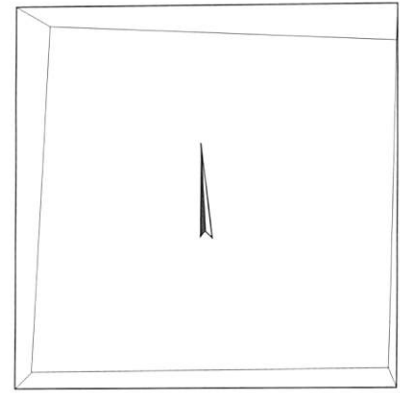
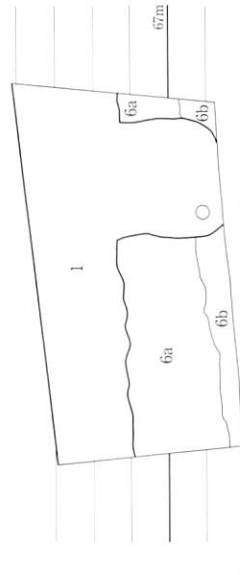
No.2トレンチ西壁



No.2トレンチ南壁

PL.4 No.2トレンチ壁面

II 試掘調査

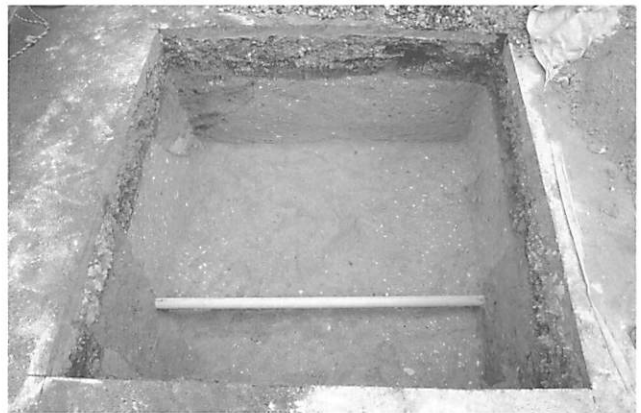


1層 擾乱。
 6層 ATテフラ。
 6a層 橙色5YR6/6細砂。0.5～5cm大のパミス混じり。締まり悪い。
 6b層 にぶい橙色7.5YR6/4細砂。0.5～5cm大のパミス混じり。締まり悪い。

Fig.6 No.3トレンチ土層 (S=1/40)



No.3トレンチ位置



No.3トレンチ完掘(北より)

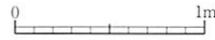
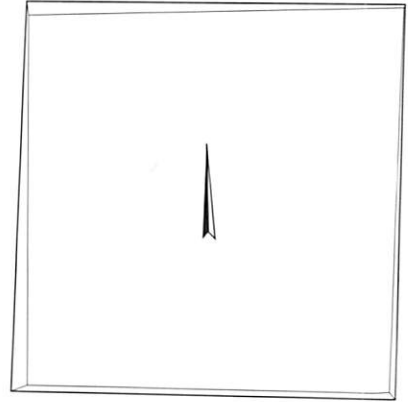
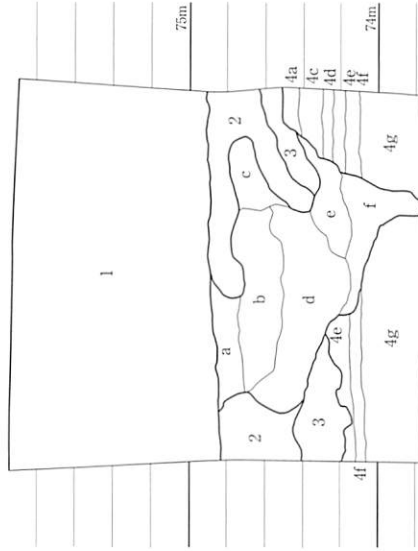


No.3トレンチ西壁



No.3トレンチ南壁

PL.5 No.3トレンチ位置・壁面



- 1層 攪乱。土器片出土。
 2層 アカホヤテフラ二次堆積土。褐色10YR4/6シルト。0.5～5cm大のパミス混じり。やや締まり悪い。
 3層 縄文時代早期層。黒色10YR2/1砂質シルト。0.5～3cm大のパミス混じり(多)。やや締まり悪い。
 4層 サツマテフラ。
 4a層 褐色10YR4/4粗砂。パミス混じり。脆い。
 4c層 褐色7.5YR4/6粗砂。堅い。
 4d層 明褐色7.5YR5/8粗砂。パミスがびっしりと詰まる。もろい。
 4e層 明褐色7.5YR5/8パミス。もろい。
 4f層 褐色7.5YR4/6細砂。堅い。
 4g層 明褐色7.5YR5/8パミス。もろい。
 A層 2層と3層の混土。
 a～h層 層位横転によって乱された土層。
 a層 黒褐色10YR2/3砂質シルト。0.5～1cm大のパミス混じり。締まり良い。本来は縄文早期層。
 b層 黒褐色10YR2/2砂質シルト。0.5～2cm大のパミス混じり。締まり良い。本来は縄文早期層。
 c層 黒褐色10YR2/3砂質シルト。1cm大のパミスが混じる。締まり良い。アカホヤテフラ二次堆積土と縄文早期層の混土。
 d層 暗褐色砂質シルト。あとはb層に類似。
 e層 c層に類似。
 f層 におい黄褐色10YR4/3砂質シルト。1cm大のパミス混じり。やや締まり悪い。

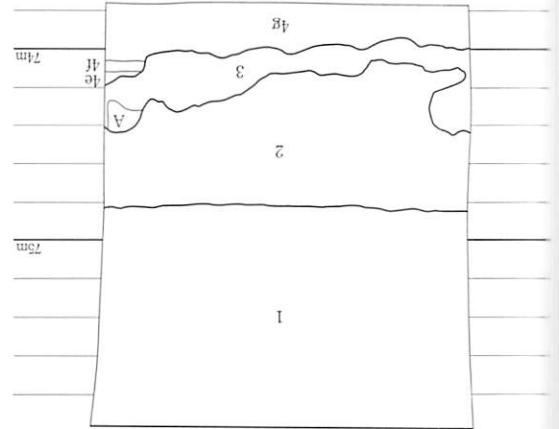


Fig.7 No.4トレンチ土層 (S=1/40)



No.4トレンチ西壁



No.4トレンチ南壁

PL.6 No.4トレンチ壁面

II 試掘調査

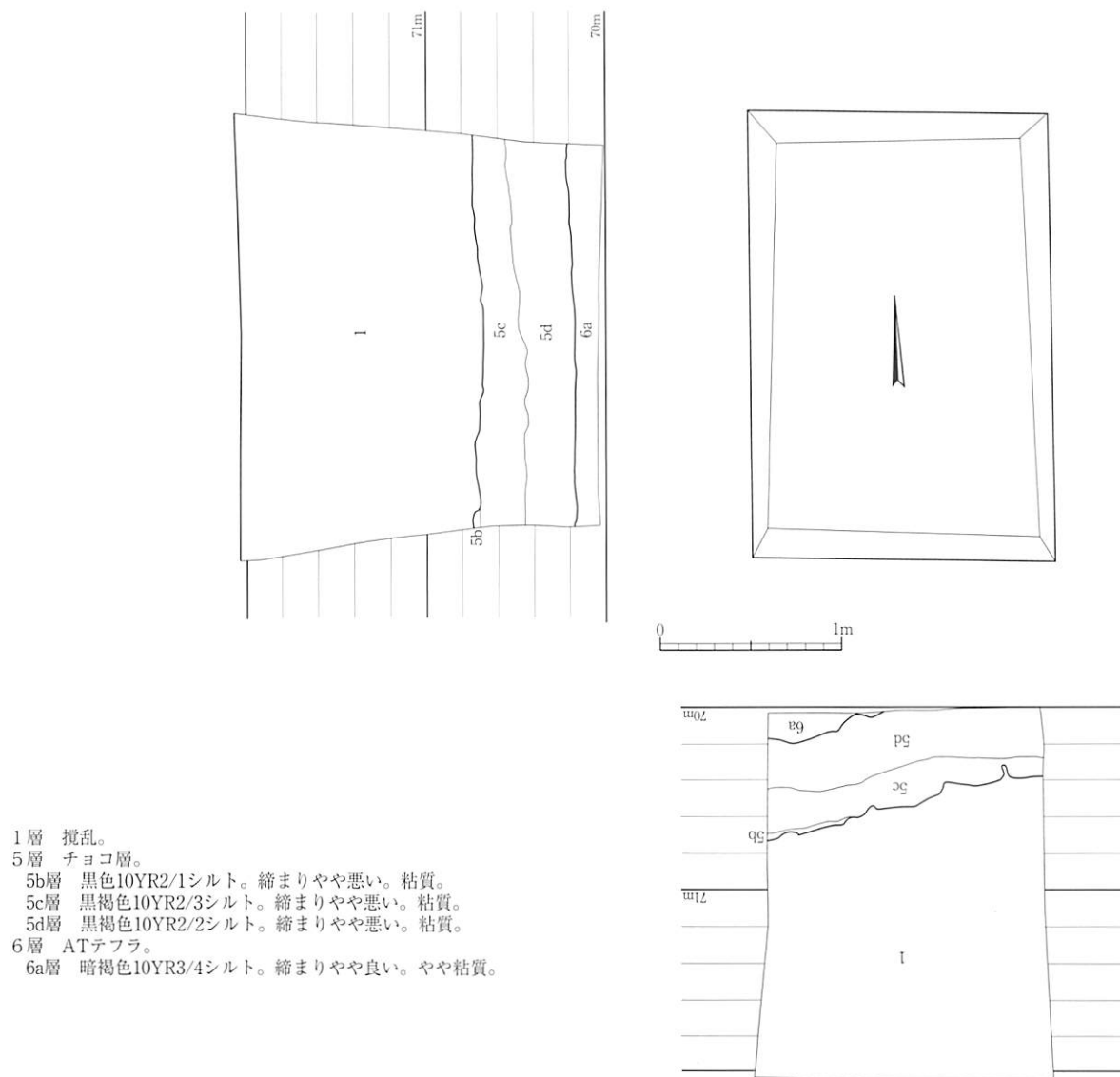


Fig.8 No.5トレンチ土層 (S=1/40)



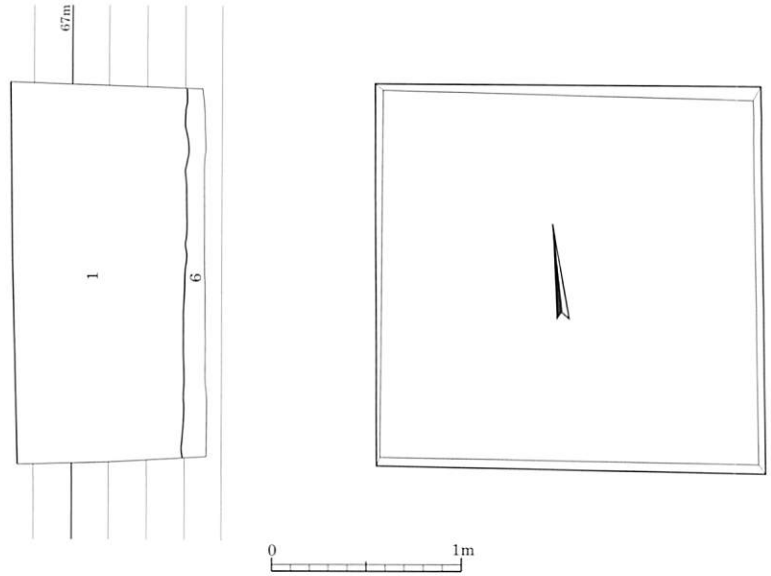
No.5トレンチ西壁



No.5トレンチ南壁

PL.7 No.5トレンチ壁面

II 試掘調査



1層 攪乱。
 6層 ATテフラ (ピンクシラス)。橙色5YR7/6粗砂。0.5～20cm大の
 パミス混じり。締まりやや良い。

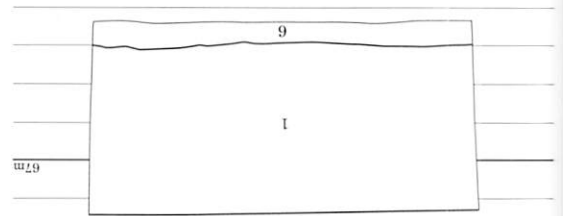


Fig.9 No.6トレンチ土層 (S=1/40)



No.6トレンチ位置



No.6トレンチ完掘(東より)



No.6トレンチ西壁



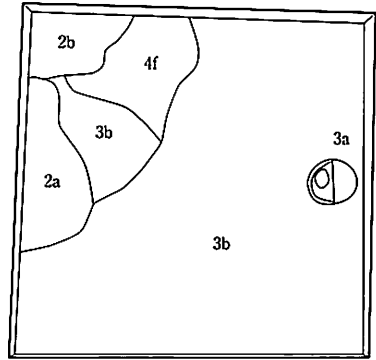
No.6トレンチ南壁

PL.8 No.6トレンチ位置・壁面

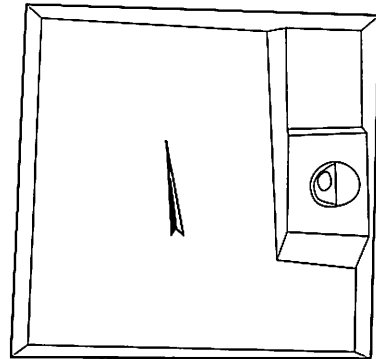
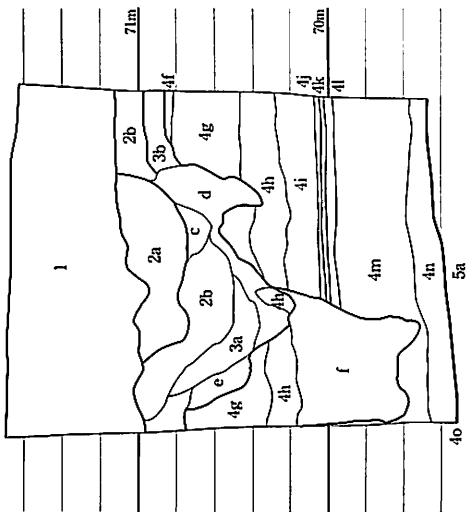
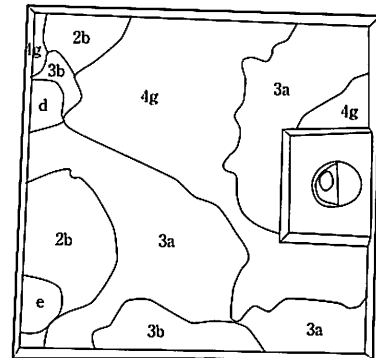
II 試掘調査

- 1層 攪乱。石鏃出土。
- 2層 アカホヤテフラ二次堆積土。
 - 2a層 褐色10YR4/6シルト。1~2cm大のバミス混じり。やや締まり良い。
 - 2b層 黒褐色10YR2/3砂質シルト。0.5~1cm大のバミス混じり。締まり良い。
- 3層 縄文時代早期層。
 - 3a層 黒10YR2/1砂質シルト。0.5~3cm大のバミス混じり。締まり良い。
 - 3b層 黒褐色10YR2/3砂質シルト。0.5~3cm大のバミス混じり。締まり良い。
- 4層 サツマテフラ。
 - 4f層 褐色7.5YR4/6細砂。堅い。
 - 4g層 明褐色7.5YR5/8バミス。もろい。
 - 4h層 明褐色7.5YR5/8シルト。かなり締まり良い。
 - 4i層 黄褐色10YR5/5粗砂。0.5~5cm大のバミス混じり。もろい。
 - 4j層 黄褐色10YR5/6シルト質粗砂。0.5~2cm大のバミス混じり。かなり締まり良い。
 - 4k層 黄褐色10YR5/6粗砂。0.5~5cm大のバミス混じり。もろい。
 - 4l層 褐色10YR4/6シルト質粗砂。0.5~2cm大のバミス混じり。堅い。
 - 4m層 明黄褐色10YR6/8バミス。0.5~5cm大のバミス混じり。もろい。
 - 4n層 におい黄褐色10YR6/4粗砂。0.5~5cm大のバミス混じり。もろい。
 - 4o層 黄褐色10YR5/4細砂。もろい。
- 5層 チョコ層。
 - 5a層 黒色10YR2/1シルト。締まりやや悪い。粘質。

【表土除去後】



【サツマテフラ上面】



- a~i層 樹根や倒木によって乱された土層。
- a層 3a層内に4f層がブロック状に混じる。締まり良い。
- b層 暗褐色10YR3/4砂質シルト。0.5~5cm大バミス混じり。締まり良い。
- c層 黒褐色10YR2/3砂質シルト。0.5~1cm大のバミス混じり。締まり良い。
- d層 暗褐色10YR3/4砂質シルト。0.5~3cm大のバミス混じり。やや締まり良い。
- e層 暗褐色10YR3/4砂質シルト。0.5~5cm大バミス混じり。締まり良い。
- f層 明褐色7.5YR5/8細粗砂。0.5~2cm大のバミス混じり。もろい。

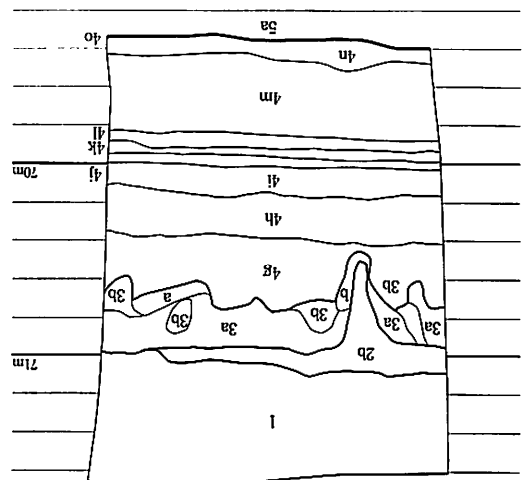
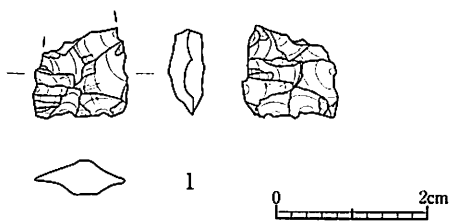


Fig.10 No.7トレンチ土層 (S=1/40)・石鏃 (S=1/1)

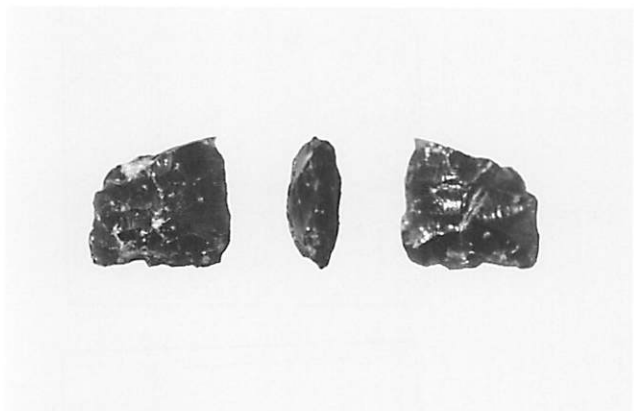
II 試掘調査



No.7トレンチ位置(東より)



No.7トレンチ表土除去後(南より)



No.7トレンチ表土層出土石鏝



No.7トレンチpit1半裁(西より)



No.7トレンチサツマテフラ上面(北より)



No.7トレンチ完掘(北より)



No.7トレンチ西壁



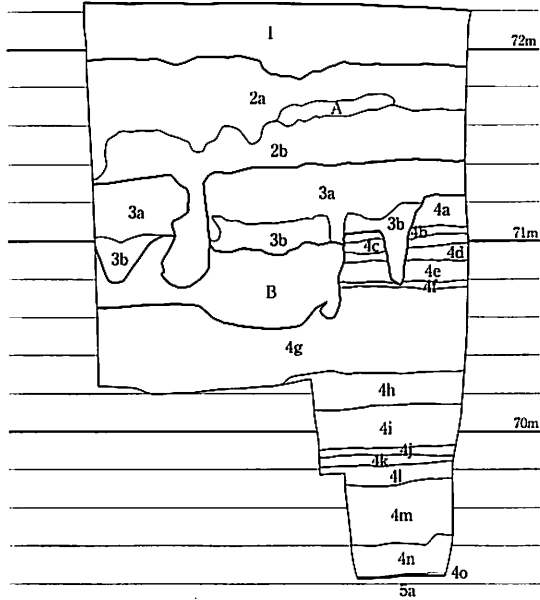
No.7トレンチ南壁

PL.9 No.7トレンチ

II 試掘調査

Pit1 黒色10YR2/1シルト。締まり良い。
 SK1
 埋土α：黒褐色10YR2/2シルト。アカホヤブロック混じり(少)。締まり良い。
 埋土β：黒褐色10YR2/3シルト。1cm大のパミスがわずかに混じる。アカホヤブロック混じり。締まり良い。
 埋土γ：黒褐色10YR2/2シルト。0.2~1cm大のパミス混じり(少)。細文早期層が混じる。締まり良い。
 SK2 黒褐色10YR2/3シルト。締まり良い。
 SD1 黒褐色10YR2/2シルトベースに、アカホヤがブロック状に混じる(多)。他の遺構と異なり、掘削ラインが明瞭。上部でプラスチック製ボタンが出土。

Pit2 黒色10YR2/1シルト。締まり良い。
 Pit3 黒色10YR2/1シルト。締まり良い。
 Pit4 黒色10YR2/1シルト。締まり良い。木炭混じり。
 SK3 黒褐色10YR2/3シルト。締まり良い。上部に木炭混じり。



1層 攪乱。土器出土。
 2層 アカホヤテフラ二次堆積土。土器出土。
 2a層 褐色10YR4/4シルト。0.2~1cm大のパミス混じり。締まり良い。
 2b層 黒褐色10YR砂質シルト。0.5~2cm大のパミス混じり。締まり良い。
 3層 細文時代早期層。
 3a層 黒色10YR2/1砂質シルト。0.2~1cm大のパミス混じり(多)。締まり良い。
 3b層 3a層と4a層の混土。
 4層 サツマテフラ。
 4a層 褐色10YR4/4粗砂。パミス混じり。脆い。
 4b層 4c層が水分を含んで脱色された靨の土層。明褐色7.5YR5/6砂質シルト。0.5~5cm大のパミス混じり。もろい。
 4c層 褐色7.5YR4/6粗砂。堅い。
 4d層 明褐色7.5YR5/8粗砂。パミスがびっしりと詰まる。もろい。
 4e層 明褐色7.5YR5/8パミス。もろい。
 4f層 褐色7.5YR4/6細砂。堅い。
 4g層 明褐色7.5YR5/8パミス。もろい。
 4h層 明褐色7.5YR5/8シルト。かなり締まり良い。
 4i層 黄褐色10YR5/5粗砂。0.5~5cm大のパミス混じり。もろい。
 4j層 黄褐色10YR5/6シルト質粗砂。0.5~2cm大のパミス混じり。かなり締まり良い。
 4k層 黄褐色10YR5/6粗砂。0.5~5cm大のパミス混じり。もろい。
 4l層 褐色10YR4/6シルト質粗砂。0.5~2cm大のパミス混じり。堅い。
 4m層 明黄褐色10YR6/8パミス。0.5~5cm大のパミス混じり。もろい。
 4n層 におい黄褐色10YR6/4粗砂。0.5~5cm大のパミス混じり。もろい。
 4o層 黄褐色10YR5/4細砂。もろい。
 A~D層 樹根による乱れや水の浸透で変色した土層
 A層 2a層に黄褐色10YR5/8パミスブロック混じり。締まり良い。
 B層 4g層ベースに、4d~4f層の混土。
 C層 黒褐色10YR2/2砂質シルト。
 D層 4e層ベースに、4f層が混じる。

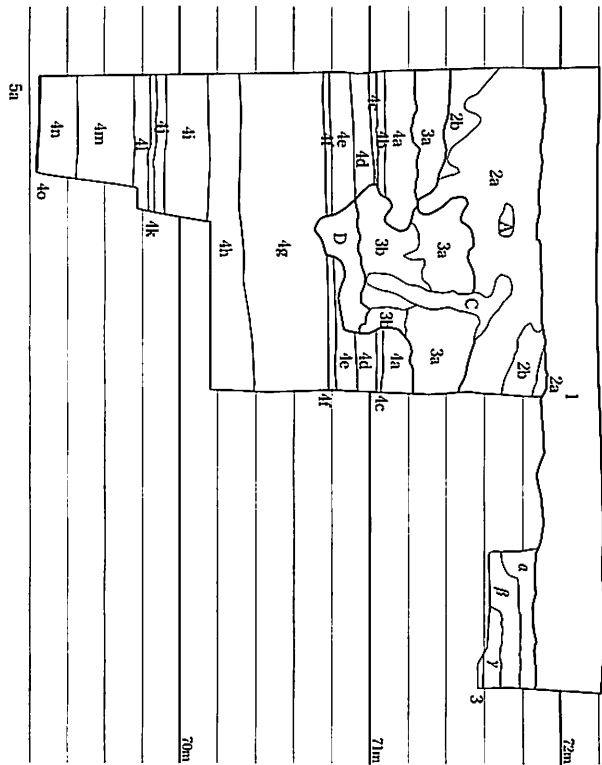
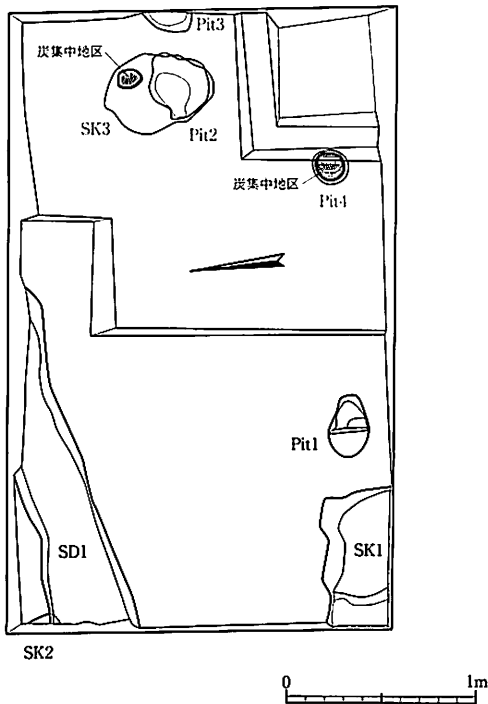


Fig.11 No.8トレンチ S=1/40

II 試掘調査



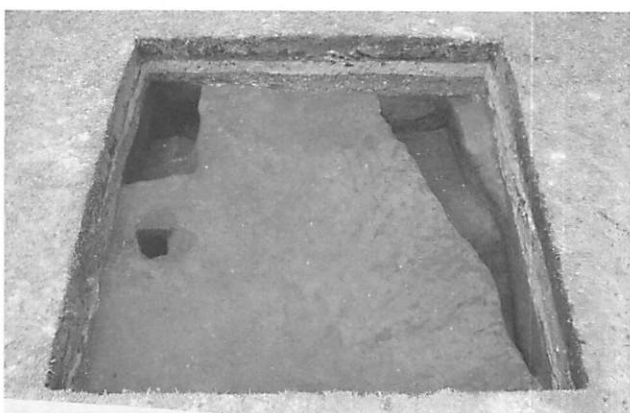
No.8トレンチ位置(東より)



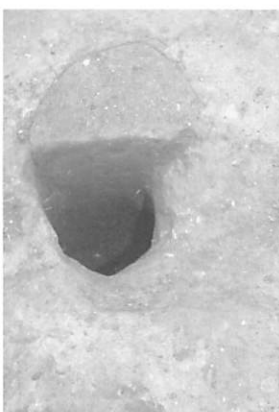
No.8トレンチ表土除去後(東より)



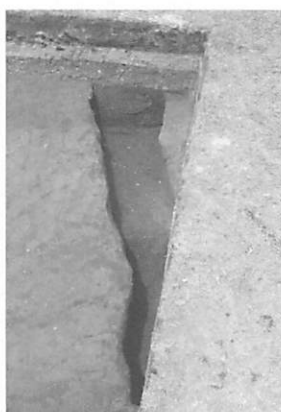
No.8トレンチ1層(上段)・2層(下段)出土土器



No.8トレンチpit1半裁,SK1完掘,SD2完掘(東より)



No.8トレンチpit1半裁(東より)



No.8トレンチSD1(東より)



No.8トレンチSK1(北より)



No.8トレンチSK1埋土



No.8トレンチSD1・SK2埋土

PL.10 No.8トレンチ(1)

II 試掘調査



No.8トレンチ東側拡張と遺構検出(西より)



No.8トレンチpit2・3半裁(西より)



No.8トレンチ2層掘り下げ中検出SK3・pit4(北より)



No.8トレンチpit4検出,木炭状粒子の集中(南より)



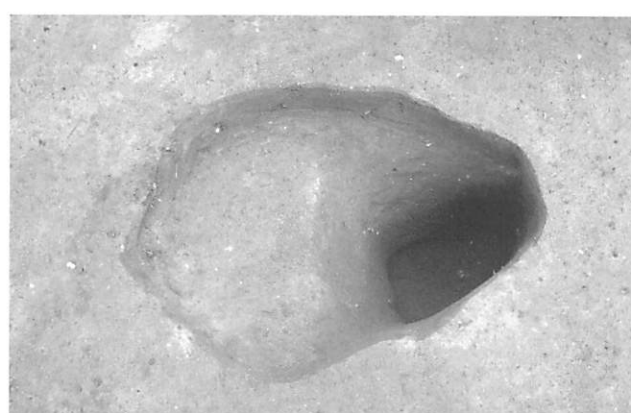
No.8トレンチSK2半裁(西より)



No.8トレンチpit4完掘(西より)



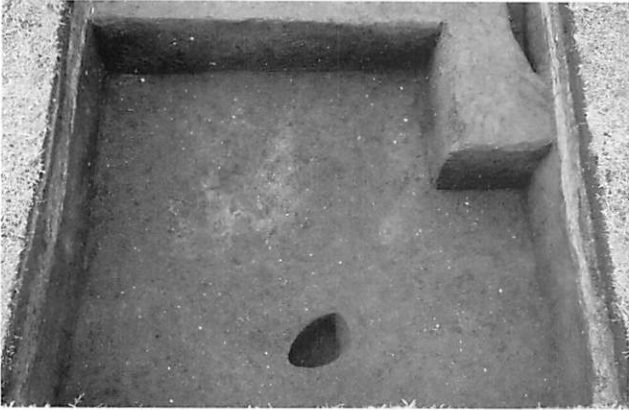
No.8トレンチSK2掘り下げ中木炭状粒子の集中(北より)



No.8トレンチSK2完掘

PL.11 No.8トレンチ(2)

II 試掘調査



No.8トレンチ縄文時代早期層上面(東より)



No.8トレンチサツマテフラ層上面(東より)



No.8トレンチサツマテフラ掘り下げ中(北より)



No.8トレンチ東壁上部



No.8トレンチ南壁上部



No.8トレンチ東壁



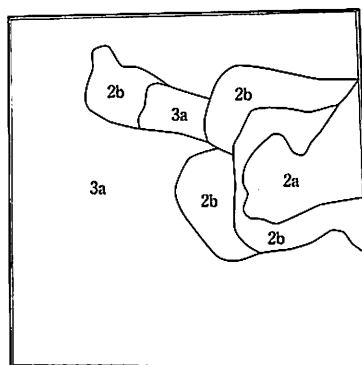
No.8トレンチ南壁



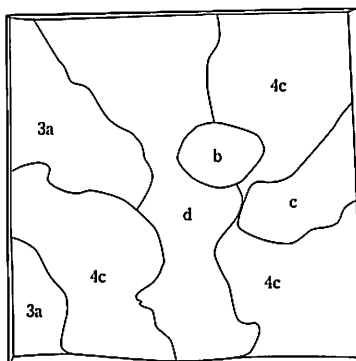
No.8トレンチ東壁サツマテフラ下部とチョココ層

PL.12 No.8トレンチ(3)

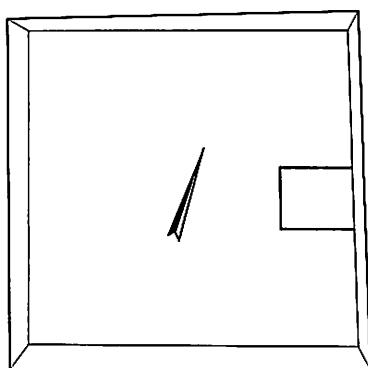
II 試掘調査



【表土除去後】



【サツマテフラ上面】



- 1層 攪乱。
- 2層 アカホヤテフラ。
- 2b層 アカホヤテフラ二次堆積土。暗褐色10YR3/3シルト。
- 3層 縄文時代早期層
- 3a層 黒色10YR1.7/1砂質シルト。1cm大のバミス混じり。締まり良い。
- 3b層 黒色10YR2/1砂質シルトベースに、サツマ粗砂混じり。締まりやや良い。
- 4層 サツマテフラ。
- 4c層 褐色7.5YR4/6粗砂。堅い。
- 4d層 明褐色7.5YR5/8粗砂。バミスがびっしりと詰まる。もろい。
- 4e層 明褐色7.5YR5/8バミス。もろい。
- 4f層 褐色7.5YR4/6細砂。堅い。
- 4g層 明褐色7.5YR5/8バミス。もろい。
- 4h層 明褐色7.5YR5/8シルト。かなり締まり良い。
- 4i層 黄褐色10YR5/5粗砂。0.5～5cm大のバミス混じり。もろい。
- 4j層 黄褐色10YR5/6シルト質粗砂。0.5～2cm大のバミス混じり。かなり締まり良い。
- 4k層 黄褐色10YR5/6粗砂。0.5～5cm大のバミス混じり。もろい。
- 4l層 褐色10YR4/6シルト質粗砂。0.5～2cm大のバミス混じり。堅い。
- 4m層 明黄褐色10YR6/8バミス。0.5～5cm大のバミス混じり。もろい。
- 4n層 におい黄褐色10YR6/4粗砂。0.5～5cm大のバミス混じり。もろい。
- 4o層 黄褐色10YR5/4細砂。もろい。
- a～d層 樹根によって乱された土層。
- a層 黒色10YR2/1砂質シルトベースに、サツマバミスのブロック混じり。
- b層 a層に同じ。
- c層 褐色10YR4/4シルト。締まり良い。
- d層 4g層ベースに、3a層が貫入する。締まり良い。

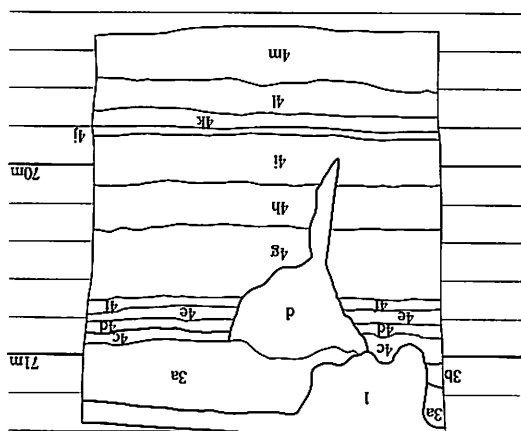
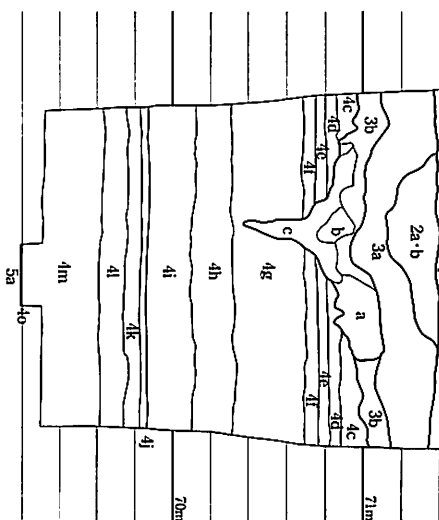


Fig.12 No.9トレンチ土層 (S=1/40)

II 試掘調査



No.9トレンチ位置(北より)



No.9トレンチ表土除去後(北より)



No.9トレンチサツマテフラ上面検出(北より)



No.9トレンチ縄文時代早期層除去後(北より)



No.9トレンチ東壁



No.9トレンチ東壁



No.9トレンチ東壁チョコ層検出



No.9トレンチ南壁

PL.13 No.9トレンチ

Ⅲ 立会調査

2006(平成18)年度は、郡元団地内の立会調査20件を実施した。国立大学法人化以後、調査は鹿児島市教育委員会が担当することになっているが、ガス漏れや漏水などの緊急時や、双方の日程の都合のつかない場合は、埋蔵文化財調査室単独で調査を行なっている。以下にその概要を記す。遺物の詳細は本文とTab.2・3参照。

2006-A 総合研究博物館掲示板設置工事 (Fig.3)

調査地点 郡元団地G-4区

調査期間 2006年4月10日

調査担当 鹿児島市教育委員会 有川孝行・岩戸孝夫

埋蔵文化財調査室 新里貴之

総合研究博物館前において、掲示板設置のため、基礎部分の立会調査を行なった。掘削したところ、地表下60cm

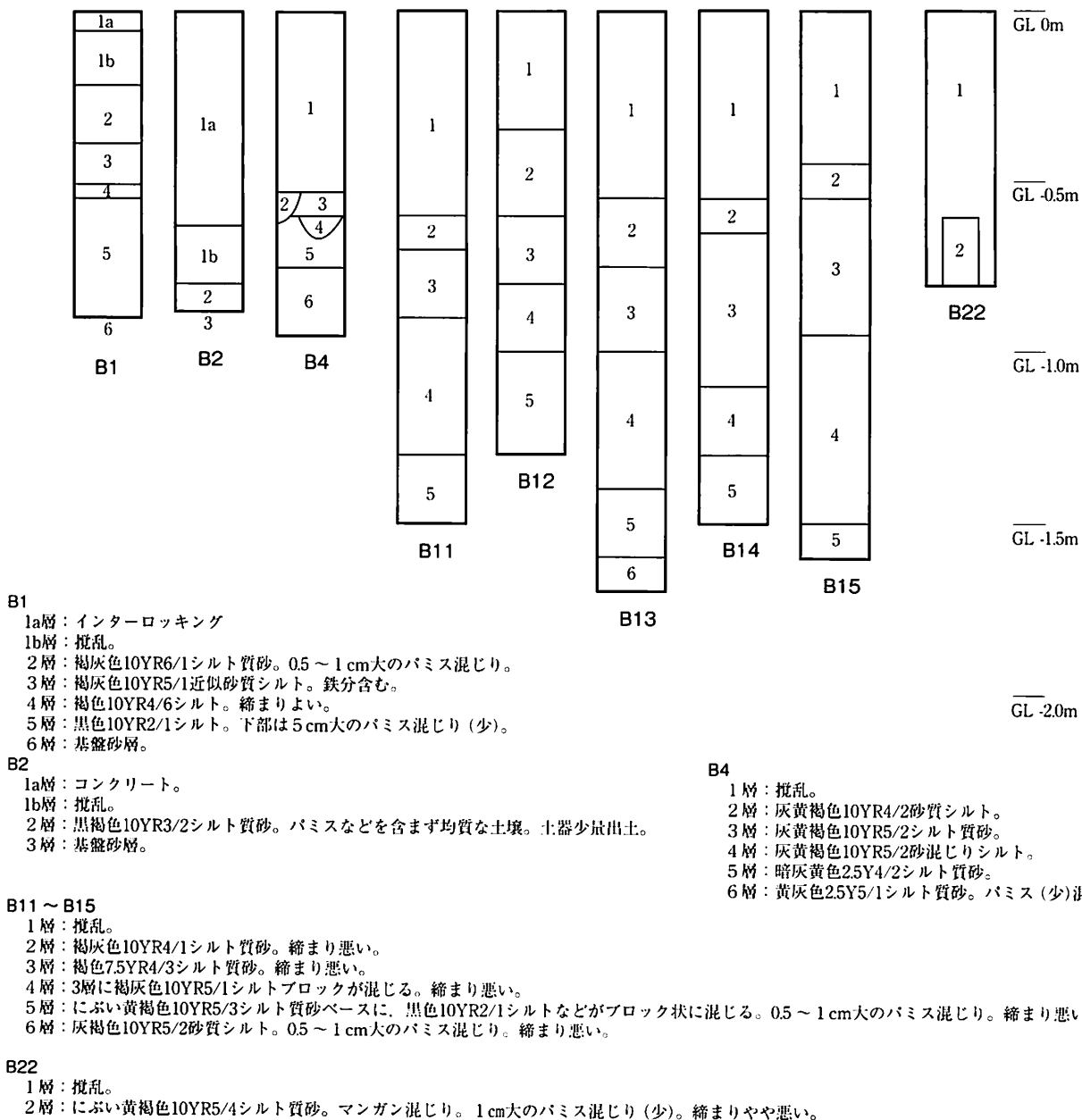


Fig.13 2006-B土層柱状図

深で鉄管が検出され、基礎を10cm上げてつくることになり、調査を終了した。遺物などは得られていない。

2006-B 学園環境整備工事 (Fig.3・13)

調査地点 郡元団地D-6, G～I-4・7・8, O-6, K-8・10・11, L-6区

調査期間 2006年5月22～24日, 7月11日, 8月7日

調査担当 鹿児島市教育委員会 有川孝行・岩戸孝夫・佐々木幸男

埋蔵文化財調査室 中村直子・新里貴之

構内各所に設置するキャンパスサイン位置の立会調査である。キャンパスサイン位置のうち、B3は地表下85cm深で攪乱、B5はインターロッキングを外したのみで、包含層への影響はなかった。B6は80～100cm深で攪乱であった。B7は80～90cm深攪乱、B8は花壇盛土部分で包含層に影響はなかった。B9・10は90cm深で攪乱であった。土層の残りの比較的良好であったB1・2・4の土層はFig.13の通りである。

B1地点より陶器高台部1点、B2地点より成川式と思われる土器胴部片1点と磁器碗口縁部片1点、B3地点より成川式と思われる胴部片3点、B6地点より成川・笹貫式甕口縁部片1点と、胴部片3点が得られている。B1地点の陶器1点、B2地点の磁器碗口縁部片1点、B6地点の成川・笹貫式甕口縁部片1点を図化した (Fig.24-2～4)。

生協食堂東の北辰通りに面したフェニックスの樹根を除去する作業の立会 (B11～15)は、ほとんどが河川内の埋土のような砂層であった (Fig.13)。

生協食堂北の田園通りでは、7か所 (B16～22)のうち3カ所を調査した。B16・17地点は80cm深で攪乱、B22はFig.13の通りである。

2006-C 環境バイオ研究棟等改修施設整備等事業 (農学部1号館中庭植栽移設工事) (Fig.14・15)

調査地点 郡元団地D・E-5～8区

調査期間 2006年6月5・6日

調査担当 鹿児島市教育委員会 有川孝行

埋蔵文化財調査室 新里貴之

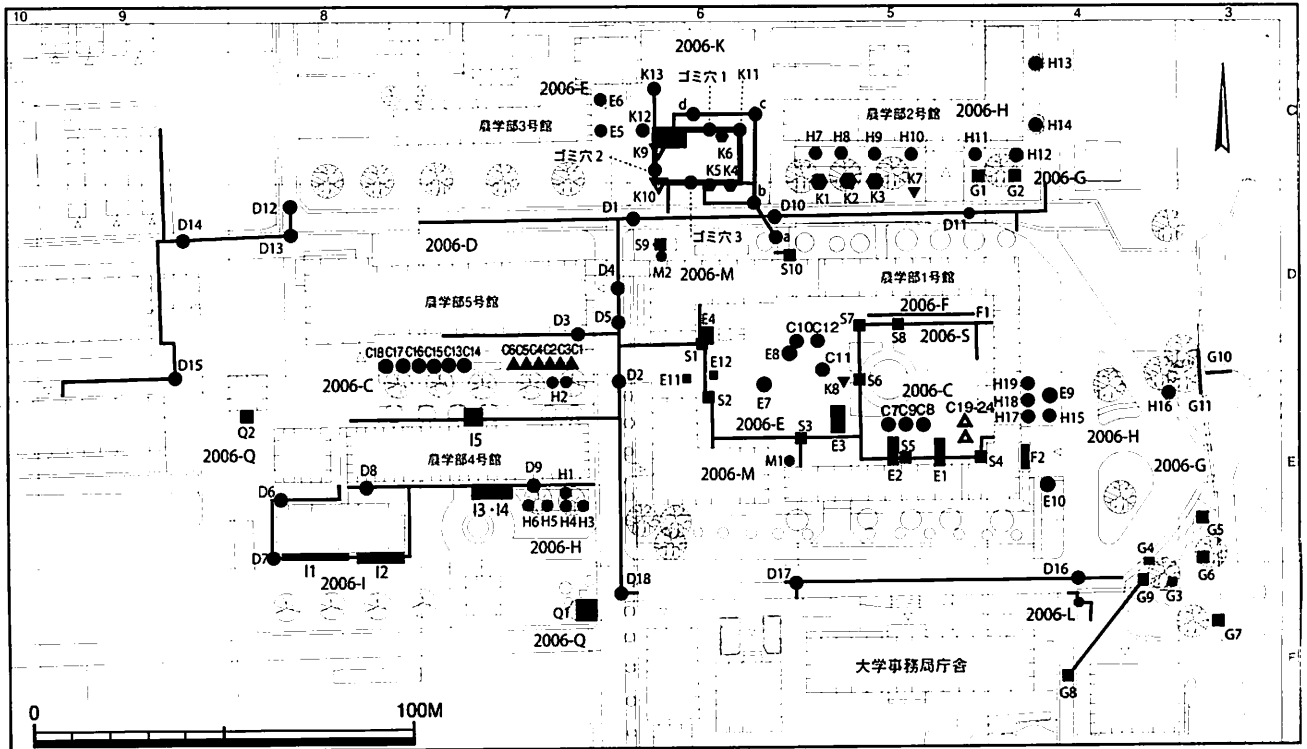


Fig.14 2006-C～I・K～M・Q・S地点配置 (S=1/2,000)

農学部1号館中庭の樹木・掲示板の移植・移設作業に伴い、移設先(C1～6・C13～18)、移設元(C7～12・C19～24)の立会調査を行なった結果、比較的土層の残りは良好で、移植・移設先のほとんどの掘削地点で近世～近代の水田層が確認された。樹木移植先C14地点の5層より土器小破片が1点出土している。

掲示板移植先C1地点は地表下65cm深で攪乱、樹木移植先のC13地点は65cm深、C16地点は75cm深、C17地点は80cm深で攪乱であった。掲示板の移動元(C19～24)は全て攪乱であった。

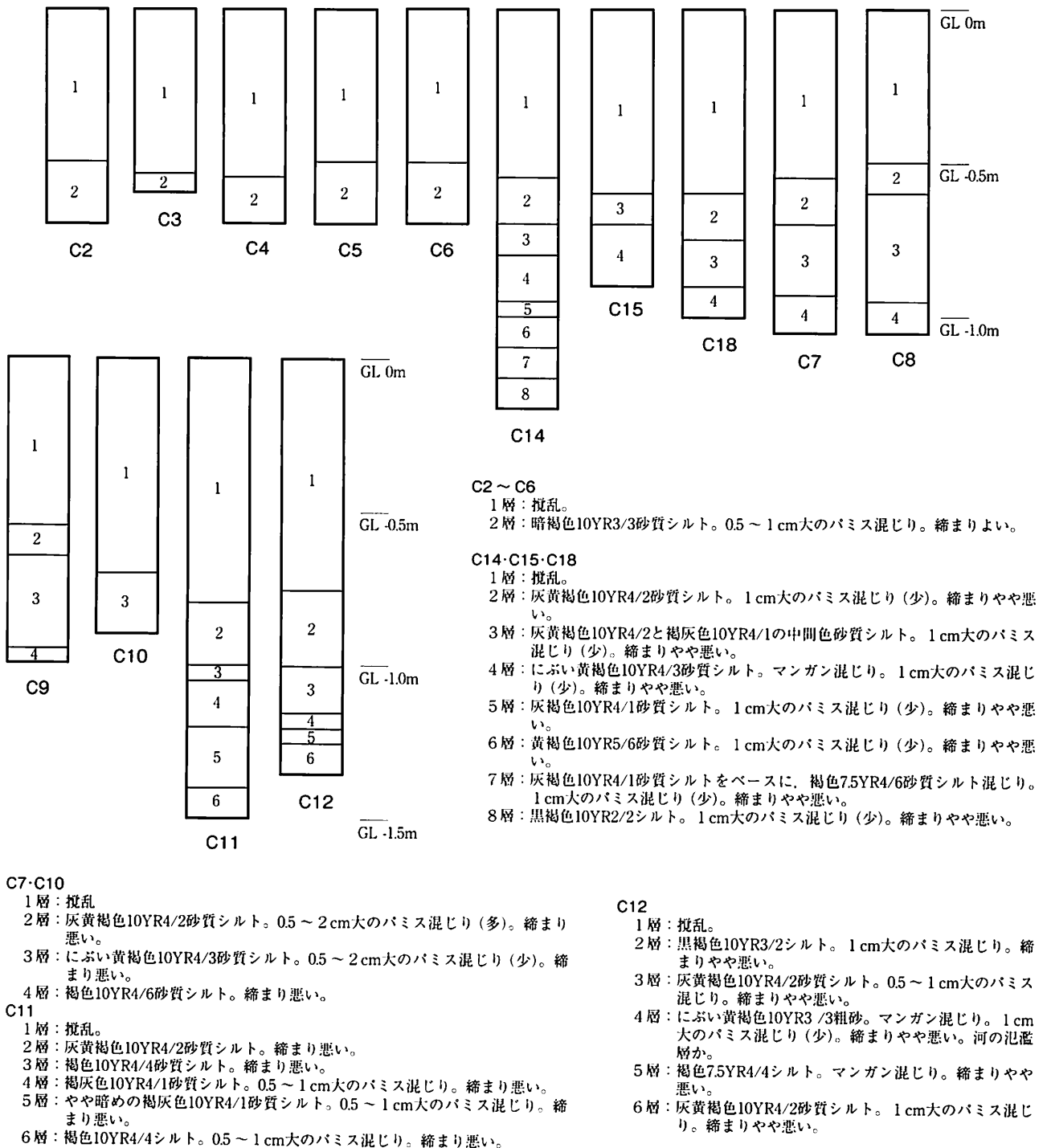


Fig.15 2006-C土層柱状図

2006-D 環境バイオ研究棟等改修施設整備等事業（農学部構内埋設配管更新事業）(Fig.14・16)

調査地点 郡元団地D～F-4～9区

調査期間 2006年8月7～9・16・17・21・29日，9月6・7・13日

調査担当 鹿児島市教育委員会 有川孝行・佐々木幸男・児之原博寿
埋蔵文化財調査室 新里貴之・中村直子

農学部全域の新設・既設配管工事を中心とした工事に伴う立会調査を実施した（D1～18）。約半数ほどの地点で近世から近代の水田跡が確認された。その他の地点については，D1地点が地表下200cm深で攪乱，D6地点は70cm深，D7地点が50cm深，D10・16地点が95cm深，D12・13地点が90cm深，D14地点が80cm深，D17地点が85cm深，D18地点が105cm深まで，それぞれ攪乱されていた。遺物は得られていない。

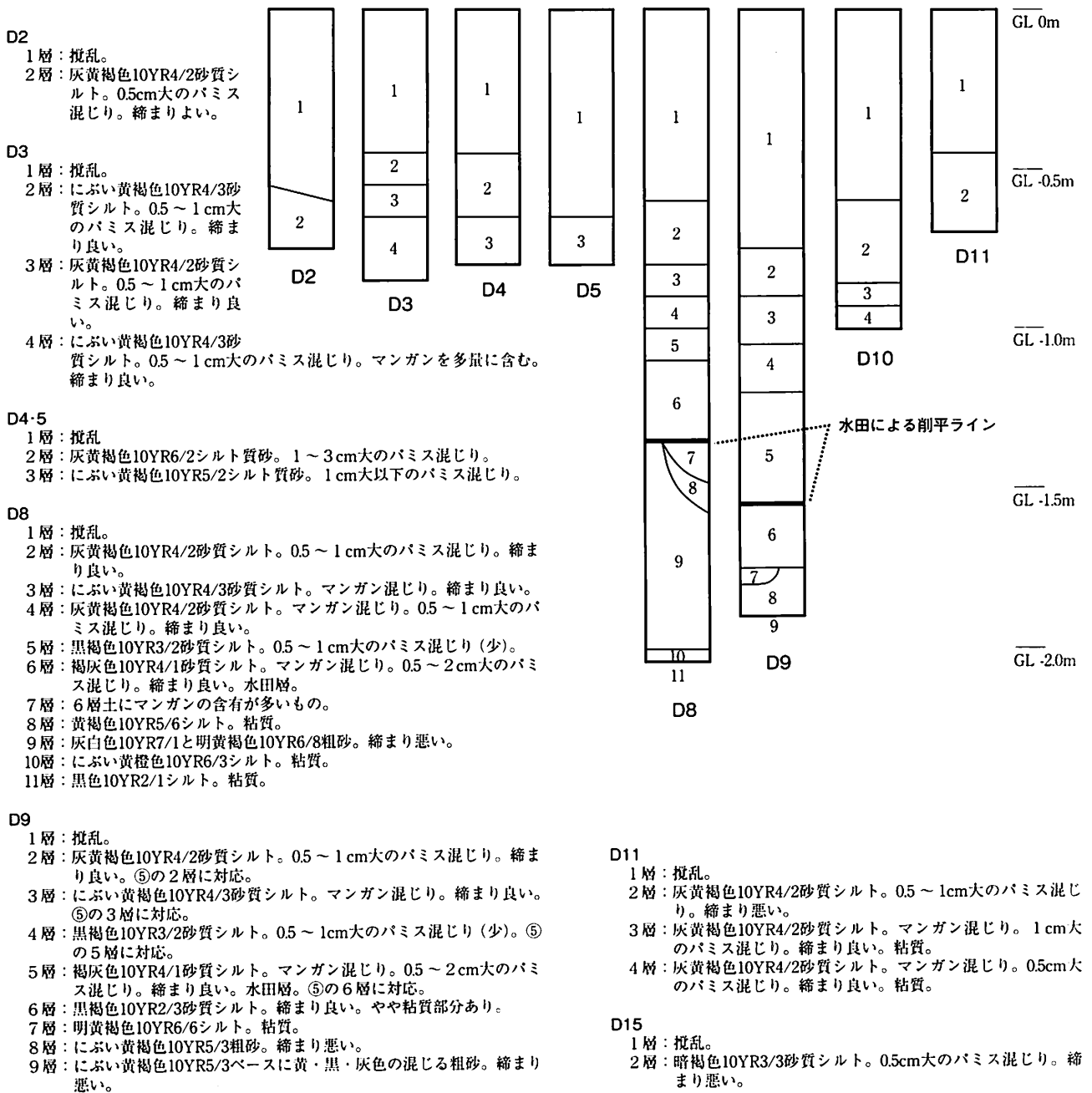


Fig.16 2006-D土層柱状図

2006-E 環境バイオ研究棟等改修施設整備等事業（農学部1・4号館土木工事）(Fig.14・17)

調査地点 郡元団地D・E-4～6, E・F-7・8区

調査期間 2007年1月12日, 3月13・20日, 4月4・9・13日

調査担当 鹿児島市教育委員会 佐々木幸男・有川孝行・岩戸孝夫

埋蔵文化財調査室 新里貴之

渡り廊下基礎部分 (E1・2), スロープ部分の掘削 (E3), 不用品保管庫・消火ポンプ室の撤去 (E4), 農学部1号館中庭・東側, 同3号館東側の樹木移植 (E5～10), 側溝設置部分 (E11・12)の掘削を行なった。

不用品保管庫・消火ポンプ室の撤去部分南側 (E4)では, 土層が良好に残っており, 近世～近代の水田跡が確認された。弥生～古墳時代の包含層 (4層)は, 黒色土でなく灰色がかっている。渡り廊下基礎部E2地点は, 近世～近代水田の一部が確認された。渡り廊下基礎部は, E1地点は140cm深の攪乱であった。

スロープ部分の掘削 (E3)は55cm深で攪乱であった。農学部1号館中庭の移植先のE7・8地点はともに地表下50cm深まで攪乱であった。東側移植先 (E9・10)も60cm深で攪乱であり包含層への影響はなかった。

側溝設置E11の攪乱層からは, 多量の近現代遺物が出土した (Fi.24-5～14)。ゴミ穴であったと考えられる。近現代磁器茶碗3点 (Fig.25-5～7), ティーカップ1点 (8), 皿2点 (9・10), 丼碗1点 (11), 化粧品のクリーム容器1点 (12), 無色透明ガラス瓶2点 (13・14)が得られている。

9・10は, 日本硬質陶器株式会社 (現・ニッコー株式会社)製の「硬質陶器プレート」で, 外底面に社章と思われる文様と, 文様内に「KNAZW」の文字, 文様の上下に「(不明)IRONSTONE CHINA」, 「N.K.PORCELEAIN.CO」の文字がある。全面に細かい貫入があるのが特徴である。裏ロゴから大正後半～昭和初期頃のものと考えられる¹⁾。

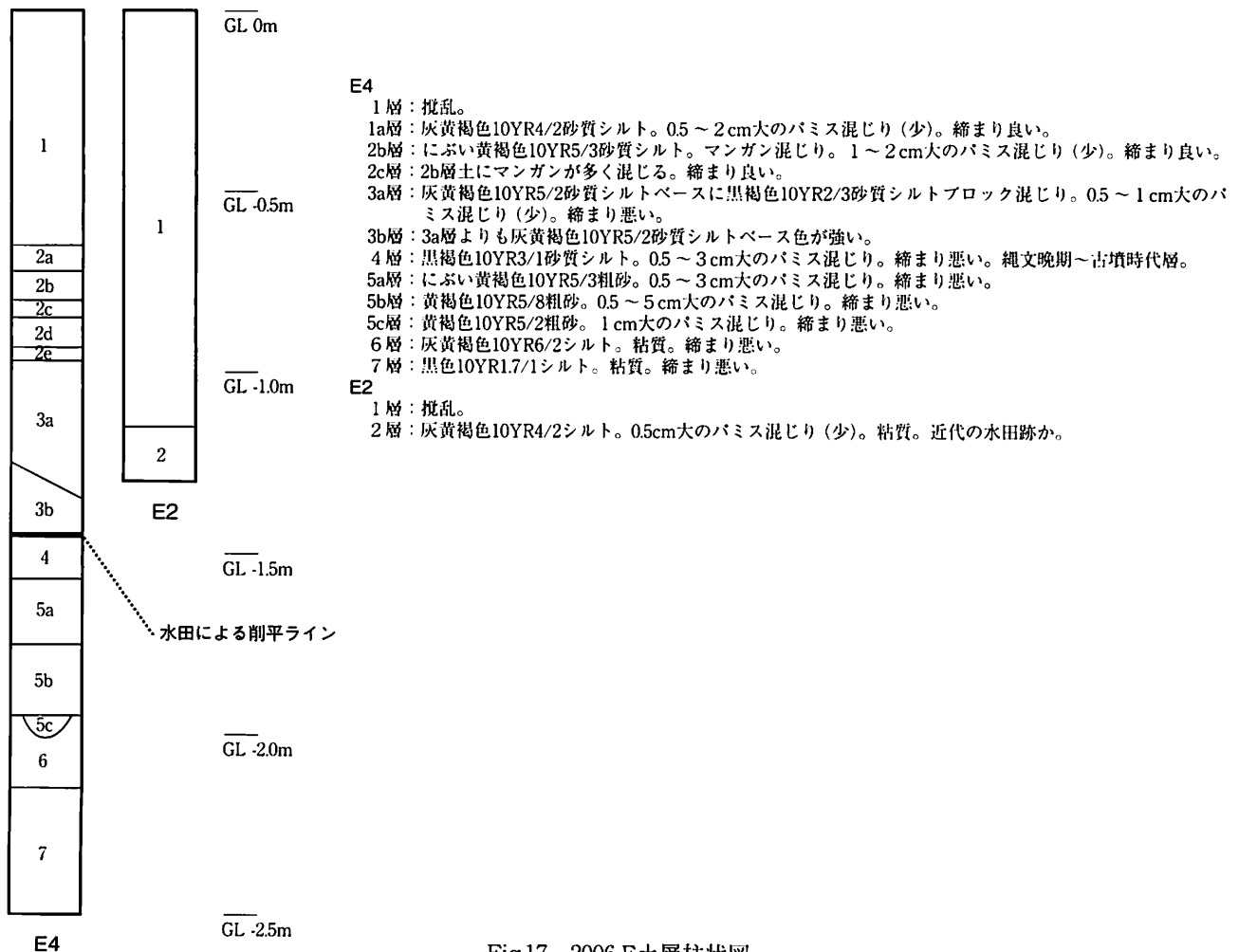


Fig.17 2006-E土層柱状図

11は、内外面に上絵の文様が施された丼碗である。外面文様は剥落が著しく特徴がつかめない。内面は二条の圏線の中に雷文が巡る。

12は、株式会社シャンソン化粧品本舗（現・株式会社シャンソン化粧品）製の「特殊美肌兼用クリームシャンソンアコール」のガラス容器と蓋である。内容量は30gで、当時の価格で600円となっている。やや円錐状になる胴部側面が面取りされている。1954（昭和29）年8月に発売され、1970（昭和45）年8月には後継商品「アコレーム」が発売されていることから、16年間で製造流通していた商品であると目される。当時、鹿児島市下荒田、東千石町に特約店があったという。金属メッキ蓋と密閉用のビニール製内蓋が得られているが、プラスチック製ネジ部は剥落して逸失している。また、上部は土圧のためか、本来やや膨らみをもつものが不定形に凹んでいる。外底面以外にも、外蓋上面に英大文字・小文字で飾った「CHANSON」が陽刻されている²⁾。

13は、「三共SANKYO」小瓶で、蓋は腐食してガラス瓶に癒着しており、その上面に、緞茶色で、円形のなかに縦書きの「三共」と横書きの「SANKYO」の文字が交差するように書かれる。薬品小瓶ではないかと考えられ、内容物が入っている。

2006-F 環境バイオ研究棟等改修施設整備等事業（農学部1号館土木工事）(Fig.14)

調査地点 郡元団地D-5区

調査期間 2007年3月30日

調査担当 埋蔵文化財調査室 新里貴之

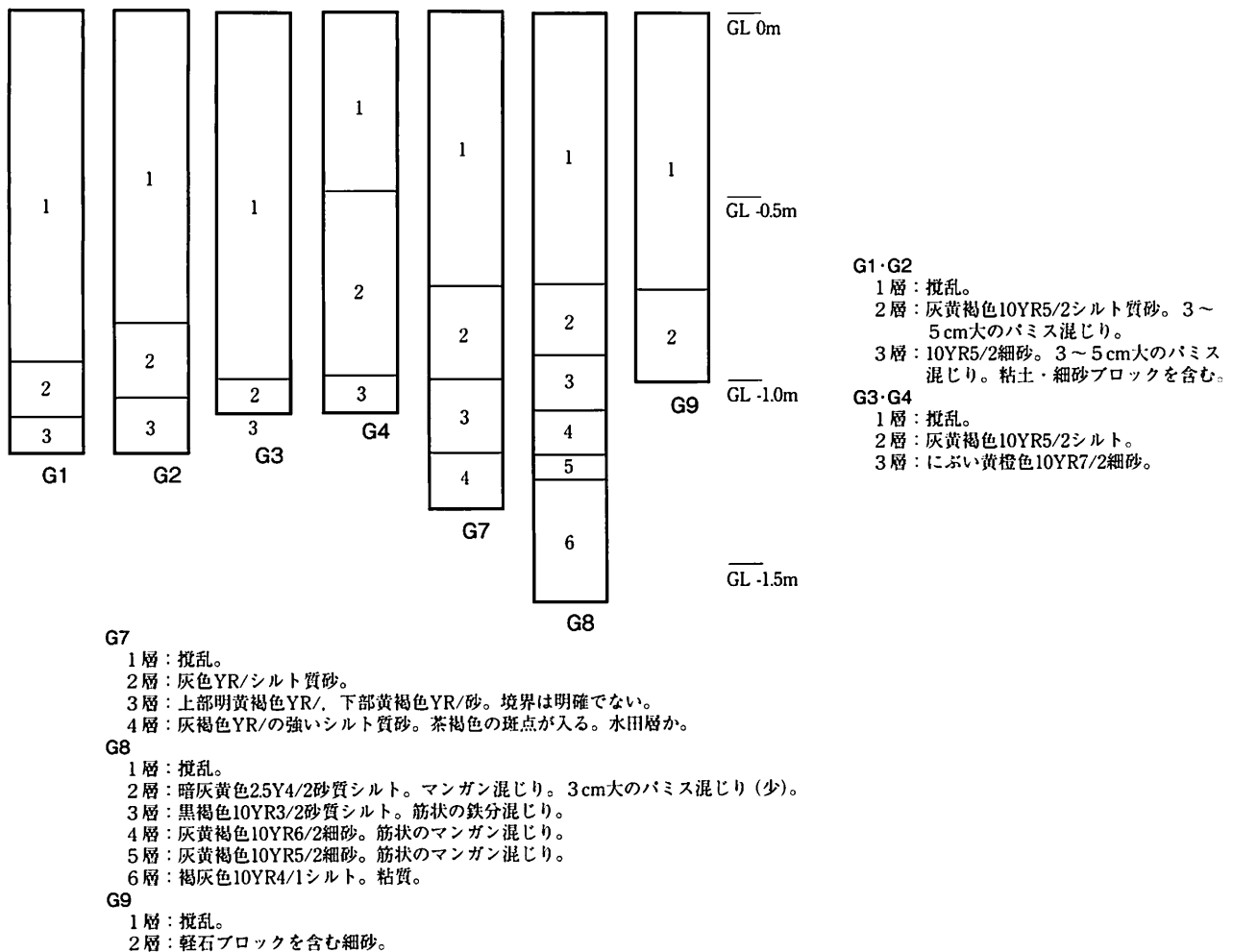


Fig.18 2006-G土層柱状図

農学部1号館中庭の支障樹木の撤去(F1), 同東側入口スロープ部(F2)の掘削に伴い, 立会調査を行なった。F1地点は, 全て地表下90cm深以内で攪乱であった。F2地点は50cm深で攪乱であった。

2006-G 正門改修工事 (Fig.14・18)

調査地点 郡元団地D～F-3・4区

調査期間 2006年11月17日, 12月18・26日, 2月7日

調査担当 鹿児島市教育委員会 有川孝行

埋蔵文化財調査室 中村直子・新里貴之

駐車場・高倉設置部分の整地, 樹木移植, 雨排水溝の設置, マンホール設置等に伴い立会調査された。整地部分は2か所ともに地表下30cm深まで攪乱であった(G10・11)。農学部2号館南の樹木移植では(G1～4地点), 近世～近代の水田跡が確認された。雨排水溝の設置地点G5・6は各々110cm深, 90cm深まで攪乱, G7地点では近世～近代の水田跡が確認された。マンホール部G8地点では近世～近代の水田層, G9地点では河砂層と思われる砂層が確認された。遺物は確認されていない。

2006-H 環境バイオ研究棟等改修施設整備等事業(農学部2号館土木工事)(Fig.14・19)

調査地点 郡元団地C-4・5, D・E-4・7区

調査期間 2006年9月26・28・29日, 10月2日

調査担当 鹿児島市教育委員会 有川孝行・児之原博寿

埋蔵文化財調査室 中村直子

農学部4・5号館の各南側で樹木の移植工事に伴い立会調査が行われた。H1地点は掘削途中で配管ができてきたために, 掘削を中止した。H4・5地点は掘削を中止した。H2・3・6地点は近世～近代の水田層であると考えられた。H1地点より成川式と思われる胴部片1点, F地点より同胴部片2点が得られている。また, H2地点より鹿児島高等農林学校対岳寮の井碗口縁部片1点が得られており, これを図化した(Fig.24-15)。

農学部2号館南側では, H7～9地点で近世～近代の水田層, H10・11地点で河川砂層と思われる層を確認した。H10地点では鹿児島高等農林学校の基礎跡やゴミ穴も観察されている。

農学部2号館東側の樹木伐根掘削部では, H12・14地点で河砂層が確認され, 地表下100cm深でゴミ穴が確認されている。

農学部1号館東側の樹木移植では, H15地点移植元が70cm深まで攪乱, 移植先H16地点は40cm深で攪乱であった。その他周辺部の掘削(H17～19)においても60cm深まで攪乱であった。

2006-I 農学部4号館改修工事・農学部1号館事前調査 (Fig.14・20)

調査地点 郡元団地D・E-5, E-7・8区

調査期間 2006年5月8日

調査担当 鹿児島市教育委員会 佐々木幸男

埋蔵文化財調査室 中村直子

農学部4号館の建物に接したエレベーター・スロープ・階段設置箇所と, 附属棟南側の犬走り・庇基礎工事と, 農学部1号館中庭の表土がどの程度の深さがあるかを確認した立会調査である。

農学部4号館のエレベーター・スロープ・階段設置箇所(I1・3～5)では, 近世～近代の水田層が確認された。附属棟南側の犬走り・庇基礎部分(I1・2)は, 地表下80cm深まで攪乱であった。

I3・4地点において, 成川式と考えられる底部近くの胴部片1点と, 内面側に受けがあり, 七輪か火鉢と思われる土焼締土器片1点が得られている。そのうち後者を図化した(Fig.24-16)。

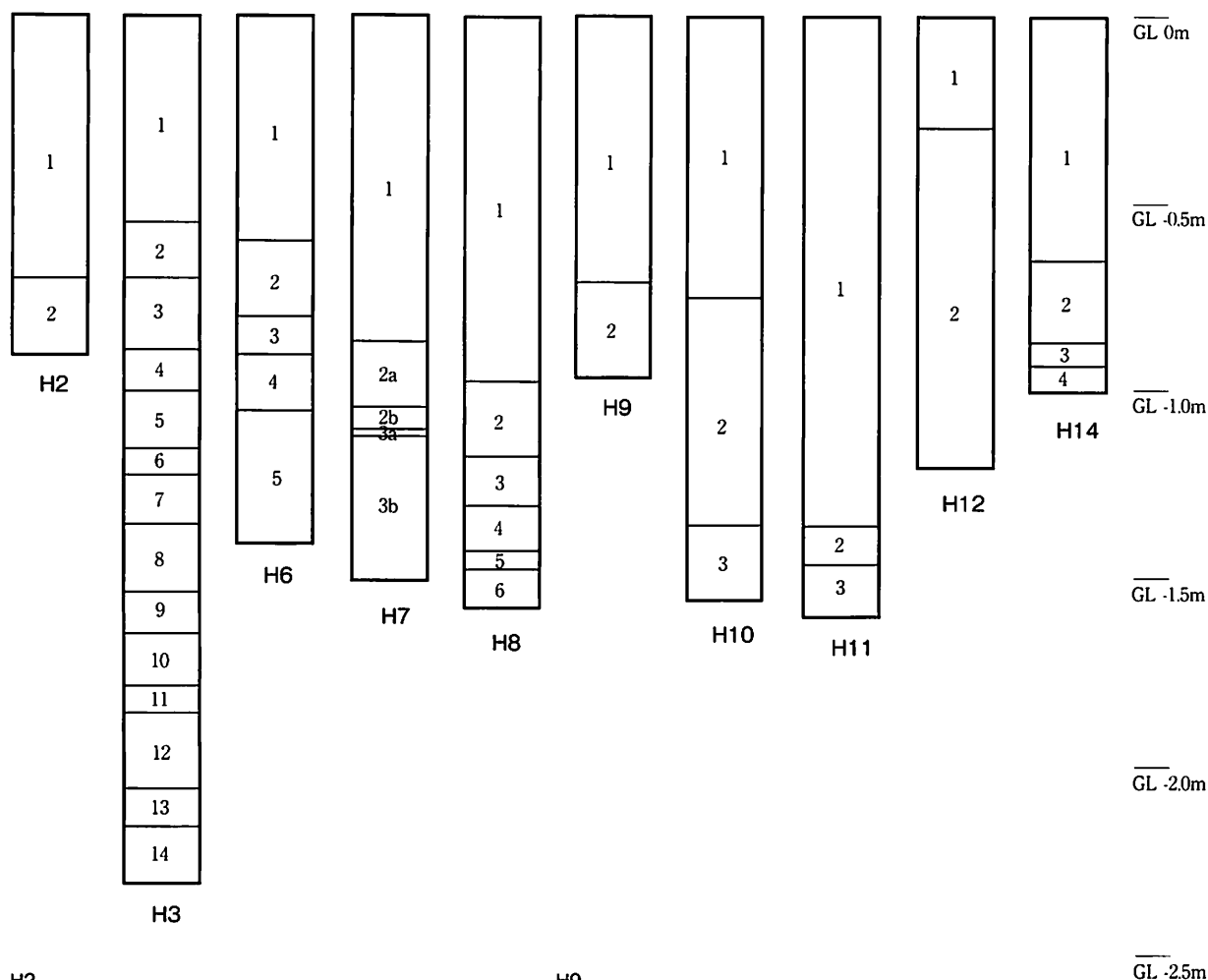
2006-J 附属中学校プール改修工事その他改修工事 (Fig.2・21)

調査地点 郡元団地Q-9・10区

調査期間 2007年1月15日

調査担当 鹿児島市教育委員会 有川孝行

Ⅲ 立会調査



H2
 1層：攪乱。
 2層：灰黄褐色10YR5/2砂質シルト。水田層。

H3
 1層：攪乱。
 2層：灰黄褐色10YR5/2砂質シルト。水田層。
 3層：褐灰色10YR5/1砂質シルト。
 4層：褐灰色10YR4/1砂質シルト。
 5層：灰黄褐色10YR5/2を基調とし、明黄褐色10YR6/6シルトブロックを含む。
 6層：粗砂。
 7層：灰黄褐色10YR5/2を基調。
 8層：シルト。
 9層：粗砂。
 10層：シルト+粗砂。
 11層：シルト+粗砂。
 12層：粗砂。
 13層：白シルト。
 14層：黒シルト。

H6
 1層：攪乱。
 2層：灰黄褐色10YR5/2砂質シルト。
 3層：褐灰色10YR5/1砂質シルト。筋状のマンガン混じり。
 4層：褐灰色10YR4/1砂質シルト。
 5層：灰黄褐色10YR5/2を基調とし、明黄褐色10YR6/6シルトブロックを含む。

H7
 1層：攪乱。
 2a層：にぶい黄褐色10YR4/3砂質シルト。0.5～2cm大のバミス混じり。締まり良い。粘質。
 2b層：暗褐色10YR3/3砂質シルト。0.5～2cm大のバミス混じり。締まり良い。粘質。
 3a層：にぶい黄褐色10YR4/3シルト質細砂。0.5～2cm大のバミス混じり。締まり悪い。
 3b層：にぶい黄褐色10YR4/3シルト質細砂に、灰黄褐色10YR4/2シルトブロックを含む。0.5～2cm大のバミス混じり。締まり悪い。

H9
 1層：攪乱。
 2層：暗灰黄色2.5Y5/2シルト。0.5～2cm大のバミス混じり。

H8・H11
 1層：攪乱。
 2層：暗灰黄色2.5Y5/2シルト。0.5～2cm大のバミス混じり。
 3層：褐灰色10YR5/1砂質シルト。鉄分を含む。
 4a層：灰黄褐色10YR5/2シルト質砂。鉄分を含む。
 4b層：灰黄褐色10YR6/2砂質シルトと4a層土との混じり土。
 4c層：灰黄褐色10YR6/2シルトと4b層土との混じり土。鉄分を含む。

H10
 1層：攪乱。
 2層：細砂。
 3層：茶褐色シルト。

H12
 1層：攪乱。
 2層：灰白色細砂。

H14
 1層：攪乱。
 2a層：細砂。
 2b層：灰白色細砂。
 3層：明灰色細砂。

Fig.19 2006-H土層柱状図

Ⅲ 立会調査

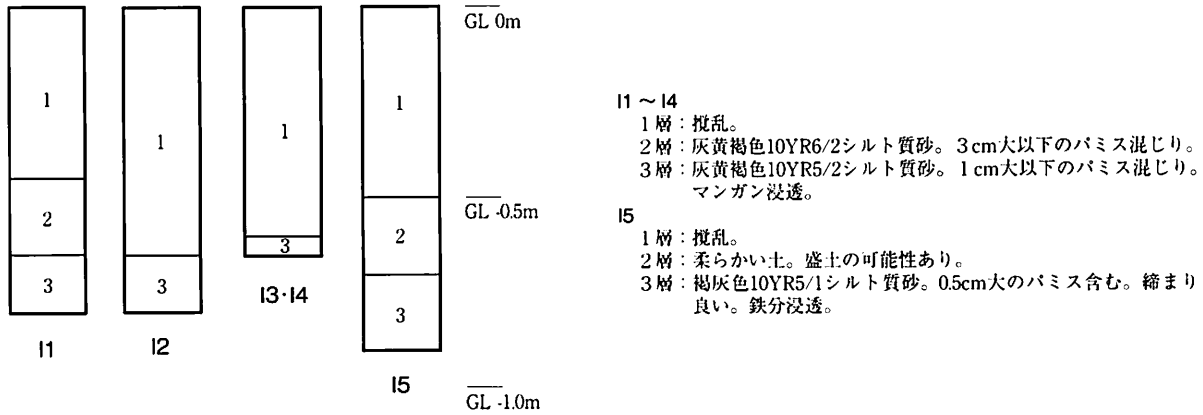
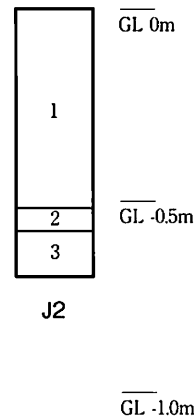


Fig.20 2006-I土層柱状図

埋蔵文化財調査室 中村直子

附属中学校プールの改修工事に伴い、J1～8地点の計8か所の立会調査を行なった。J2地点のみ弥生～古墳時代の包含層が確認された。残りの地点は、40～90cm深で攪乱である。J2地点包含層は地表下55cmで確認されたため、工事深度を影響のない表土の範囲に設計変更することとなり、調査を終了した。

J2地点3層から、成川式高坏坏部片1点、脚部片1点、器種不明胴部片1点が得られている。高坏脚部片1点を図化した(Fig.24-17)。



J2
 1層：攪乱。
 2層：黄褐色2.5Y5/6粗砂混じりシルト質砂。パミスを含む。
 3層：黒褐色10YR2/3シルト。

Fig.21 2006-J土層柱状図

2006-K 農学部焼酎学講座実験研究棟新営工事 (Fig.14・22・23)

調査地点 郡元団地C～E-5・6区

調査期間 2006年12月15日、2007年4月13・16・17日、5月23日

調査担当 鹿児島市教育委員会 佐々木幸男・有川孝行・立部剛

埋蔵文化財調査室 新里貴之

農学部焼酎学講座実験棟を建設することとなったが、焼酎蔵をイメージした軽量鉄骨の建物であるため、支障樹木の移植と基礎部分の立会調査を行なった。

農学部焼酎学講座実験棟設置予定地東側の支障樹木を農学部2号館前に移植する工事では、移植先K1・2地点で水田層が確認された。K3地点では190cm深まで攪乱されており、生協のロゴのある茶碗などが出土している。当時のゴミ穴と考えられた。移植元K4～6地点においても近世～近代の水田層が確認されている。また、予定地西側の支障樹木移植先のK7・8地点、移植先のK10地点においても近世～近代の水田層が確認されている。K9地点は地表下110cm深まで攪乱されていた。

包含層遺物ではないが、表土及びゴミ穴より多数の近現代遺物が得られたため、ここで紹介する (Fig.25～27)。

K1地点

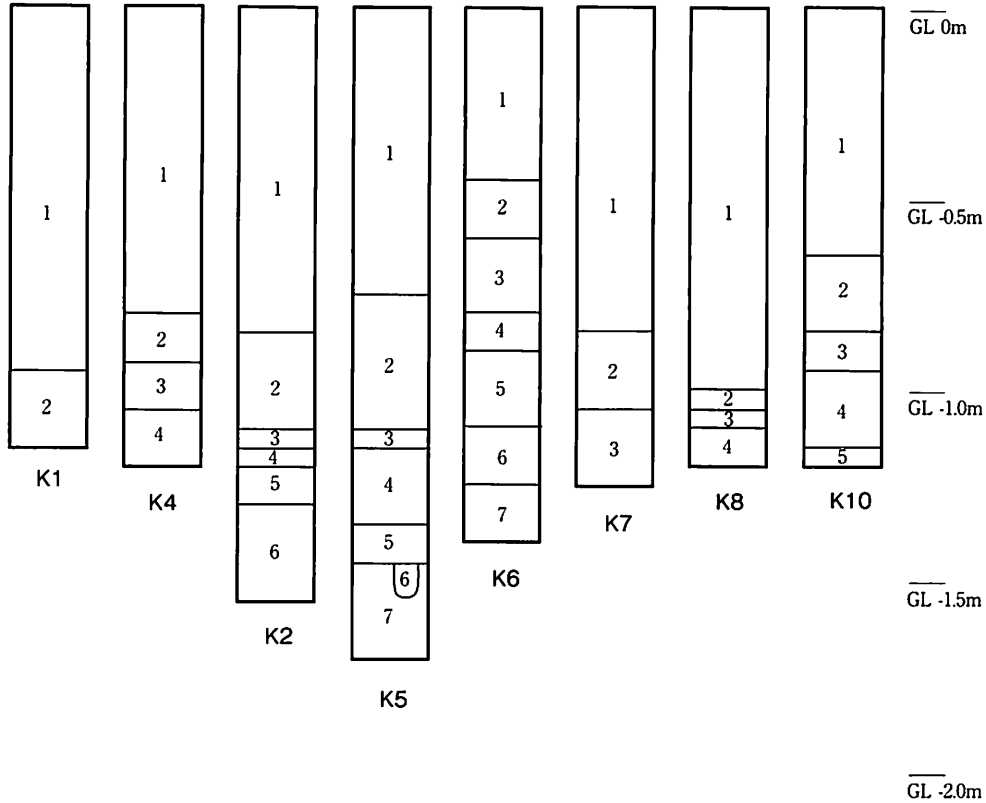
Fig.26-19は、攪乱層から出土した鹿児島高等農林学校対岳寮の丼碗の口縁部である。蓋受けがあり、外面口唇部直下に呉須による圏線が巡る。「岳」の文字の一部が残っている。

K2地点

20は、攪乱層から出土したクロム青磁の碗の口縁部である。小さな花卉で囲まれた円のなかに、「寿」の一部が認められる。

21は、攪乱層から出土した防火水槽の一部と考えられ、鉄筋コンクリート造である。状態は平板で、裏面には型枠の木板痕が残っている。近年まで郡元団地内に散在していた上面観円形の防火水槽とは異なる。文様・文字は型作りであり、文様が陽刻、文字が陰刻である。文字部分は後で丁寧に整形されている。文字は右から左方向へ「防火(以下不明)」が残っている。山型陽刻がシンメトリーであると考え、それを基準にすれば、文字は4文字だったと考えら

Ⅲ 立会調査



K1

- 1層：攪乱。近現代遺物出土。
- 2層：にぶい黄褐色10YR4/3砂質シルト。0.5～1cm大のバミス混じり。やや締まり悪い。水田層。

K4

- 1層：攪乱。
- 2層：にぶい黄褐色10YR4/3砂質シルト。やや締まり悪い。粘質。水田層。
- 3層：にぶい黄褐色10YR5/4砂質シルト。マンガン混じり。0.5～1cm大のバミス混じり(少)。やや締まり悪い。やや粘質。
- 4層：灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。0.5～1cm大のバミス混じり(少)。やや締まり悪い。粘質。
- 5層：暗褐色10YR3/3砂質シルト。0.5cm大のバミス混じり。締まり悪い。細文晩期～古墳時代層か。

K2

- 1層：攪乱。近現代遺物出土。
- 2層：にぶい黄褐色10YR4/3砂質シルト。やや締まり悪い。粘質。水田層。
- 3層：にぶい黄褐色10YR5/4砂質シルト。マンガン混じり。0.5～1cm大のバミス混じり(少)。やや締まり悪い。やや粘質。
- 4層：灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。0.5～1cm大のバミス混じり(少)。やや締まり悪い。粘質。
- 5層：4層と6層の混じり土。
- 6層：暗褐色10YR3/3砂質シルト。0.5cm大のバミス混じり。締まり悪い。細文晩期～古墳時代層か。

K5

- 1層：攪乱。
- 2層：にぶい黄褐色10YR4/3砂質シルト。やや締まり悪い。粘質。水田層。
- 3層：にぶい黄褐色10YR5/4砂質シルト。マンガン混じり。0.5～1cm大のバミス混じり(少)。やや締まり悪い。やや粘質。
- 4層：灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。0.5～1cm大のバミス混じり(少)。やや締まり悪い。粘質。
- 5層：暗褐色10YR3/3砂質シルト。0.5cm大のバミス混じり。締まり悪い。細文晩期～古墳時代層か。
- 6層：5層土に類似。
- 7層：明黄褐色2.5Y7/6細粗砂。0.5～5cm大のバミス混じり。締まり悪い。

K6

- 1層：攪乱。
- 2層：灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。0.5～1cm大のバミス混じり。填圧され堅く締まる。
- 3層：にぶい黄褐色10YR4/3砂質シルト。マンガン混じり。0.5～1cm大のバミス混じり(多)。締まり良い。
- 4層：にぶい黄褐色10YR4/3類似砂質シルト。マンガン混じり。0.5～1cm大のバミス混じり(多)。締まり良い。
- 5層：にぶい黄褐色10YR5/3シルト質砂。0.5～3cm大のバミス混じり(少)。締まり悪い。
- 6層：灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。0.5～2cm大のバミス混じり(少)。やや締まり悪い。
- 7層：にぶい黄褐色10YR4/3類似砂質シルト。マンガン混じり。0.5～1cm大のバミス混じり(少)。やや締まり悪い。

K7

- 1層：攪乱。
- 2層：灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。0.5～1cm大のバミス混じり。締まり良い。水田層。
- 3層：にぶい黄褐色10YR4/3砂質シルト。マンガン混じり。0.5～1cm大のバミス混じり。締まり良い。

K8

- 1層：攪乱。
- 2層：灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。0.5～1cm大のバミス混じり。締まり良い。水田層。
- 3層：暗褐色10YR3/3シルト。0.5～2cm大のバミス混じり。かなり締まり良い。水田床土か。
- 4層：灰黄褐色10YR5/2砂質シルト。0.5～1cm大のバミス混じり。締まり悪い。水田層。

K10

- 1層：攪乱。
- 2層：灰黄褐色10YR5/2砂質シルト。0.5～1cm大のバミス混じり。締まり悪い。
- 3層：2層土にマンガン混じり。
- 4層：にぶい黄褐色10YR4/3砂質シルト。0.5～3cm大のバミス混じり。締まり悪い。
- 5層：灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。0.5～3cm大のバミス混じり。締まり良い。

Fig.22 2006-K土層柱状図(1)

Ⅲ 立会調査

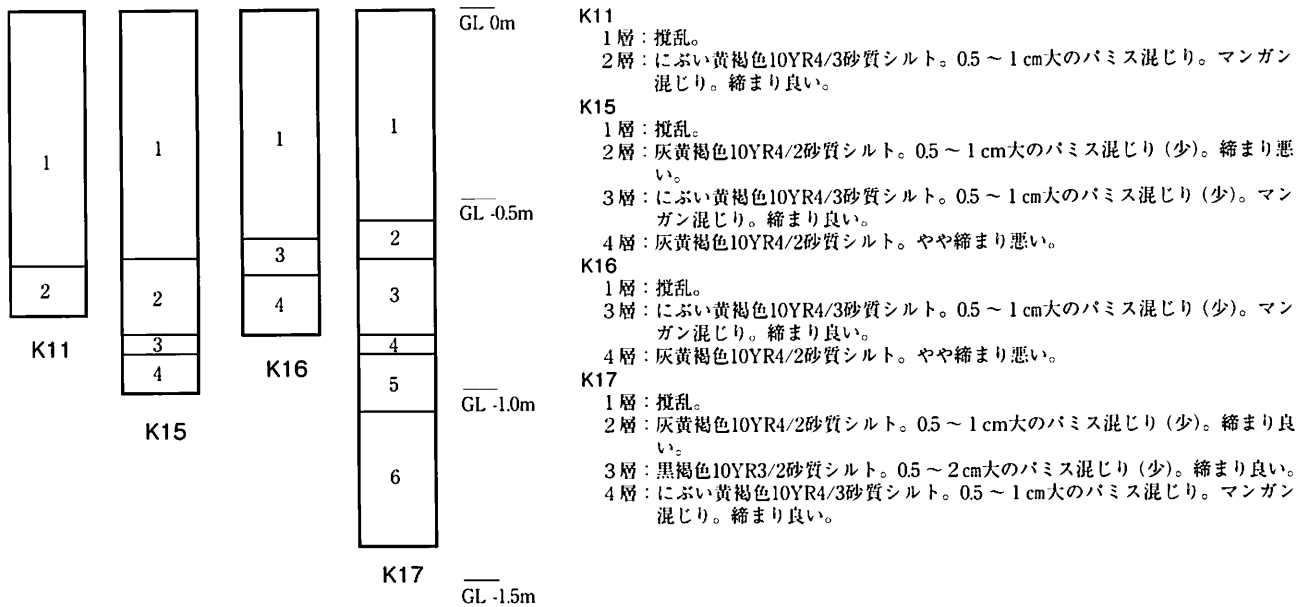


Fig.23 2006-K土層柱状図(2)

れる。また、「火」の左側の破損した文字の具合から「水」という文字よりは「用」の字のほうが想定しやすく、本来の文字は「防火用水」の可能性が考えられる。この地点の西側約30m離れた箇所(現・焼酎学講座棟東南部)に、高等農林学校時代に上面観が方形を呈す水槽があることが、当時の地図から窺える。あるいは、陰刻された文字から推定して、1945(昭和20)年の空襲の際に倒壊したとされる正門付近にあった「防火用具室」の一部かもしれない。

K3地点

22は、美濃窯業株式会社製陶部(現・美濃窯業株式会社)製の生協皿である。口縁部は玉縁状を呈する。外面に呉須で「生協」のロゴと、外底面に菱形内に「MINO」と書かれたロゴがプリントされる。同社販売カタログには、納品先として1961(昭和36)年までは鹿児島大学が記載されていないが、1965(昭和40)年には、鹿児島大学病院、鹿児島大学ともに記載されている。少なくともこの時期以降のものであろう。「鹿児島大学生生活協同組合」が法人化するのは1957(昭和33)年のことであり、この磁器は生協発足直後に発注されたものではないようである³⁾。

23は22と同様の丼碗であると考えられる。

24は、農学部で使用されていた湯のみ茶碗で、緑色で行書体縦書きの「農学部」と、対外面に上部半円と下部に「KAGOSHIMA」の文字、その中央部に噴火した桜島と隷書体の「大学」がスタンプされる。この大学のロゴは、学章の変遷からして、1949(昭和24)年の鹿児島大学開学当時から1979(昭和54)年の開学30周年まで用いられている。前田芳實農学部長によれば、赴任時期に用いた覚えはないとのことで、下限は1969(昭和44)年以前に絞り込めそうである。

K4地点

25は、磁器の湯のみ茶碗で、外面に茶色地に金のくずし文字が縦書きされるが、内容は読み取れない。外底面に銘「尚人」と思われるスタンプがみられる。

26は、クロム青磁の蓋受けのある丼碗で、外面に笹の葉らしき文様が描かれる。

27は、丹頂株式会社(現・株式会社マンダム)の丹頂ポマードと推定されるガラス容器である。現在でもデザインを変えて販売されている。側面は垂下する柳葉状の陽刻文様で飾られ、商品名シールを貼ったと思われる長方形の切り込み4.5×2cm、深さ0.15cmが存在する。この商品は1966(昭和41)年にパッケージが変更されているため、会社名を丹頂に変更した1959(昭和34)年から、パッケージ変更された1966(昭和41)年の間の商品ではないかと推測される⁴⁾。わずかに内容物が内底面に付着している。

III 立会調査

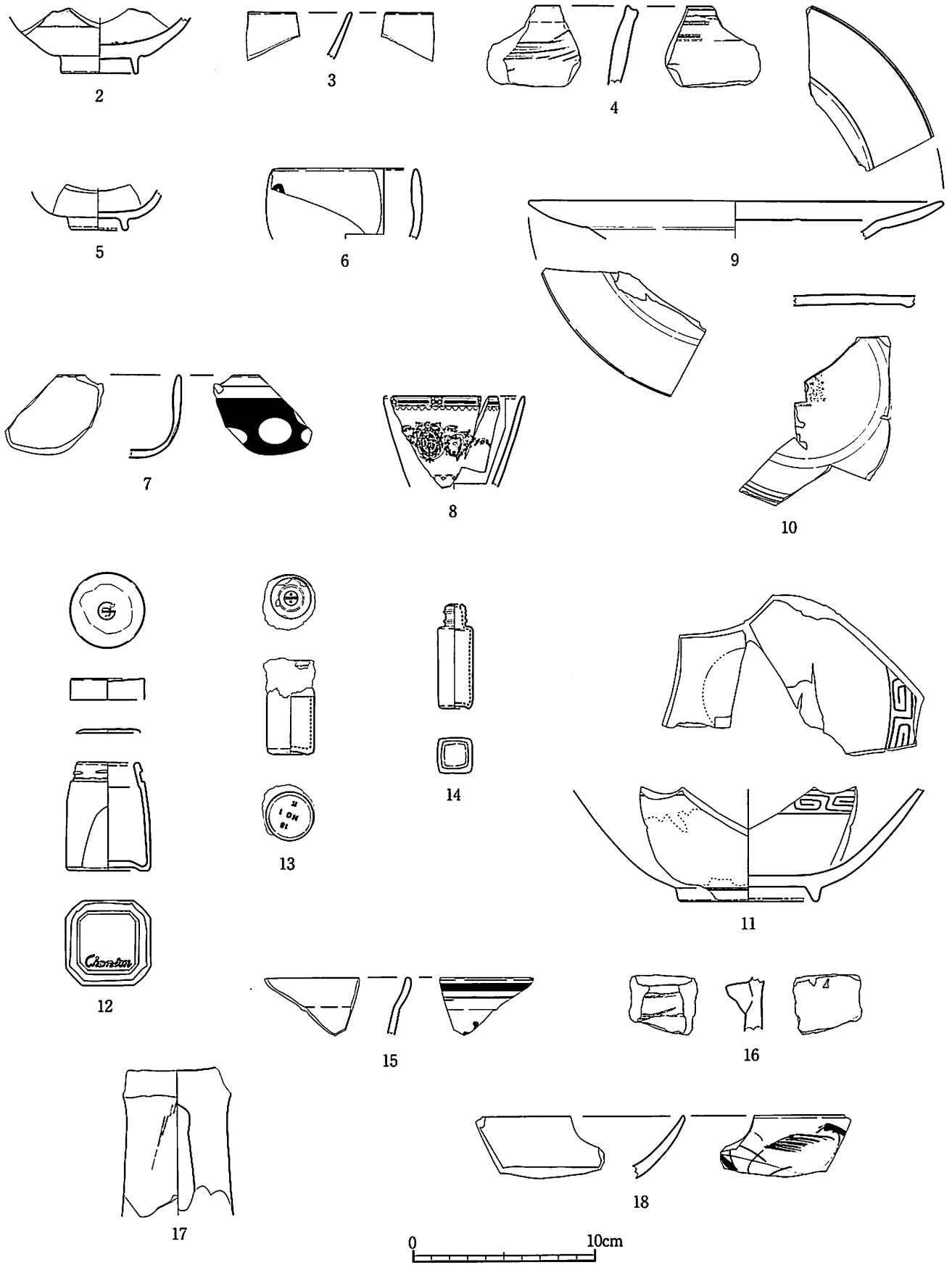
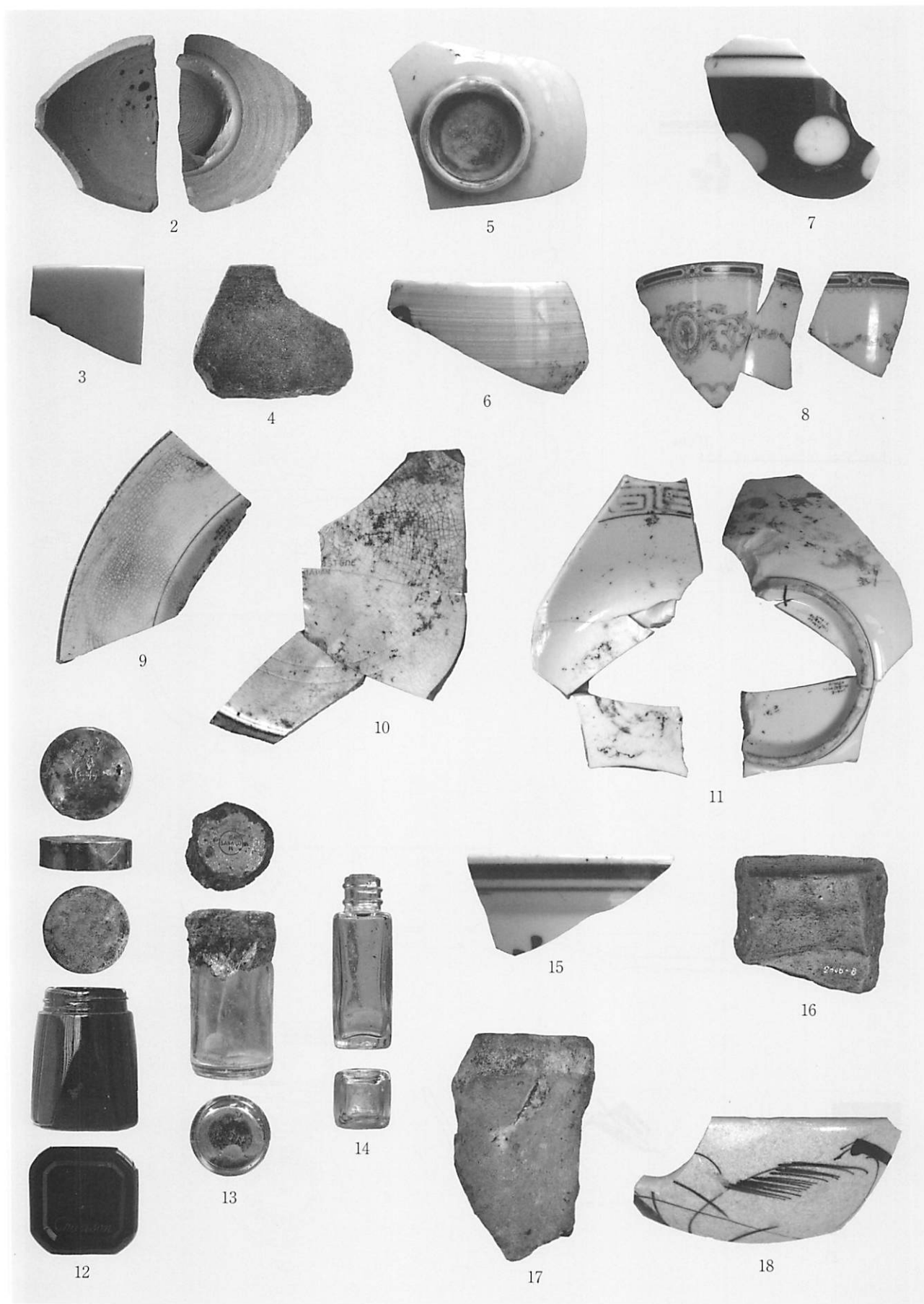


Fig.24 2006-B1 (2)・B2 (3)・B6 (4)・E11 (5～14)・H2 (15)・I3 (16)・J2 (17)・S10 (18) (S=1/3)



PL.14 2006-B1 (2)・B2 (3)・B6 (4)・E11 (5～14)・H2 (15)・I3 (16)・J2 (17)・S10 (18)

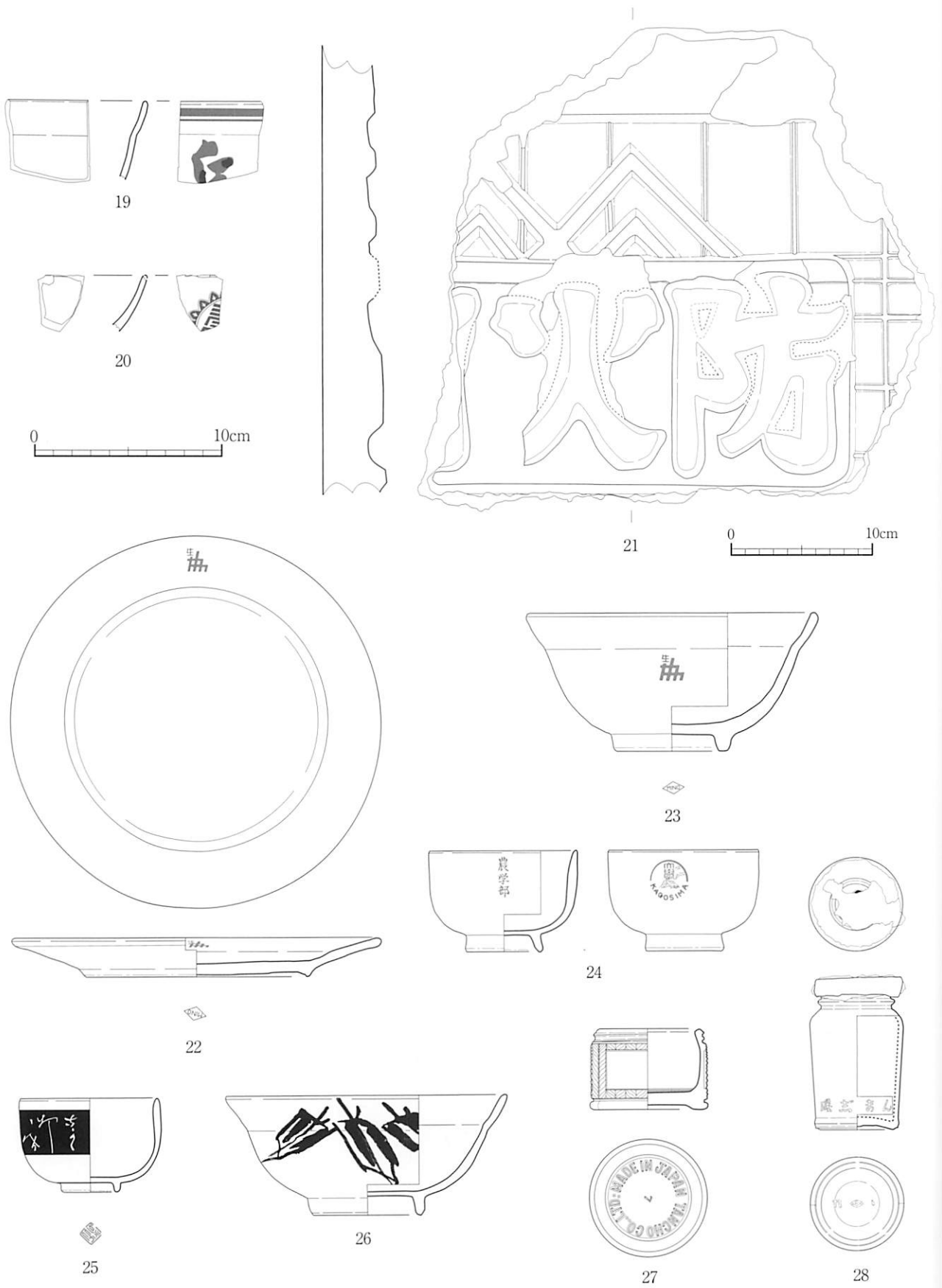


Fig.25 2006-K1 (19)・K2 (20・21)・K3 (22～24)・K4 (25～28) (21はS=1/4, それ以外はS=1/3)



PL.15 2006-K1 (19)・K2 (20・21)・K3 (22～24)・K4 (25～28)

III 立会調査

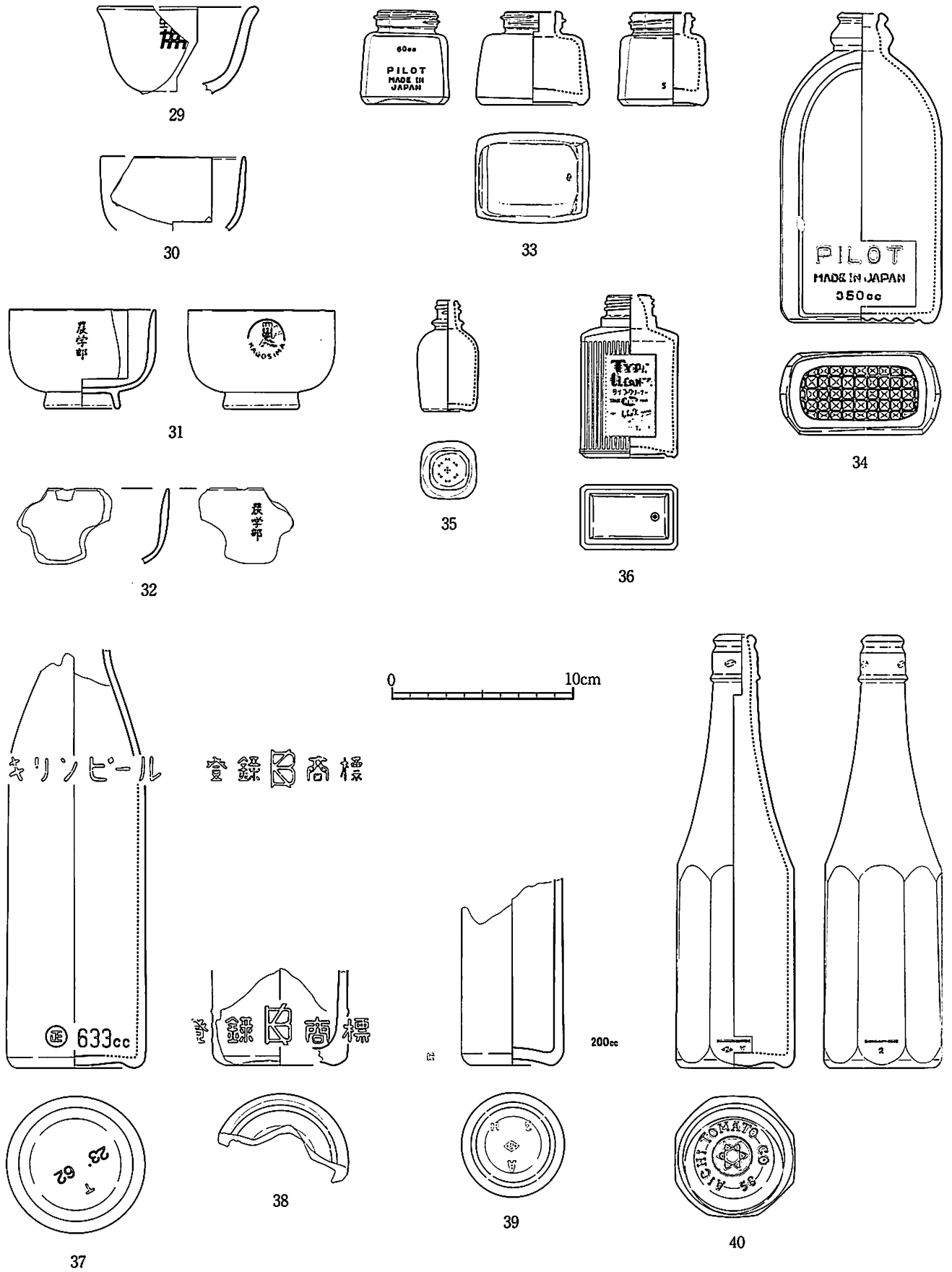


Fig.26 2006-Kゴミ穴1 (S=1/3)



PL.16 2006-Kゴミ穴1



Fig.27 2006-Kゴミ穴2 (41 ~ 44) ・ゴミ穴3 (45 ~ 47) (S=1/3)



PL.17 2006-Kゴミ穴2 (41 ~ 44) ・ゴミ穴3 (45 ~ 49)

28は、磯じまん株式会社の海苔佃煮「磯じまん」のガラス容器である。現在でもデザインを変更して販売されている。側面下方に「磯志”まん」の陽刻があり、外底面にはひし形内に「N」硝子（株）製と思われる製瓶会社記号がある。瓶口部は錆びた蓋に覆われ、ツイスト蓋である。1954（昭和29）年から1958（昭和33）年頃まで製造された瓶であると考えられる⁵⁾。

農学部焼酎学講座実験棟設置予定地の基礎工事地点は、基本土層としてK11地点を確認したところ、近世～近代の水田層が確認された。その他、掘削時点で3か所の近現代のゴミ穴が確認されたので、その遺物を紹介する（Fig.27）。

ゴミ穴1

29は、「生協」の湯のみ茶碗で、厚手の外反口縁を呈する。美濃窯業株式会社製陶部（現・美濃窯業株式会社）製のもので、先述22・23と同様であろう。

30は、無文の磁器湯飲み茶碗である。

31・32は、農学部の湯のみ茶碗で、先述24と同様のものである。

33は、パイロットインキ株式会社（現・株式会社パイロットコーポレーション）の「インキ」瓶で、内容量は60ccである。

34は、同「インキ」瓶で、詰め替え用の大瓶である。内容量は350ccである。底面は多数の四角錐の陰刻で飾られる。この大瓶は1949（昭和24）年発売の12オンス瓶に相当すると考えられるが、以後、内容量が「cc」で表示されるのは1960（昭和35）年頃からのようである⁶⁾。

35は、性格不明のガラス瓶で、外底面に文様らしき陽刻があるが、解読できない。薬品か化粧品であろうか。

36は、ニチペイナガク製の「タイプクリーナー」である。外側面には縦方向の溝がある。正面のシールは破損が著しいが、上段より「TYPE CLEANER タイプクリーナー TRADE MARK NBK（不明）hiki K（不明）」とある。最下段の文字は英字筆記体で最も破損が著しく判読不能である。外底面に、丸の中に「6」か「9」の数字のようなものが陽刻されているが、角ばった形状をしており、石塚ガラス株式会社のロゴかもしれない。

37・38は、麒麟麦酒株式会社の「キリンビール」瓶である。どちらも破損しているが、37は、底部立ち上がり部側面に「正633cc」の文字が陽刻される。上げ底となった外底面には「T 23° 62」の文字が三角形状に打刻されている。丸に「正」のマークがあることから、1956（昭和31）年以降に製造されたものと考えられ、容量の表示が現在のような「ml」ではなく「cc」になっているため、1959（昭和34）年以前に製造されたものと考えられる。東洋ガラス株式会社製瓶である。38は破損著しい底部片であるが、底部立ち上がり部側面に左から右に「登録商標」と入っている。この種の瓶は、キリンビールの製瓶工場が再開した1950（昭和25）年以降に製造され、かつ、丸に「正」のマークが入る1956（昭和31）年以前に製造されたものと考えられる⁷⁾。

39は、南日本酪農協同株式会社の「南日本デーリィ牛乳」である。プリントは剥落し、その痕跡で同製品と判断された。底部立ち上がり部に陽刻される内容量と管理用記号の位置からして、41とはプリントが真逆となっていたようである。外底面中央部には、菱形内に「N」文字のある日本硝子株式会社の製瓶会社記号を中心に、尼崎工場の「A」、西暦下一桁の「3」、不明の「H」が陽刻される。外底面への打刻は昭和40年代中ごろにはないということであり、「3」が1963（昭和38）年に製造された瓶である可能性を示唆している。また、1966（昭和41）年には使用されており⁸⁾、1968（昭和43）年以前のものであるとされる⁹⁾。

40は、愛知トマト株式会社（現・カゴメ株式会社）製の「トマトケチャップ」の瓶である。胴部は8面に面取りされる。底面には、「AICHI TOMATO CO」、 「56」の文字が時計回りに陽刻される。このタイプの瓶は1935（昭和10）年頃から1957・1958（昭和32・33）年まで製造されていたが、この瓶は外底面に「56」の文字があることから、製瓶年1956（昭和31）年を示している¹⁰⁾。底部立ち上がりに日本硝子株式会社の製瓶会社記号が陽刻される。

ゴミ穴2

41は、現・南日本酪農協同株式会社販売の「南日本デーリィ牛乳」瓶である。口縁部内側に段を持ち、紙蓋による封であると考えられる。正面に「南日本デーリィ牛乳 正200cc」、反対に社章と「NANRAKU DAILY □ MILK」の文字が水色の文字でプリントされている。底部立ち上がりには内容量と、その対面に管理用記号が施される。外底面中央部には、菱形内に「N」文字のある日本硝子株式会社の製瓶会社記号が陽刻される。これらの諸特徴から、昭和40年代初～昭和43年以前のスタイルであるとされる^{8・9)}。

42は、ナニワ薬品化成株式会社（現・株式会社エヌ・エヌ・シー）販売、写真用停止液水酢酸のガラス容器である。

「塔印 写真用 純水醋酸(ベスト酸)99%以上 500g NANIWA YAKUHIN KASEI」と白地でプリントされたプリントは大半が欠失している。外底面には、円のなかに「T」字が陽刻され、東洋ガラス株式会社の製瓶会社記号と想定される。初造年代は不明であるが、1965(昭和40)年頃にはポリ容器に変わったということから、同年代を製造年代の下限に当てることができる¹¹⁾。

43は、パイロットインキ株式会社(現・株式会社パイロットコーポレーション)の「インキ」瓶で、変形台形状を呈する。蓋も残存しており、青色のインクも少量残っている。1949(昭和24)年以降発売のアベックインキ(青・赤)の青色と考えられる。内容量は30ccである。内容量の表示がオンス(oz)でないことから、34と同様の年代観になると考えられる⁶⁾。外底面に石塚硝子株式会社の製瓶会社記号が陽刻される。

44は、現・ハウス食品工業株式会社製の「こしょう」で、内容量20gの角瓶である。体部が間延びした台形状を呈する。立ち上がり部には約1mm大の突起が5列に並んで巡る装飾を施す。正面の平坦部には商品名を記載したと思われるシールがわずかに残り、黄色地に「ハウス食品」と「大阪府」の文字が読み取れる。口部は径約2cmのスクリーユ栓であり、先端には分量を調節する穴あきキャップが残存している。外底面には「ハウス」の文字と、不明瞭ながら日本硝子株式会社の製瓶会社記号、そして数字「3」が陽刻される。商標は1979(昭和54)年より「H」マークとなることから、昭和40年代前半～50年代前半にかけての商品であると推定されている¹²⁾。

ゴミ穴3

45は、株式会社資生堂の「ヘアトニック」のガラス瓶である。各柱状を呈しており、高さ13.5cm、正面と反対側は波打っており、おそらく商品名のシールが貼られていたと思われる部分は、平坦面5.3×5.5cmと反対側に2.5×1.8cmの小さな平坦面が形成される。プラスチック製の穴あきキャップが残存している。1959(昭和34)年～1967(昭和42)年8月までに製造された製品である¹³⁾。

46は、株式会社資生堂の「エムジー5リキッド」のガラス瓶である。角ばった楕円形を呈しており、高さ12.5cm、横幅6.5cm、厚さ3.2cmを計る。側面には、滑り止めとみられる横方向の切り込みがあり、正面には「MG5 SHISEIDO GINZA TOKYO」の文字と資生堂の社章のシールが残存している。上げ底の外底面には、日本硝子工業株式会社の製瓶会社記号と思われる英大文字の「Y」と管理記号と思われる「25」が陽刻されている。1963(昭和38)年に発売、1967(昭和42)年8月までの製造品である¹³⁾。

47は、性格不明のガラス容器である。楕円柱状で口部に向かってややすぼまる。側面部分にはボジで飾りがある。正面の底部立ち上がり部に「H」、対面に「3」の陽刻がある。「H」が製瓶記号であれば、広島硝子工業株式会社の記号かもしれない。外底面には「丌」の陽刻があり、「カクイ」と読ませるようである。容器から酢や醤油などの液体調味料を思わせる。

PL.17-48は、丸美屋食品工業株式会社製の「牛肉すきやきふりかけ」のアルミ箔を貼り合せたポリエチレン製小袋(正味25g)である。12.5×8.5cmの大きさである。日本初の牛肉風味ふりかけであり、パッケージの地は青色、記載文字は、赤・白・青色で使い分けられている。円内に「美」の商標が見受けられる。裏面には商品の紹介が掲載されている。1963(昭和38)年8月発売のオリジナルパッケージであり、1964年(昭和39)年1月まで製造に使用された¹⁴⁾。パッケージの様相を新たにし、現在でも販売されている商品である。

PL.17-49は、三協食品株式会社(現・日の出製粉株式会社)製の「本場ラーメン」,「麺150g スープ25g」の包装紙である。26cm×7.2cmほどの黄色ビニール製包装紙である。社章は星印「☆」内に「SSK」文字である。裏面は、ラーメンの作り方が絵入りで示されている。初造年代は不明だが、1960(昭和35)年に、日の出製粉株式会社が三協食品株式会社より同ブランドを譲り受け、若干パッケージの様相を変えながら現在でも販売されている¹⁵⁾。

農学部焼酎学講座実験棟設置予定地の周辺の電気工事・污水管設置工事の立会調査では、電気工事地点K12・13は、各々150cm深・90cm深で攪乱であった。污水管設置地点では、K14地点が140cm深で攪乱だったほかは、包含層の残りは比較的良好、近世～近代の水田層が確認された。

2006-L ガス漏れ修繕工事 (Fig.14・28)

調査地点 郡元団地F4区

調査期間 2006年12月14日

調査担当 埋蔵文化財調査室 新里貴之

ガス漏れのための緊急工事のため、調査室が急遽、立会調査を行うこととなった。河川砂層と思われる土層を確認

した。遺物は得られていない。

2006-M 環境バイオ研究棟等改修施設整備等事業（農学部1号館電気土木工事）(Fig.14)

調査地点 郡元団地D・E-6区

調査期間 2007年2月21日

調査担当 鹿児島市教育委員会 児之原博寿
埋蔵文化財調査室 新里貴之

農学部1号館建物に接した周辺で、電気配管工事に伴い立会調査を行なった。M1地点は地表下60cm深、M2地点は115cm深まで攪乱であった。

2006-N 共通教育棟3号館玄関横雨排水取替工事 (Fig.2・28)

調査地点 郡元団地L-7・8区

調査期間 2007年3月23日

調査担当 鹿児島市教育委員会 佐々木幸男
埋蔵文化財調査室 中村直子

共通教育棟3号館玄関南側における雨排水取替工事の立会調査を行なった。排水溝設置地点の2か所を50cm深掘削したが、攪乱層であった。N1は底面で2層が露出したが、遺物包含層への影響はないと判断し、調査を終了した。

2006-O 教育学部給水本管修繕工事 (Fig.2・28)

調査地点 郡元団地N・O-6・7区

調査期間 2007年3月20日

調査担当 埋蔵文化財調査室 中村直子

給水管の補修工事に伴い立会調査を行なった。O1地点は弥生～古墳時代の包含層と同時期の土層が確認されたが、黒色土は均質で遺物の出土もなかった。O2地点は110cm深まで攪乱されていた。

2006-P 工学部電気電子工学科棟等空調設備改修工事 (Fig.14・28)

調査地点 郡元団地I-9・10、J-12・13区

調査期間 2007年3月1日

調査担当 鹿児島市教育委員会 岩戸孝夫
埋蔵文化財調査室 中村直子

電気電子工学科棟南側（P1地点）、機械工学科棟近隣（P2・3地点）の工事に伴う立会調査を行なった。P1地点は40cm深で攪乱であった。

P2・3地点は、水平の堆積状況から水田層であると考えられるが、時期不明である。

P2地点3層より成川式壺か埴と思われる胴部片1点、C地点1層より土器小片1点が得られている。

2006-Q 記念碑碑文及び物置設置に伴う工事 (Fig.14)

調査地点 郡元団地E-9、F-7区

調査期間 2007年3月30日

調査担当 埋蔵文化財調査室 中村直子

記念碑碑文地点、物置補強のための基礎部掘削に伴う立会調査を行なった。碑文（Q1）地点は25cm深まで表土の範囲であると判断された。基礎部（Q2）地点も50cm深で攪乱であり、包含層に影響なく調査を終了した。

2006-R 共通教育棟2号館樹木移植工事 (Fig.2・28)

調査地点 郡元団地J-6、K-7区

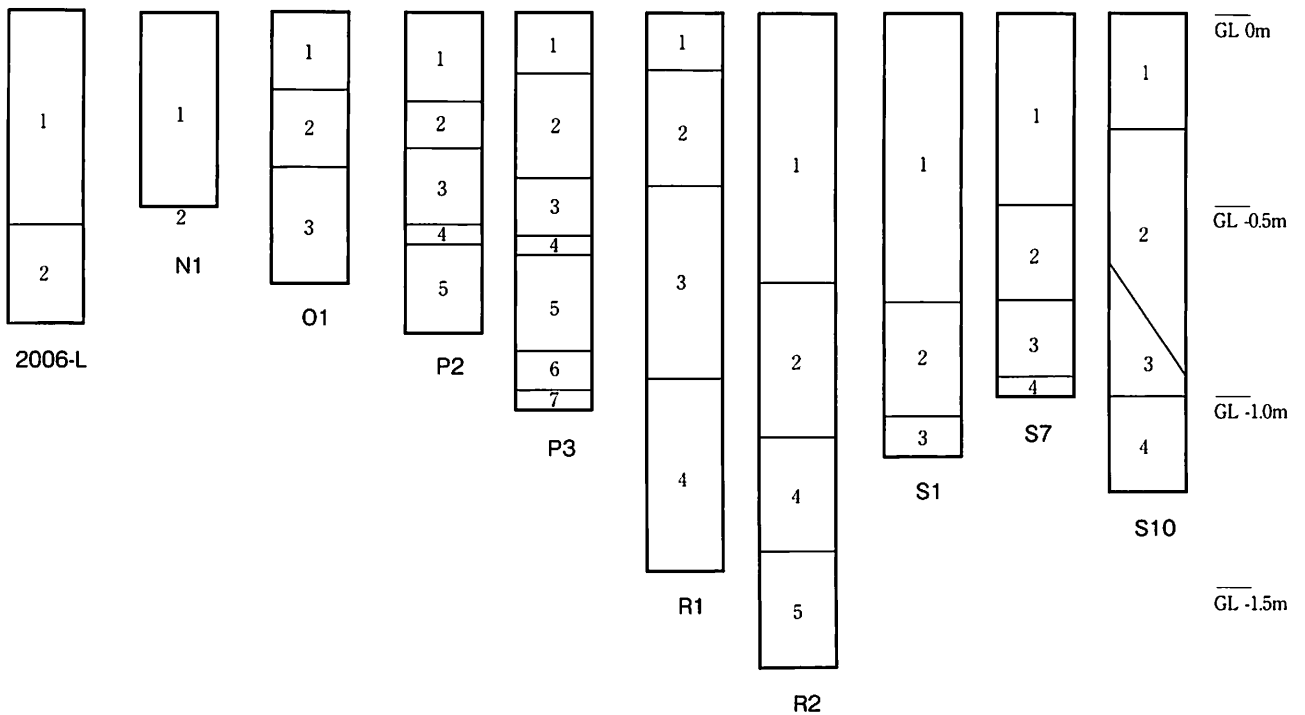
調査期間 2007年3月9日

調査担当 鹿児島市教育委員会 岩戸孝夫

埋蔵文化財調査室 中村直子

共通教育棟2号館中庭の支障樹木(R1地点)を共通教育棟3号館の東側(R2地点)に移植する作業に伴い、立会調査を行なった。共通教育棟2号館中庭は、古墳時代住居跡群の密集地点に相当し、弥生時代から近現代までの遺物が多く得られている。特にR1地点の3層と4層の境界ラインと4層中から遺物が多い。R2地点は、層序がR1地点に類似するが遺物は少なく、4層から土器片が1点のみ出土している。

R1地点1層よりガラス製容器片(1)点、2・3層より成川式甕脚台片1点、赤色顔料塗付土器片1点、胴部片6点、須恵器片1点、焼締陶器片1点、薩摩焼と思われる陶器の頸部片(1)点、瓦片1点、近現代染付碗口縁部片(2)点、石2点得られている。4層からは弥生時代甕口縁部片(1)点、脚部片3(うち1)点、成川式・笹貫式甕口縁



2006-L
 1層：攪乱。
 2層：灰白色2.5Y7/1細粗砂層。脆い。わずかにシルトの混じる箇所がある。

2006-N
N1
 1層：攪乱。
 2層：暗灰色粗砂混じりシルト質砂。

2006-O
O1
 1層：攪乱。
 2層：灰色～黄褐色シルト。
 3層：黒色シルト。
 4層：砂層。軽石混じり。

2006-P
P2・P3
 1層：攪乱。
 2層：灰褐色シルト質砂。パミス混じり。水田層。
 3層：暗灰褐色シルト質砂。鉄分浸透。パミス混じり。水田層。
 4層：暗灰褐色シルト質砂。鉄分浸透。パミス混じり。水田層。
 5層：灰白色シルト質砂。鉄分浸透。パミス混じり。水田層。
 6層：灰黄褐色10YR4/2砂混じりシルト。
 7層：灰黄褐色10YR6/2粗砂。

2006-R
R1・R2
 1層：攪乱。
 2層：灰褐色
 3層：黄灰褐色
 4層：黒褐色シルト質砂。遺物多量出土。※移植先からはほとんど出土しない。
 5層：砂層。

2006-S
S1・S7
 1層：攪乱。
 2層：灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。0.5～1cm大のパミス混じり。締まり悪い。水田層。
 3層：にぶい黄褐色10YR4/3砂質シルト。0.5～1cm大のパミス混じり。マンガン混じり。水田層。
 4層：灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。0.5～1cm大のパミス混じり。締まり悪い。水田層。

S10
 1層：攪乱。
 2層：灰黄褐色10YR4/2シルトとにぶい黄褐色10YR7/2粗細砂層の交互層。0.5～5cm大のパミス混じり。締まり良い。河の氾濫層か。70cm深で陶磁器1点出土。
 3層：黒褐色10YR2/2砂質シルト。0.5～1cm大のパミス混じり。締まり良い。弥生～古墳時代層。

Fig.28 2006-L・N・O・P・R・S土層柱状図

III 立会調査



Fig.29 2006-R1 (S=1/3)



50



51



52



53



54



56



59



57



60



55



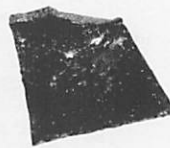
58



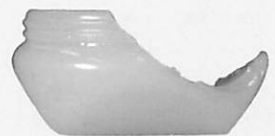
61



62



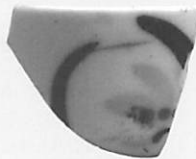
63



64



65



66



67

Ⅲ 立会調査

Tab.2 土器・陶磁器

番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	胎土		調整	備考
						混和材	多さ		
2	2006-B1	陶器	碗	高台	胎土:橙7.5YR7/4.釉:オーブ褐2.5Y4/6	砂:白	1	ロクロ整形	底径(4.1)
3	2006-B2	磁器	碗	口縁	胎土:白,釉:白				
4	2006-B2	成川式	甕	口縁	外:灰黄褐10YR4/2.器内:灰白10YR8/2.内:におい橙7.5YR7/4	粗砂:石英,砂:黒・白,細砂:石英・白	2	表裏:ハケ(一)→ナデ	スス付着
5	2006-E11	磁器	茶碗	高台	胎土:青白,釉:青白				底径3.1
6	2006-E11	磁器	茶碗	口縁	胎土:白,釉:明緑灰10G7/1.文様:極暗褐7.5YR2/3				口径(7.8)
7	2006-E11	磁器	茶碗	口縁	胎土:青白,釉:青白,文様:群青				
8	2006-E11	磁器	ティーカップ	口縁	胎土:白,釉:白,文様:極彩色				口径(7.7)
9	2006-E11	日本硬質陶器株式会社製磁器	皿	口縁	胎土:白,釉:白,文様:赤褐2.5YR4/6				全面に貫入,口径(22.3)
10	2006-E11	日本硬質陶器株式会社製磁器	皿	底	胎土:白,釉:白,ロゾ:黄緑				全面に貫入
11	2006-E11	磁器	井碗	高台	胎土:白,釉:白,文様:外:赤褐2.5YR4/6.内:赤褐2.5YR4/6・青				内面:常文,底径(7.4)
15	2006-H2	磁器	「鹿高農對岳寮」井碗	口縁	胎土:白,釉:青白,文様:群青				「鹿」の一部?
16	2006-I3	焼締土器	火鉢?	受け	におい:黄橙10YR7/4	粗砂:石英,砂:雲母・石英,細砂:黒・白	2	ナデ(一)	上部は接合部で破損
17	2006-S10	成川式	高坏	脚	橙7.5YR6/6	細砂:石英・雲母・角閃石	1		
18	2006-J2	クロム青磁	碗	口縁	胎土:白,釉:明オーブ灰5GY7/1.文様:暗褐10YR3/4・緑				草花文(ススキ)
19	2006-K1	磁器	「鹿高農對岳寮」井碗	口縁	胎土:白,釉:青白,文様:群青				「岳」
20	2006-K2	クロム青磁	茶碗	口縁	胎土:白,釉:深緑,文様:明緑灰7.5GY7/1				「寿」
22	2006-K3	美濃窯業株式会社製磁器	「生協」皿	完形	胎土:白,釉:白,文様:群青				「生協」,「MINO」,口径19.4,底径11.8,器高2.1
23	2006-K3	美濃窯業株式会社製磁器	「生協」井碗	完形	胎土:白,釉:白,文様:群青				「生協」,「MINO」,口径15.2,底径5.8,器高7.4
24	2006-K33	磁器	「農学部」茶碗	完形	胎土:白,釉:白,文様:緑				「農学部」,「大学KAGOSIMA」,口径8,底径4,器高5.4
25	2006-K3	磁器	茶碗	完形	胎土:白,釉:白,文様:極暗褐7.5YR2/3(上絵).文字:金,スタンプ:明赤褐5YR5/8				くずし字,口径7.3,底径3.0,器高5
26	2006-K3	クロム青磁	井碗	口~底	胎土:白,釉:明緑灰7.5GY7/1.文様:暗褐10YR3/3・緑				草花文(笹),口径(15),底径(5.4),器高6.4
29	2006-Kゴミ穴1	美濃窯業株式会社製磁器	「生協」茶碗	口縁	胎土:白,釉:白,文様:群青				「生協」,口径(8.8)
30	2006-Kゴミ穴1	磁器	茶碗	口縁	胎土:白,釉:白				口径(7.8)
31	2006-Kゴミ穴1	磁器	「農学部」茶碗	口~底	胎土:白,釉:白,文様:緑				「農学部」,「大学KAGOSIMA」,口径(8),底径(4),器高(5.4)
32	2006-Kゴミ穴1	磁器	「農学部」茶碗	口縁	胎土:白,釉:白,文様:緑				「農学部」,口径(8),底径(4),器高(5.4)
50	2006-R1-4層	入来II式	甕	口縁	外:におい黄橙10YR6/3.内:におい黄橙10YR7/4	粗砂:砂・細砂:角閃石・石英・赤	3	外:ナデ(一),内:ナデ(一)	スス付着
51	2006-R1-4層	成川式・笹貫式	甕	口縁	内外:におい橙7.5YR7/4.内:浅黄2.5Y7/3	礫:角閃石,粗砂:砂・細砂:角閃石・石英	2	外:ハケ(一),内:ハケ(一)→ナデ(一)	
52	2006-R1-4層	成川式	鉢	口縁	におい黄橙10YR7/4	粗砂:砂・細砂:角閃石・石英・赤	2	外:ハケ(一)→ナデ(一),内:ナデ(一)	
53	2006-R1-4層	弥生	甕	脚台	外:におい橙7.5YR7/4.内:黄灰2.5Y4/1.内:浅黄橙7.5YR8/4	礫:粗砂・砂・細砂:赤・角閃石・石英・白	4	外:ヘラ(一)→ナデ,内:ナデ	底径(6.6)
54	2006-R1-4層	成川式	甕	脚台	外:橙7.5YR7/6.内:浅黄橙10YR8/3に類似	礫:粗砂・砂・細砂:赤・角閃石・石英・白	3	外:ヘラ(一)→ナデ(一),内:ナデ	
55	2006-R1-4層	成川式	甕	脚台	内外:におい黄橙10YR7/4	礫:石英・角閃石	1	外:ナデ,内:ナデ(一)	底径(10.1)
56	2006-R1-4層	成川式	甕	脚台	外:におい黄橙10YR6/4.内:橙5YR6/6.内:におい橙7.5YR7/3に類似	礫:白,粗砂:砂・細砂:白・灰・石英・角閃石	2	内外:ナデ(一)	
57	2006-R1-4層	成川式	鉢	脚台	内外:浅黄橙7.5YR8/3.内:黄灰2.5Y5/1	礫:赤,粗砂:砂・細砂:角閃石・白・石英・赤	3	外:ヘラ(一)→ナデ(一),内:ヘラ(一)→ナデ	
58	2006-R1-4層	成川式	高坏	脚	内外内:黄灰2.5YR6/2.顔料:におい赤褐2.5YR5/4	礫:灰	1	外:ミガキ(一),内:ナデ(一)	赤色顔料

Ⅲ 立会調査

59	2006-R1-4層	成川式	高坏	坏	外:橙5YR6/8,内:ぶい黄橙10YR7/4,顔料:赤褐2.5YR4/8	粗砂:石英・角閃石	1	内外ナテ	赤色顔料
60	2006-R1-4層	成川式	高坏	脚	外:浅黄橙10YR8/3,内:褐灰10YR5/1,顔料:赤褐2.5YR4/6	砂:白・石英	1	外:ミガキ()	赤色顔料
61	2006-R1-4層	成川式	高坏	脚	外:浅黄橙10YR8/3,内:褐灰10YR6/1,顔料:ぶい赤褐2.5YR4/4	礫:角閃石	1	外:ミガキ(-),内:ケズリ()→ナテ()	赤色顔料,内面にも顔料の指跡か?か所に認められる。
62	2006-R1-排土	須恵器	甕か壺	肩	外:灰白2.5Y7/1,内:灰N5/0	礫:黒,粗砂:石英・黒	2	外:ハケ(-),内:同心円当具	外:自然釉(薄)
63	2006-R1-2~3層	薩摩焼	土瓶?	肩	胎:土灰N4/0,釉:黒7.5Y2/1	細砂:白	1		内外面施釉
64	2006-R1-排土	磁器	茶碗	口縁	胎:土白,釉:白,文様:暗褐10YR3/3,群青・薄紫				草花文
65	2006-R1-排土	磁器	茶碗	口縁	胎:土白,釉:青白,文様:群青・深緑・ぶい赤褐5YR4/4				草花文(笹・松葉)
66	2006-R1-2~3層	磁器	茶碗	口縁	胎:土白,釉:白,文様:深緑・薄紫・赤褐2.5YR4/6				草花文

Tab.3 ガラス瓶

出土地点	販売店	商品名	ガラス色	高さ	口径(内径)	胴径	底径	口形	底形	底面記号	側面記号
12 2006-E11	(株)シャンソン化粧品本舗	アコール	濃紫色(不透明)	5.8	3.6(2.7)	4.2×4.6	4.3	スクリュー栓	隅丸方形	chanson	
13 2006-E11	(三共)		無色透明			25.39	19.96	スクリュー栓?	円形	18,NO1,K	
14 2006-E11			無色透明	5.7	1.2(0.5)	2×2	1.5	スクリュー栓	方形		
27 2006-K4	丹頂(株)	丹頂ボマード	白色(不透明)	4.3	5.2	6.3	5.7	スクリュー栓	円形	TANCHO CO. LTD:MADE IN JAPAN	
28 2006-K4	磯志まん(株)	磯志まん	青緑色透明			4.3×5	3.9	ツイスト	楕円形	◇,その他	磯志まん
33 2006-Kゴミ穴1	パイロットインキ(株)	パイロットインキ	無色透明	5.1	3.2(2.6)	4.9×6.2	4.2~5.6	スクリュー栓	長方形	6?石?	60cc.PILOT MADE IN JAPAN.5
34 2006-Kゴミ穴1	パイロットインキ(株)	パイロットインキ	無色透明		2.6(1.7)	4.5×8.9	4.1~8	ゴム栓	長楕円形		PILOT MADE IN JAPAN.350cc
35 2006-Kゴミ穴1			無色透明	6	1.2(0.7)	3.4×3.4	2.5	スクリュー栓	隅丸方形	文様か?	
36 2006-Kゴミ穴1	ニチベイナガク	タイブクリナー	青色透明	8.9	2.5(1)	3.6×5.5	3~5	スクリュー栓	長方形	◎	
37 2006-Kゴミ穴1	麒麟麦酒(株)	麒麟ビール	茶色透明	×	×	7.5	6.2	(王冠)	円形	T	麒麟ビール 登録商標.◎633cc
38 2006-Kゴミ穴1	麒麟麦酒(株)	麒麟ビール	茶色透明	×	×	(7.3)	(5.7)	(王冠)	円形		登録商標
39 2006-Kゴミ穴1	南日本酪農協同(株)	南日本デリー牛乳	無色透明	×	×	5.7	4.3	紙蓋	円形	A,◎.3.H	200cc.12
40 2006-Kゴミ穴1	愛知トマト(株)	トマトケチャップ	無色透明	23.5	2.6(1.7)	6.5	6.5	王冠キャップ	八角形	AICHI TOMATO CO 56.◎	一,◎.Y.-2
41 2006-Kゴミ穴2	南日本酪農協同(株)	南日本デリー牛乳	無色透明	14	4.5(3.3)	5.7	4.6	紙蓋	円形	◇	200cc.23
42 2006-Kゴミ穴2	ナニワ薬品化成(株)	純水酢酸	青緑色透明	18.9	2.5(1.7)	7.4	6.6	スクリュー栓	円形	T.7	
43 2006-Kゴミ穴2	パイロットインキ(株)	アベックインキ	無色透明			3.5×4.4	3.1~4	スクリュー栓	長方形	◎.47	30cc.PILOT MADE IN JAPAN
44 2006-Kゴミ穴2	ハウス食品工業(株)	こしょう	無色透明	8.5	1.9(1.3)	2.6×4.5	2.3~3.7	スクリュー栓	長楕円形	ハウス.◎.3	
45 2006-Kゴミ穴3	(株)資生堂	HAIR TONIC	茶色透明	13.4	1.8(1.2)	3.1×5.3	2.4~4	スクリュー栓	長方形	0.14	
46 2006-Kゴミ穴3	(株)資生堂	MG5	無色透明	12.4	1.8(0.5)	3.3×6.8	2.6~5.1	スクリュー栓	長楕円形	Y.25	
47 2006-Kゴミ穴3			無色透明	9.2	3.9(3.1)	4.1~5.4	3.5~4.5	スクリュー栓	レモン形	丌	H.3
67 2006-R1			白色(不透明)	3.5	(5.6)	(7.6)	(5.1)	スクリュー栓	方形	KNK	

部片1点、胴部片19点、一条突帯・絡縄突帯4点、脚部片5(うち4)点、成川式鉢口縁部片1点、脚3点、成川式壺の刻目突帯1点、底部片1点、高坏の坏部片2(うち1)点、脚部片5(うち3)点、赤色顔料塗付胴部片9点、器種不明胴部片93点、石・石材が4点得られている。

また、R1地点廃土中より成川式高坏(赤色顔料塗付)1点、胴部片3点、大甕か壺と思われる須恵器肩部片(1)点、胴部片1点、近現代染付湯飲み茶碗(2)点、石1点が得られている。同地点周辺より成川式胴部片1点が採集されている。

R2地点では、成川式胴部片1点、内面の焼けた焼締土器が1点得られている。

以上のうち、()内の点数を図化した(Fig.29)。

50は弥生時代中期前半新段階の incoming II 式甕の口縁部、53は同時期の甕の底部ではないかと思われる。51は成川式(笹貫式)の口縁部片であり、54～56が同底部と考えられる。52は鉢形土器の口縁部片で、57が同底部と考えられる。58～61は成川式の高坏である。

62は須恵器甕か壺の頸部付近資料である。

63は薩摩焼の肩部である。

64～66は近現代磁器で、湯のみ茶碗である。笹の葉のような草花文などが施される。

67は、高さ3.5cmほどの低い肩の張った白色ガラスの容器である。側面を面取りしている。外底面には、「KNK」の英大文字が陽刻されている。一見したところ、化粧品の瓶ではないか考えられるが、不明の容器である。

2006-S 環境バイオ研究棟等改修施設整備等事業(農学部1号館配管工事)(Fig.14・28)

調査地点 郡元団地D・E-5区

調査期間 2007年3月20・28・30日、4月4・9日

調査担当 鹿児島市教育委員会 佐々木幸男・岩戸孝夫

埋蔵文化財調査室 新里貴之

農学部1号館中庭に、消火管・ガス管・給排水管の配管工事に伴う立会調査を行なった。ガス・消火管部のA・B地点は75cm深で攪乱、C・A地点は70cm深で攪乱であった。給排水管部は近世～近代の水田跡が確認された。

農学部1号館北側の給排水管部A地点は90cm深まで攪乱であり、B地点では近世の河川砂層と水田層、弥生～古墳時代の包含層が確認されています。

S10地点2層(河川砂層)より近現代のクロム青磁碗1点が得られており、外面に上絵でススキ様の文様が描かれる(Fig.24-18)。

2006-T 工学部埋設消火管漏水修繕工事(Fig.2)

調査地点 郡元団地H-11区

調査期間 2007年3月29日

調査担当 埋蔵文化財調査室 中村直子

工学部情報工学科で消火管が漏水しているとの連絡を受け、緊急に調査室で立会調査を行なった。T1地点は1.2m深、T2地点は1m深まで攪乱層であった。漏水箇所は見当たらず、埋め戻して調査を終了した。

まとめ

2006(平成18)年度の立会調査は、農学部域が多かった(2006-E・Kなど)。本地域は近世から近代の水田跡が検出されており、遺物も小破片である。しかし、鹿児島高等農林学校時代からの伝統のある遺物が、ゴミ穴に多く残されていた。これらは、茶碗・井・碗・皿などの食器類が多いが、ほかにも薬品瓶、化粧品(男女)、インク瓶、ライター、クリーナー、写真用停止液、調味料、ビール、食品の包装紙なども得られている。今回の遺物の大半が昭和30年から昭和40年代に相当するものである。出土した位置からすると、鹿児島高等農林学校の学生寮のあった農学部2号館南側付近で、同時代のゴミ穴から鹿児島高等農林学校と鹿児島大学時代の遺物が出土し、それより西の焼酎学講座棟や南側の農学部1号館中庭では、鹿児島大学時代の遺物が主体として得られ、徐々にゴミ捨て場の位置が拡散していく様子を読み取れる。しかしながら、遺物の大半である食器類をこれも多くは性格を明らかにし得ない。ごく近年であってもメーカーにはその資料が存在していないことも多かった。ほかにも、鹿児島高等農林学校の学生寮

の碗・皿などは、当然ながら現在の鹿児島大学にしか出土しない近代教育施設の遺物として重要であろう。今回は、現在でも失われつつある近現代の情報を後世に残す意味で、遺物の紹介を試みた。

また、共通教育棟の中庭地点(2006-R)は、古墳時代の住居跡群が検出される地点に相当し、極めて多くの遺物が認められた。本地点の工事には、埋蔵文化財に対する慎重な対応が必要であろう。

Tab.4 現代遺物の編年

番号	地点	遺物	鹿児島高等 農林学校		鹿児島高等農林 専門学校				鹿児島大学 鹿児島農林 専門学校			廃止																		
									鹿児島大学			10周年																		
			1909	1918	19	1944	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68
9-10	2006-E11	日硬陶皿																												
12	2006-E11	シャンソンアコール																												
19	2006-K1	對岳窯碗																												
21	2006-K2	防火水槽																												
24	2006-K3	農学部茶碗																												
22	2006-K3	生協皿																												
23	2006-K3	生協丼碗																												
28	2006-K4	磯じまん																												
27	2006-K4	丹頂ポマード																												
31-32	2006-Kゴミ穴1	農学部茶碗																												
38	2006-Kゴミ穴1	キリンビール																												
40	2006-Kゴミ穴1	ケチャップ																												
37	2006-Kゴミ穴1	キリンビール																												
33-34	2006-Kゴミ穴1	インキ																												
39	2006-Kゴミ穴1	デーリィ牛乳																												
29	2006-Kゴミ穴1	生協茶碗																												
42	2006-Kゴミ穴2	純水酢酸																												
43	2006-Kゴミ穴2	インキ																												
41	2006-Kゴミ穴2	デーリィ牛乳																												
44	2006-Kゴミ穴2	こしょう																												
49	2006-Kゴミ穴3	棒ラーメン																												
45	2006-Kゴミ穴3	ヘアトニック																												
46	2006-Kゴミ穴3	KG5																												
48	2006-Kゴミ穴3	ふりかけ																												

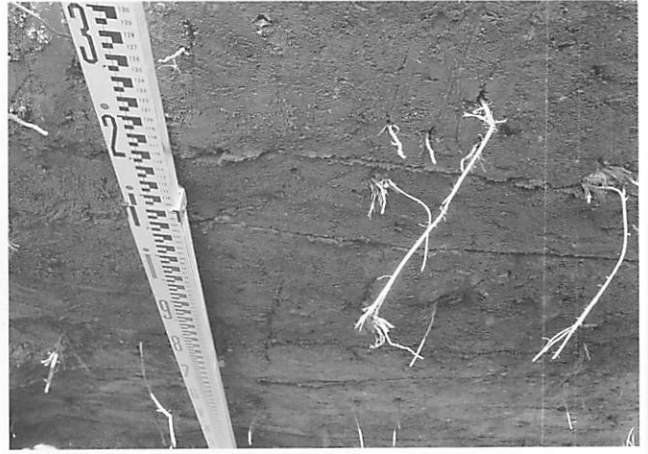
註

- 1) ニッコー株式会社陶磁器事業部よりご教示をいただいた。同社は戦前に釜山に本社を移設したことや、戦後、石川県の工場の火災などで古い資料が失われているという。
- 2) 株式会社シャンソン化粧品本社営業部よりご教示いただいた。
- 3) 美濃窯業株式会社プラント部にご教示いただいた。ほかにも同社にご寄贈いただいた、美濃窯業株式会社 2002『美濃窯業社史-1918～2002 83年の歩み』、同 2006『美濃窯業製陶株式会社社史-1919～2002 83年の歩み』を参考にした。
- 4) 株式会社マンガム広報IR室よりご教示いただいた。
- 5) 磯じまん株式会社よりご教示いただいた。
- 6) 株式会社パイロットコーポレーション九州支社よりご教示いただいた。同社より写しの一部をいただいた『パイロットタイムス』1926～1963年版にも拠っている。
- 7) キリンビールお客様センターよりご教示いただいた。
- 8) 南日本酪農協同株式会社営業企画部よりご教示いただいた。
- 9) ホームページ「漂流牛乳 (<http://www.citymilk.net/index.htm>)」管理人より多くの情報をご教示いただいた。
- 10) カゴメ株式会社東京本社CSR推進室お客様相談センターよりご教示いただいた。
- 11) 株式会社エヌ・エヌ・シー大阪(本社：福岡)よりご教示いただいた。
- 12) ハウス食品株式会社お客様相談センターよりご教示いただいた。
- 13) 株式会社資生堂企業文化部企業資料館Gよりご教示いただいた。
- 14) 丸美屋食品工業株式会社広報宣伝室よりご教示いただいた。同製品は、1964年(昭和39)年2月には「エイトマンシール」を封入したパッケージとなり、1966(昭和41)年まで発売された。

Ⅲ 立会調査



B1地点



B15地点



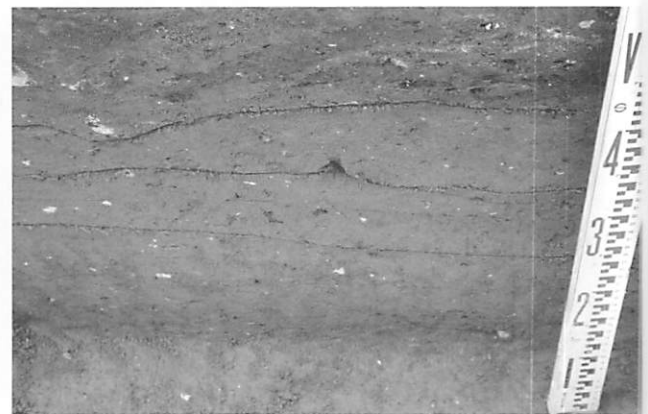
C2地点



C11地点の石柱



C11地点



D3地点



D8地点



D9地点

III 立会調査



E4地点



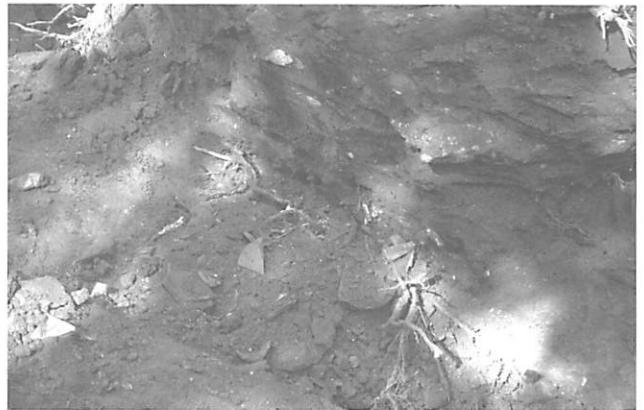
G9地点



H3地点



H7地点



H7地点



H3地点



H14地点

Ⅲ 立会調査



I5地点



J2地点



K2地点



K5地点



K3地点コミ穴



K6地点

Ⅲ 立会調査



2006-K 焼耐学講座棟新営地点



K11地点



K01地点



K02地点



K03地点



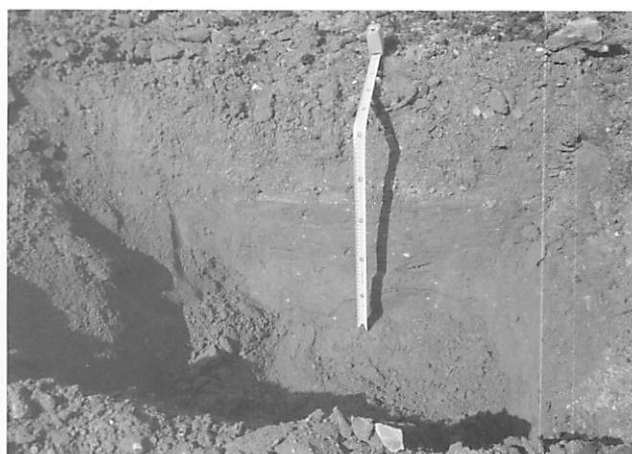
K09地点



K17地点



2006-L



N1地点



P2地点



R2地点



R1地点



R1地点4層上面土器



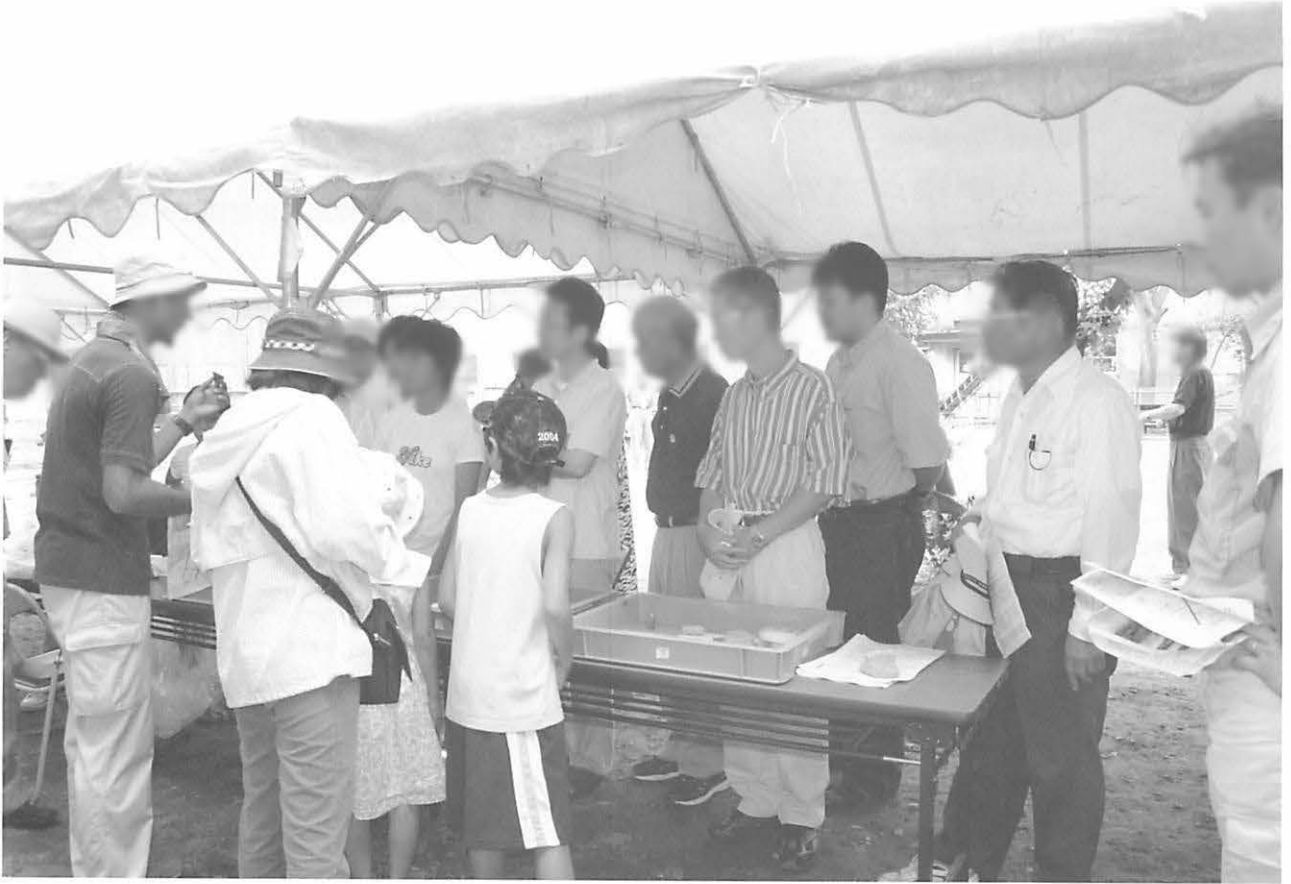
R1地点4層上面土器



S10地点

Ⅳ 遺跡説明会

2006-2 農学部1号館改修工事に伴う発掘調査に伴い、調査中の2006年8月12日に一般市民向けの遺跡説明会を開催した。調査室では、近世以降の遺物と遺構で説明会を開催するのは初めての試みであった。一般市民ほか関係者50名内外の参加があり、特に、鹿児島高等農林学校時代の遺物展示に注目が集まった。



PL.24 遺跡見学会の様子

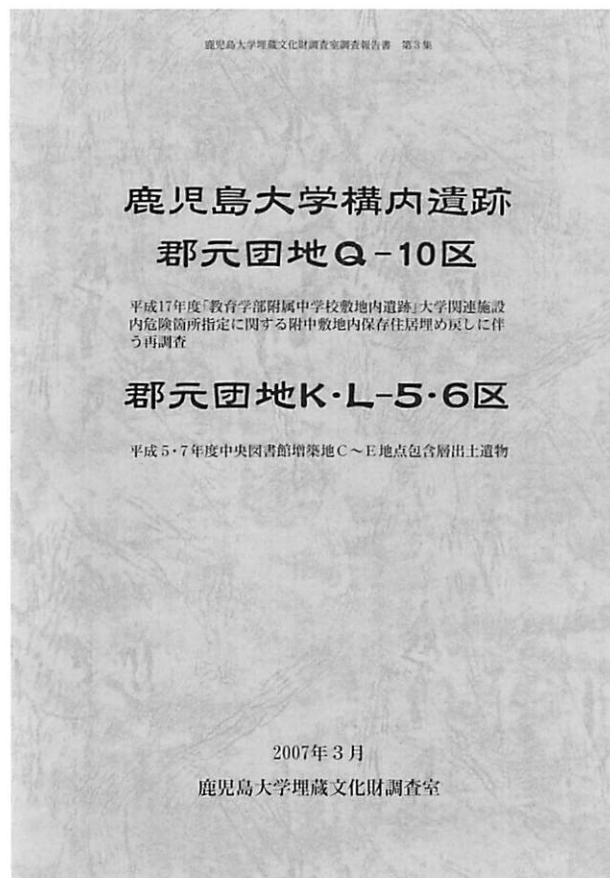
Ⅴ 整理作業

郡元団地Q-10区教育学部附属中学校敷地内遺跡の遺物洗浄・接合・実測・トレース作業とともに、1963年に河口貞徳氏によって調査された遺物の洗浄・接合・実測を行なった。

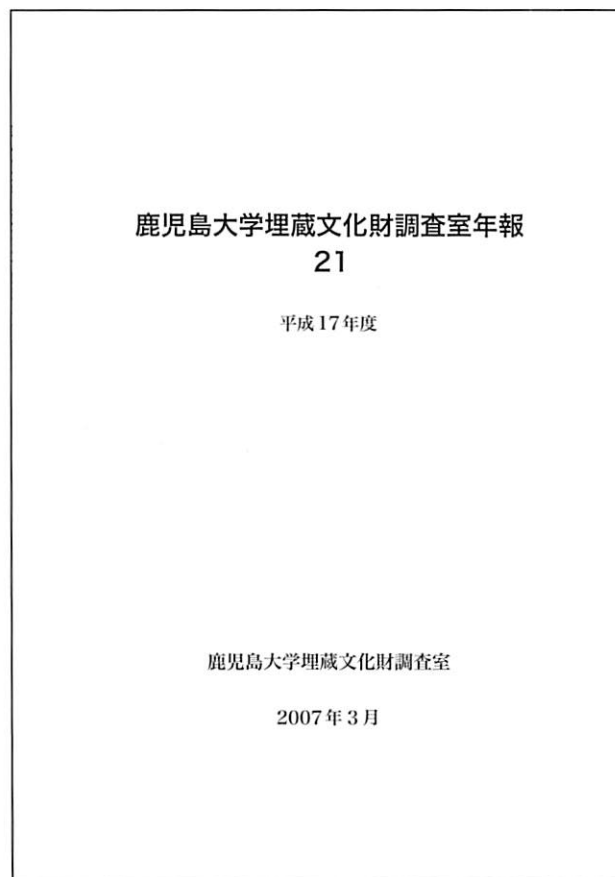
郡元団地K・L-5・6区中央図書館建設に伴う発掘調査で出土した遺物のうち、未報告であった包含層出土遺物の実測・トレース作業を行なった。

VI 刊行物

鹿児島大学埋蔵文化財調査室調査報告書第3集（郡元団地Q-10区、郡元団地K・L-5・6区）と、鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報21を刊行した。



PL.25 報告書



PL.26 年報

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会規則

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人鹿児島大学常置委員会規則(平成16年4月1日制定)第3条第3項に基づき、国立大学法人鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会(以下「委員会」という)に関し、必要な事項を定める。

(組織)

第2条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 鹿児島大学埋蔵文化財調査室長(以下「調査室長」という)。
- (2) 各学部教授、准教授又は講師のうちから選出された者各1名。
 - 2 前項第2号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員を生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする(審議事項)。

第3条 委員会は、次に掲げる事項について審議する。

- (1) 調査実施計画に関すること。
- (2) 埋蔵文化財調査室の予算に関すること。
- (3) その他埋蔵文化財の業務に関すること。

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、第2条第1項第1号をもって充てる。

- 2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第5条 委員長は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数の場合は、議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

(事務)

第7条 委員会に関する事務は、施設部企画課において処理する。

(雑則)

第8条 この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附則

- 1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。

鹿児島大学埋蔵文化財調査室規則

(趣旨)

第1条 この規則は、鹿児島大学学則(平成16年4月1日制定)第7条第2項の規定に基づき、鹿児島大学埋蔵文化財調査室(以下「調査室」という)に関し、必要な事項を定める。

(目的)

第2条 調査室は、鹿児島大学(以下「本学」という)の埋蔵文化財の調査に関する業務を行い、本学内に存在する埋蔵文化財の保護対策を講ずることを目的とする。

(業務)

第3条 調査室は、次の業務を行う。

- (1) 調査実施計画の立案
- (2) 発掘調査、分布調査および確認調査
- (3) 調査報告書の作成
- (4) その他必要な事項

(職員)

第4条 調査室に、次の職員を置く。

- (1) 調査室長(以下、「室長」という)
- (2) 主任
- (3) その他必要な職員

第5条 室長は、本学の考古学に関連する教員の中から国立大学法人鹿児島大学学内共同研究施設等人事委員会(以下「委員会」という)が推薦し、学長が選考する。

- 2 室長は、調査室の業務を掌理する。
- 3 室長の任期は2年とし、再任を妨げない。
- 4 室長に欠員を生じた場合の補欠の室長の任期は、前任者の残任期間とする。

(主任等)

第6条 主任は、調査室の職員の中から、特に埋蔵文化財に関する専門知識を有する者を委員会が推薦し、学長が選考する。

- 2 主任は、室長の命を受けて調査室の業務を処理する。
- 3 職員は、調査室の業務に従事する。

(事務)

第7条 調査室に関する事務は、施設部企画課において処理する。

(雑則)

第8条 この規則に定めるもののほか、調査室に関し必要な事項は、別に定める。

附則

- 1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。
- 2 この規則施行後、最初の室長は学長が指名した者をこの規則により選考したものとみなす。

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会(平成19年4月1日現在)

委員長 新田栄治(埋蔵文化財調査室 室長)

委員 本田道輝(法文学部)

日隈正守(教育学部)

稲田浩一(理学部)

築瀬 誠(医学部)

山崎要一(歯学部)

筒井俊雄(工学部)

南 雄二(農学部)

佐野正昭(水産学部)

山崎要一(大学院医歯学総合研究科)

鹿児島大学埋蔵文化財調査室(平成19年4月1日現在)

室長(併) 法文学部教授 新田栄治

主任 准教授 中村直子

助教 新里貴之

技術補佐員 篠原美智子

福永美保子

Ⅶ 2007(平成19年度)の事業概要

2007(平成19)年度は、発掘調査3件、試掘調査1件、立会調査20件を実施した(Tab.5)。

その他、発掘調査に伴う遺跡説明会は1件、発掘調査期間中の体験発掘の受け入れ4件を実施した。また、整理作業6件、公開講座を1件実施している。年度末まで発掘調査が行われたため、刊行物の発行はできなかった。

発掘調査の概略は以下のとおりである。なお、2007-3の試掘調査に関しては、調査主体が鹿児島市教育委員会である。立会調査の詳細に関しては、Ⅱ章以下に記す。

Tab.5 2007(平成19)年度事業一覧

事業	コード	地区	調査名	日程	担当者	備考
発掘調査	2007-1	桜E~G-8~10	中央診療棟新営その他工事に伴う発掘調査	2007.6.8~11.2	新里	新和技術コンサルタント
	2007-2	郡I・J-5・6	共通教育棟改修工事に伴う発掘調査	2007.7.12~2.22	中村	国際航業
	2007-4	郡C-6	南九州地区軽種馬医療体制整備事業に伴う発掘調査	2007.12.18~2008.3.31	新里・中村	国際航業
試掘調査	2007-3	桜B-3	PETセンター建設に伴う試掘調査	2007.11.12~16	市立部	新里
立会調査	2007-A	郡C-7	農学部3号館土木工事	2007.6.28.8.3	市立部・佐々木	中村
	2007-B	郡K・L-8~10	研究棟新営工事	2007.6.4・13-21	市佐々木	中村
	2007-D	桜F~M-8~10	桜ヶ丘支障配管等工事	2007.5.11.7.23・25~27	市佐々木	新里・中村
	2007-E	郡I-12	工学部消火管漏水修繕工事	2007.4.8	中村	(緊急)
	2007-F	郡C・D-7	環境バイオ研究棟等回収施設整備事業に伴う電気土木工事	2007.7.12	市立部	中村
	2007-G	桜D・E-7・8	桜ヶ丘駐車場・スロープ設置工事	2007.5.8	新里	
	2007-H	郡H-I-9	工学部ガス漏れ修繕工事	2007.9.5・19	市佐々木	中村
	2007-I	郡J-4~6	共通教育棟樹木移植工事	2007.7.4	市佐々木	中村
	2007-J	郡I-11	工学部ガス漏れ修繕工事	2007.5.7	新里	(緊急)
	2007-K	桜H-3・4	桜ヶ丘駐車場敷地地盤調査	2007.7.9・10.8.8	市佐々木	新里
	2007-L	桜G-6	桜ヶ丘清掃員控え室新営工事	2007.9.25	市児之原	新里
	2007-M	郡C-7・8	農学部3号館給排水配管工事	2007.10.10	市佐々木	中村
	2007-N	桜K-4	桜ヶ丘保育施設建設に伴う地盤調査	2007.8.28・30.9.3・6	新里	
	2007-O	郡F~O-6~11	郡元ガス管改修工事	2007.12.7・19・20・25~28.2008.1.7	市佐々木・児之原・立部	新里・中村
	2007-P	郡A~E-4~6	農学部インフラ整備工事	2007.10.17・18	市佐々木・児之原	中村・新里
	2007-Q	郡N-8・10	運動場水漏れ修繕工事	2007.10.30	中村	(緊急)
	2007-R	郡J-11	工学部プレハブ設置新築工事	2007.12.14	市児之原	新里
	2007-V	郡H-11	工学部機械工学科1号棟等空調整備工事	2008.2.4	新里	
2007-W	郡B・C-4~6	農学部環境バイオ研究棟電気工事	2008.3.25	市岩戸	中村	
2007-X	郡E・F-6・7	農学部2号館改修・インフラ整備工事	2008.3.25.4.2・15	市岩戸	中村・新里・寒川	
遺跡説明会	2007-2		共通教育棟改修工事に伴う発掘調査遺跡説明会	2007.12.15	中村	鹿大院生
体験発掘	2007-2		小中学生(共通教育棟2号館)	2007.8.21	中村	
	2007-1		鹿大学生(中央診療棟)	2007.7.20	新里	
	2007-2		鹿女短学生(共通教育棟2号館)	2007.10.22	中村	
	2007-2		鹿大学生(共通教育棟2号館)	2007.10.31	中村	
公開講座	(2007-2)		【鹿大キャンパスで遺跡を探る—土器や石器をさわってみよう—】	2007.10.20・27	中村・新里	
整理作業	1995-4	郡Q-10	幼稚園舎建設に伴う発掘調査出土品		接合・実測・トレス	
	2005-4・2006-2・2006-4	郡Q-10	農学部PFI事業関係発掘調査出土品		注記・接合・実測	
	1999-1	郡K・L-5-6	文系総合研究棟建設に伴う発掘調査出土品		注記	
	2007-1	桜E~G-8~10	桜ヶ丘団地中央診療棟新営その他工事に伴う発掘調査出土品		洗浄・注記	
	2007-2	郡I・J-5・6	共通教育棟改修工事に伴う発掘調査出土品		洗浄	
	2007-4	郡C-6	南九州地区軽種馬医療体制整備事業に伴う発掘調査出土品		洗浄・注記	

2007-1 中央診療棟新営その他工事に伴う発掘調査

調査地点 医学部駐車場・周辺道路(桜ヶ丘団地E～G-8～10区)

調査期間 平成19年6月8日～11月2日

調査担当 埋蔵文化財調査室 新里貴之

桜ヶ丘団地内において、中央診療棟建設その他工事の予定された駐車場と周辺道路約3000㎡の発掘調査を行なった。調査の結果、後期旧石器時代から縄文時代草創期では、炭の集中地区・破砕礫集中地区などが確認され、遺物では細石刃・チップ・フレイク・スクレーパー・石鏃・砥石などが出土した。縄文時代早期前半では無数の層位横転箇所が確認されたほか、前平式を主体に加栗山式・石坂式がわずかに出土した。ほかにも砥石・石皿・石斧・敲石などが出土している。また、縄文時代晩期から弥生時代中期前半では、土坑群・ピット群・溝跡などが確認された。遺物は縄文時代晩期の黒川式、弥生時代前期土器、石器群が土坑内に廃棄された状況が目された。近現代では桜ヶ丘団地造成前の畑跡やイモ穴などの遺構が確認された。

2007-2 共通教育棟改修工事に伴う発掘調査

調査地点 共通教育棟2号館東側(郡元団地I・J-5・6区)

調査期間 平成19年7月12日～平成20年2月22日

調査担当 埋蔵文化財調査室 中村直子

共通教育棟2号館の改修工事に伴い約1030㎡の発掘調査を行なった。調査の結果、縄文時代中期では炉跡が検出され、周辺からは春日式土器や深浦式土器が出土している。弥生時代中期では、環濠が検出され、集落の区画であったと考えられる。古墳時代中・後期では、密集した切り合い関係を持つ住居跡群や溝跡が検出されている。粟玉などの微細遺物や、イノシシの下顎骨、米や麦の炭化物、小貝類などが採取されている。この時代の遺物のほとんどは篋貫式土器だが、石器では、打製石斧・石庖丁・石鏃(打製・磨製)・砥石・台石などが出土した。その他にも皮袋形瓶の破片や平瓶などの須恵器や、金銅製の金具、滑石製玉類、ガラス小玉、水晶製切子玉などの希少な遺物も出土した。近世から近代では、水田跡層が検出された。

2007-3 PETセンター建設予定地における試掘調査

調査地点 医学部雑木林(桜ヶ丘団地A・B-2～4区)

調査期間 平成19年11月12日～16日

調査担当 鹿児島市教育委員会 立部剛
埋蔵文化財調査室 新里貴之

桜ヶ丘団地の雑木林地区にPETセンター誘致の計画があり、その予定地2550㎡における試掘調査を行なった。試掘面積は12㎡である。この大学敷地は、周知の遺跡の範囲外にある遺跡隣接地であることから、鹿児島市教育委員会が調査主体となり、鹿児島大学埋蔵文化財調査室も協力して調査を行なった。試掘深度は2mであるため、調査結果確認された包含層は、縄文時代早期、アカホヤテフラの二次堆積土、桜ヶ丘団地造成前の旧耕作土であった。縄文時代早期では、黒曜石製の打製石鏃とフレイク、桜ヶ丘団地内では出土の珍しい押型文土器などが出土した。縄文時代晩期～弥生時代の遺物では、弥生時代前期の土器などが得られている。桜ヶ丘団地造成前の旧耕作土からは、中世の青磁高台破片と敲石が出土した。正式報告は鹿児島市教育委員会によってなされる。

2007-4 南九州地区軽種馬医療体制整備事業に伴う発掘調査

調査地点 農学部駐車場(郡元団地B-7区)

調査期間 平成19年12月18日～3月31日

調査担当 埋蔵文化財調査室 新里貴之・中村直子

農学部焼酎学講座棟の北側の駐車場において、軽種馬診療棟建設が予定された約350㎡を発掘調査した。調査の結果、中世の大規模な河川跡、近世から近代にかけての水田跡・河川氾濫跡、近現代の鹿児島高等農林学校時代～鹿児島大学時代にいたる建物跡などが確認された。水田層では畦や足跡・鋤跡などが検出されている。同地点は、河川埋没後、低湿地を利用して水田跡を作り続けるが、何度も河川の氾濫によって作り直したものと考えられ、2mほどの厚さで水田跡が確認されている。出土遺物は陶磁器類がほとんどで、小破片になったものが多い。郡元地域の近世・近代農業を考える上で重要な地点である。正式報告書は2009年度に刊行予定である。

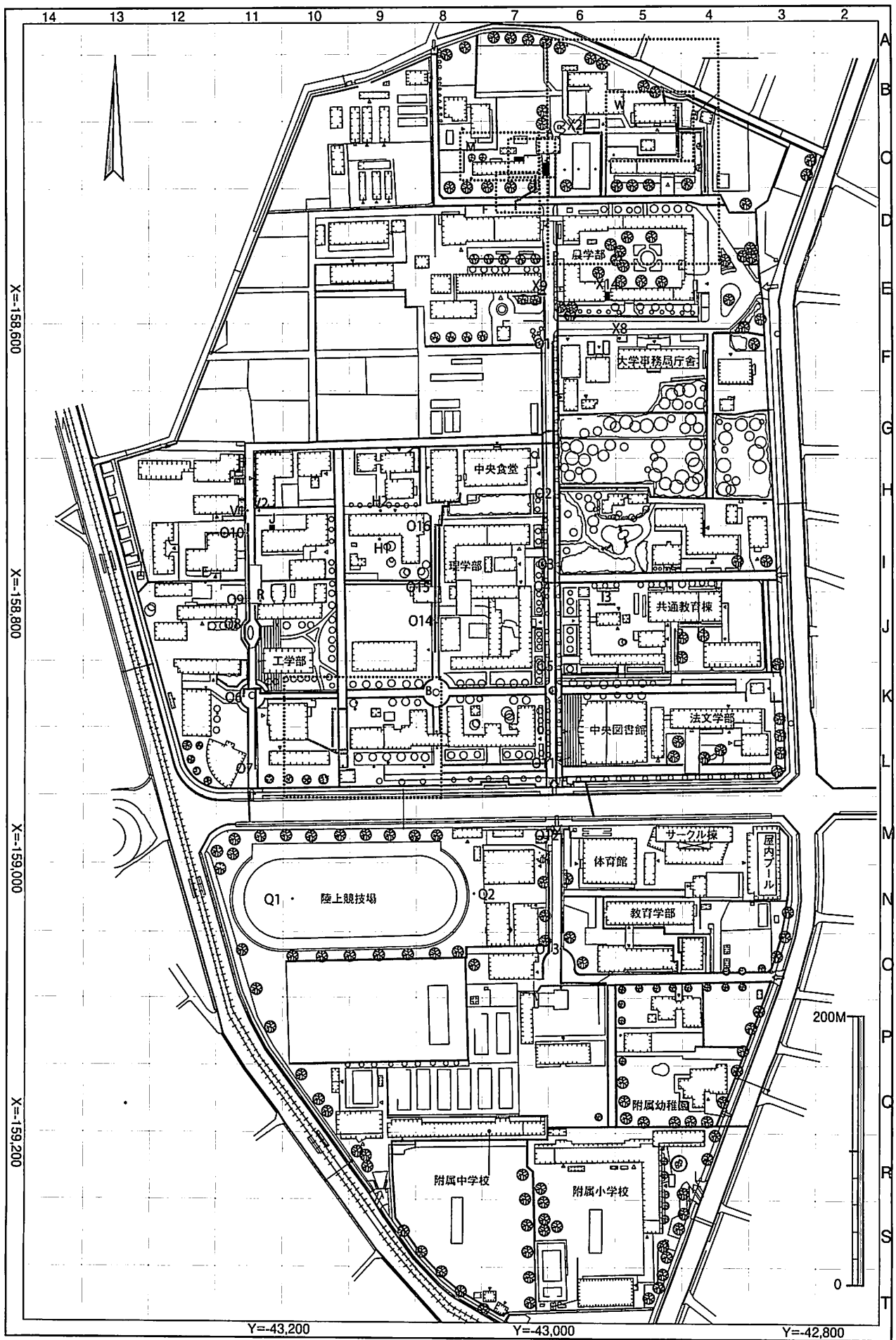


Fig.30 鹿児島大学構内遺跡郡元団地 (S=1/4,000)

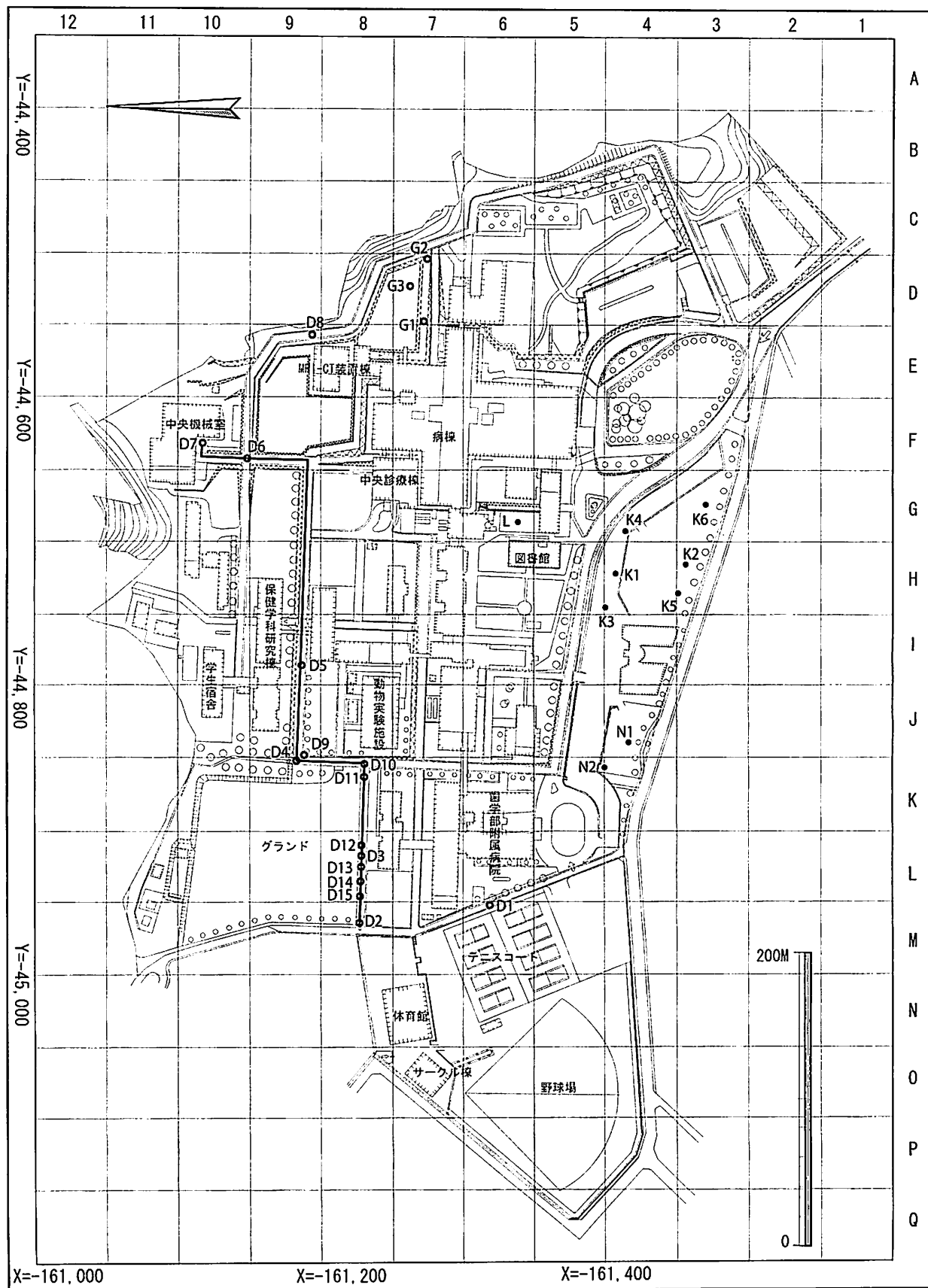


Fig.31 鹿児島大学構内遺跡桜ヶ丘団地 (S=1/4,000)

Ⅷ 立会調査

2007(平成19)年度は、桜ヶ丘・郡元団地内の立会調査20件を実施した。国立大学法人化以後、調査は鹿児島市教育委員会が担当することになっているが、ガス漏れや漏水などの緊急時や、双方の日程の都合のつかない場合は、埋蔵文化財調査室単独で調査を行なっている。以下にその概要を記す。

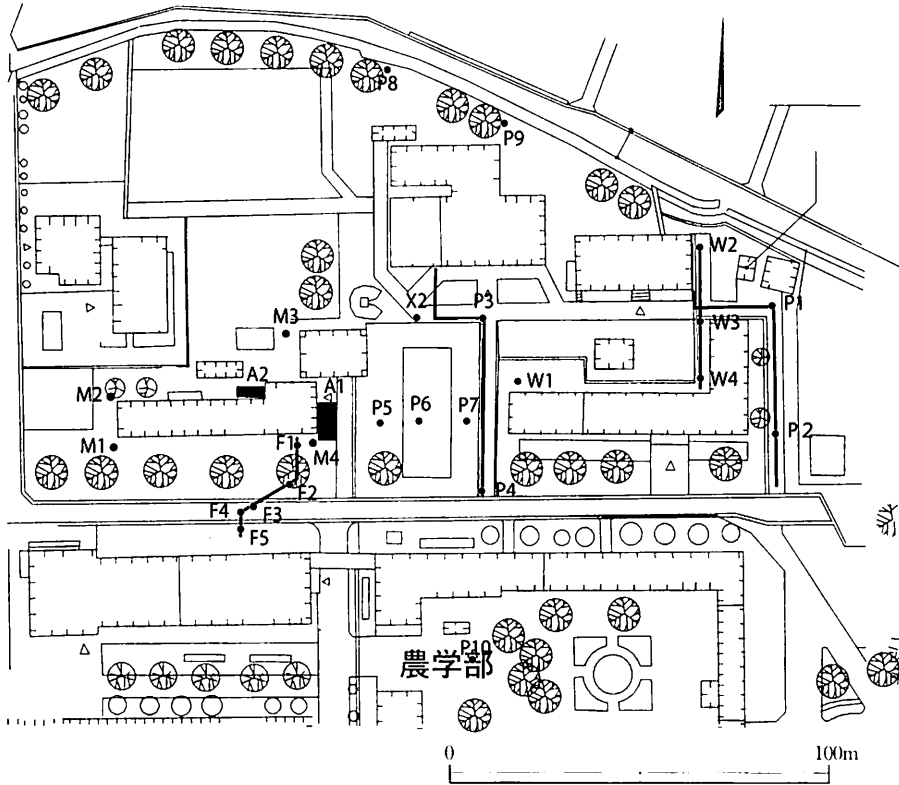


Fig.32 2007-A・F・M・P・W・X地点配置 (S=1/2,000)

2007-A 農学部3号館土木工事 (Fig.32)

調査地点 郡元団地C-7区

調査期間 2007年6月28日, 8月3日

調査担当 鹿児島市教育委員会 立部剛・佐々木幸男

埋蔵文化財調査室 中村直子

農学部3号館北側において、エレベーター設置のため、基礎部分の立会調査を行なった。掘削したところ、地表下60cm深で東西方向に延びる配管が検出された。掘削はさらに50cm下方までの予定であったが、配管の存在や建物基礎が掘削予定範囲まで張り出しており、攪乱されている可能性が高いことから、埋蔵文化財への影響はほとんどないと判断され、調査を終了した。遺物などは得られていない。

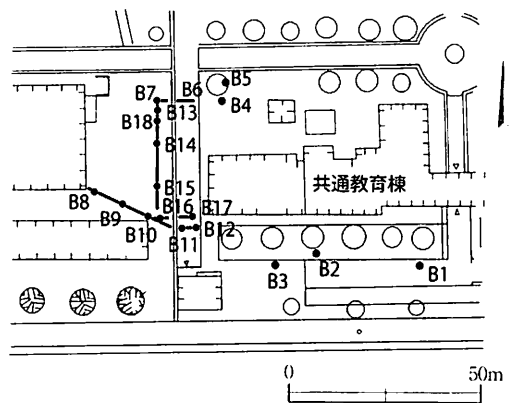


Fig.33 2007-B地点配置 (S=1/2,000)

2007-B 研究棟新営工事 (Fig.33・34)

調査地点 郡元団地K・L-8～10区

調査期間 2007年6月4・13・21日

調査担当 鹿児島市教育委員会 佐々木幸男

埋蔵文化財調査室 中村直子

共通教育棟4号館の南側にプレハブ2階建ての研究棟を新営する予定があり、設置位置と配管部の立会調査を行った。調査位置のうち、B1・3地点は、地表下45cm深で攪乱であった。B2・5・7～10・15～18地点では河川氾濫層と、弥生～古墳時代の遺物包含層と考えられる黒色シルト層を確認したが、2層は北側地点が砂質で南側地点がシルト質になる傾向があった。遺物はB10地点で黒色シルト層から成川式土器と思われる甕の脚台が出土し、これを図化した(Fig.36-68)。

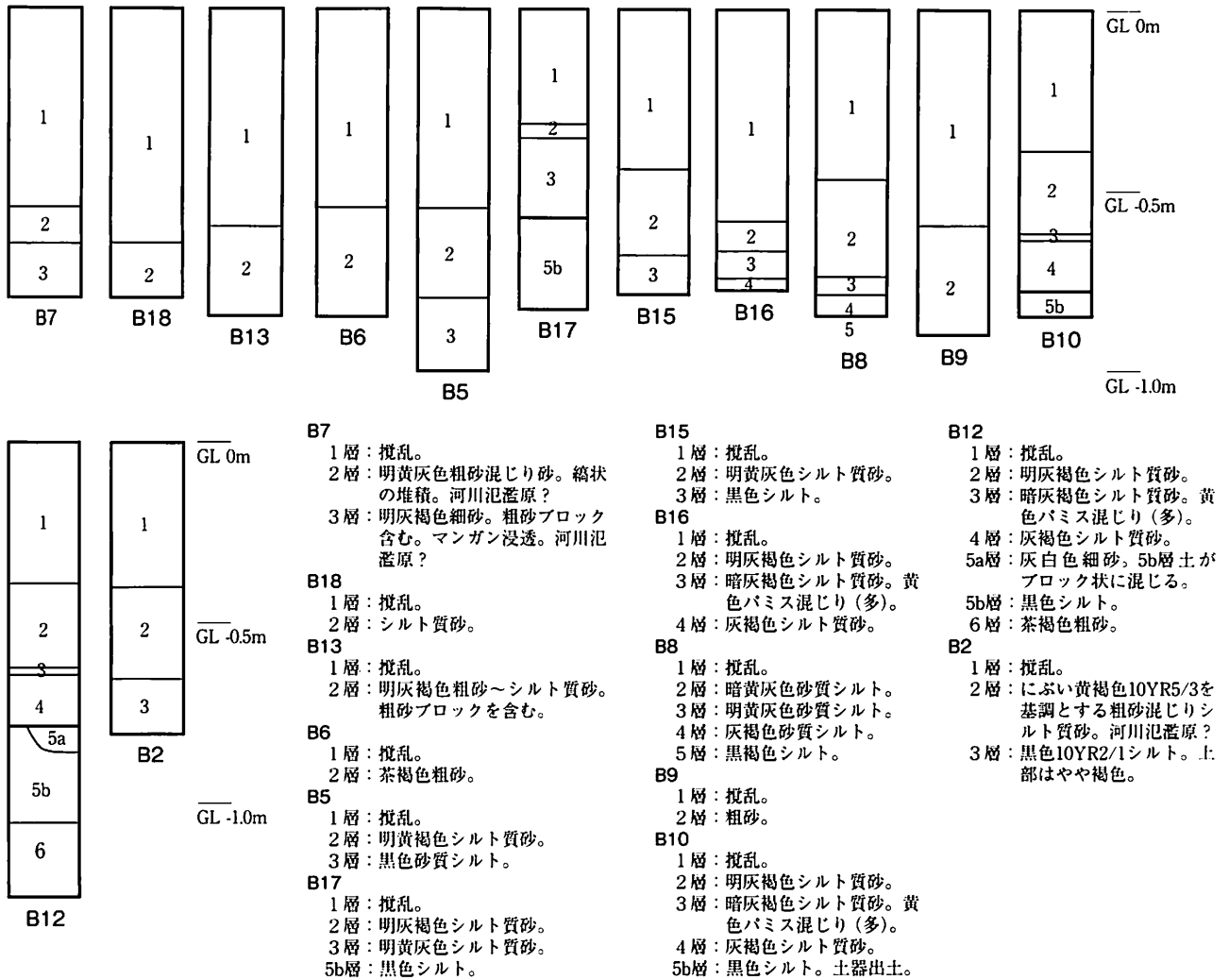


Fig.34 2007-B土層柱状図

2007-D 桜ヶ丘支障配管等工事 (Fig.31・35)

調査地点 桜ヶ丘団地F～M-8～10区

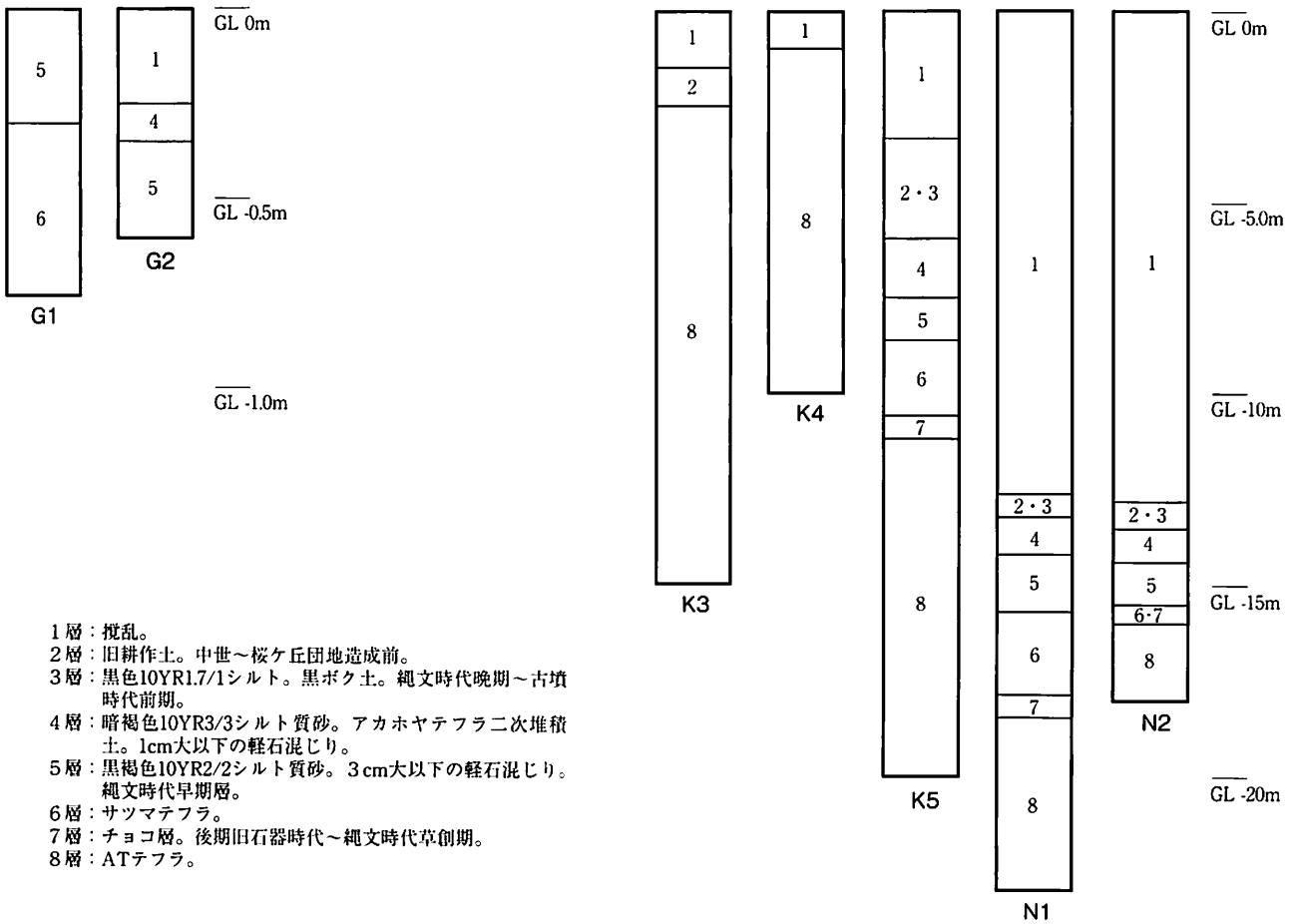
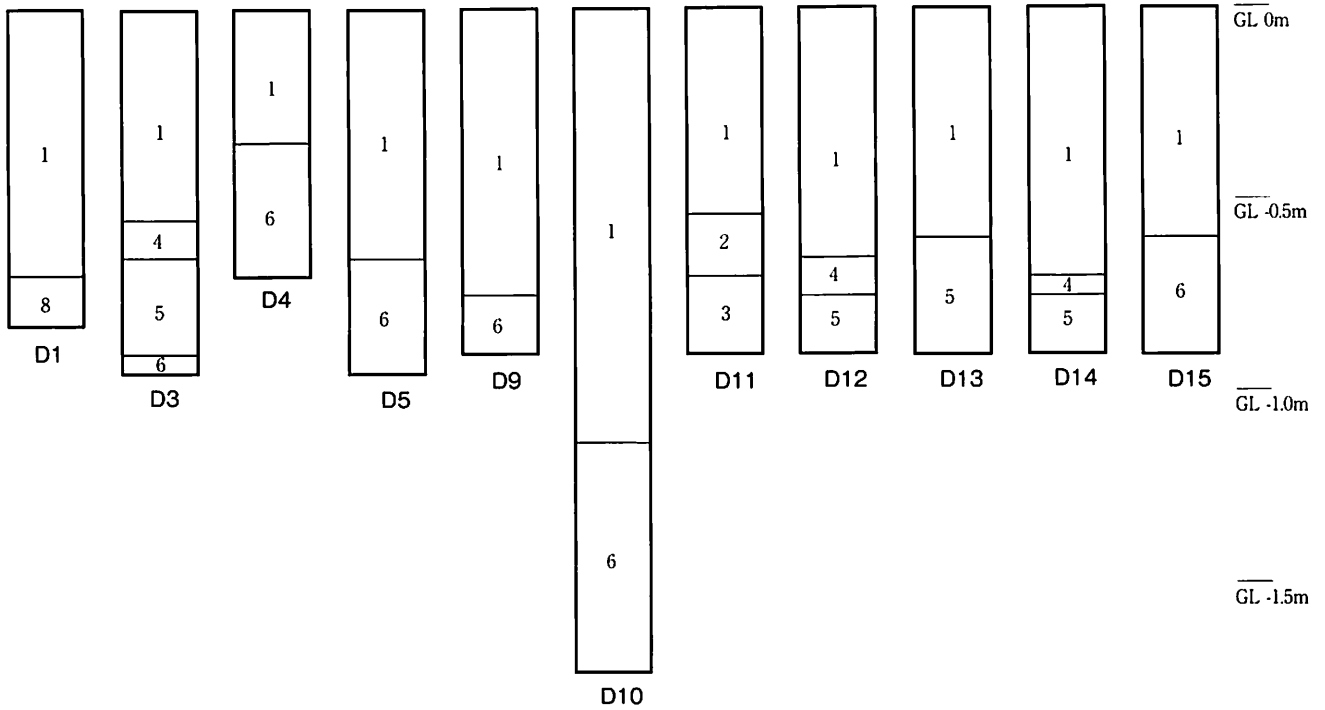
調査期間 2006年5月11日、7月23・25～27日

調査担当 鹿児島市教育委員会 佐々木幸男

埋蔵文化財調査室 新里貴之・中村直子

桜ヶ丘団地内の広範囲において、ガス管の引き込み及び支障ガス管の移設に伴い、立会調査を行った。これらの道路地区では包含層有無のデータがあまりなく、試掘を行った後、調査範囲を確定して後日立会調査を行うこととなった。結果、試掘地点のD1地点では地表下80cm深で桜ヶ丘団地基盤のATテフラが検出された。D2では80cm深、D7は90cm深、D8は75cm深までそれぞれが攪乱されていた。比較的土層の残りは良好であったのはD3地点で、アカホヤテフラ二次堆積土と縄文時代早期層が確認されている。D4地点は35cmで、D5も65cm深で、同様にサツマテフ

Ⅷ 立会調査



- 1層：攪乱。
- 2層：旧耕作土。中世～桜ヶ丘団地造成前。
- 3層：黒色10YR1.7/1シルト。黒ボク土。縄文時代晩期～古墳時代前期。
- 4層：暗褐色10YR3/3シルト質砂。アカホヤテフラ二次堆積土。1cm大以下の軽石混じり。
- 5層：黒褐色10YR2/2シルト質砂。3cm大以下の軽石混じり。縄文時代早期層。
- 6層：サツマテフラ。
- 7層：チョコ層。後期旧石器時代～縄文時代草創期。
- 8層：ATテフラ。

Fig.35 2006-D・G・K・N土層柱状図

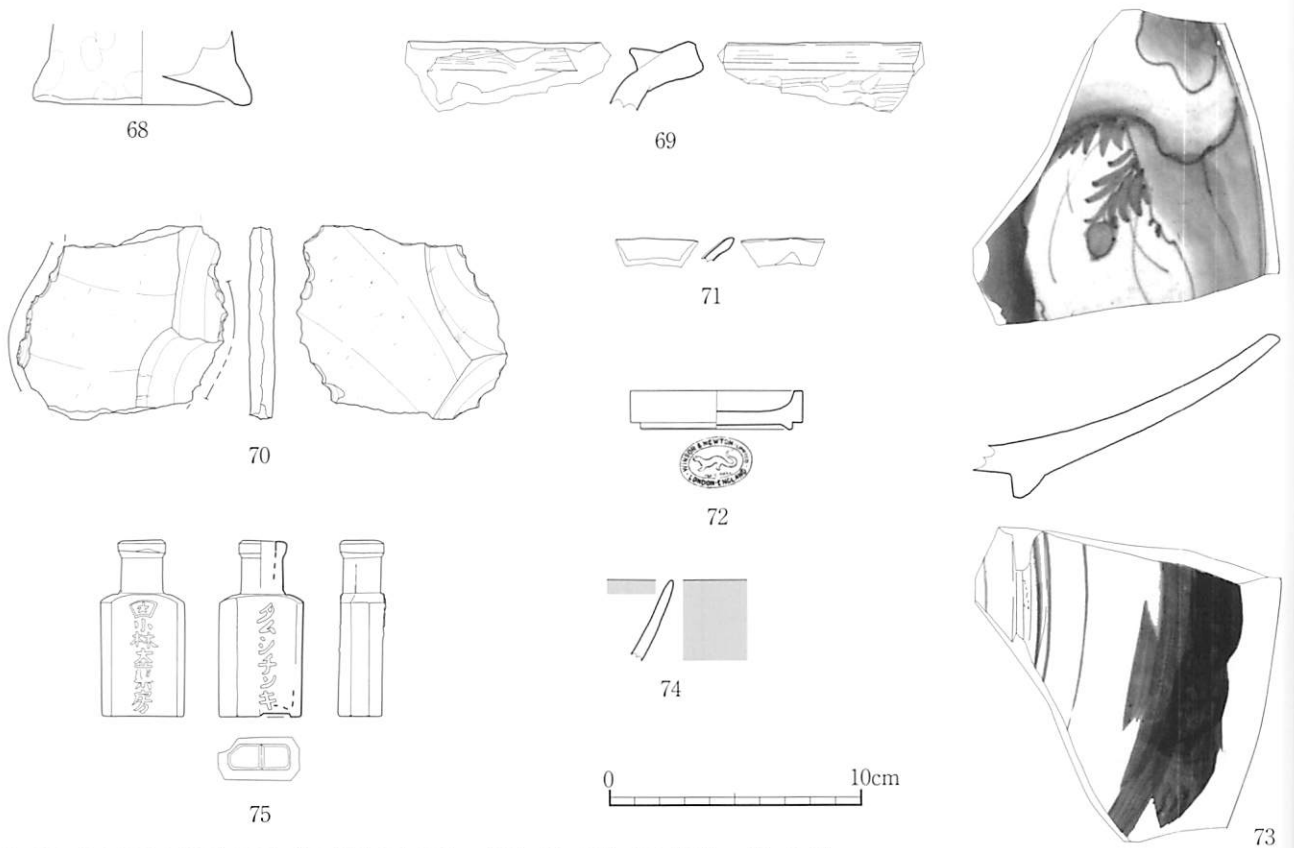
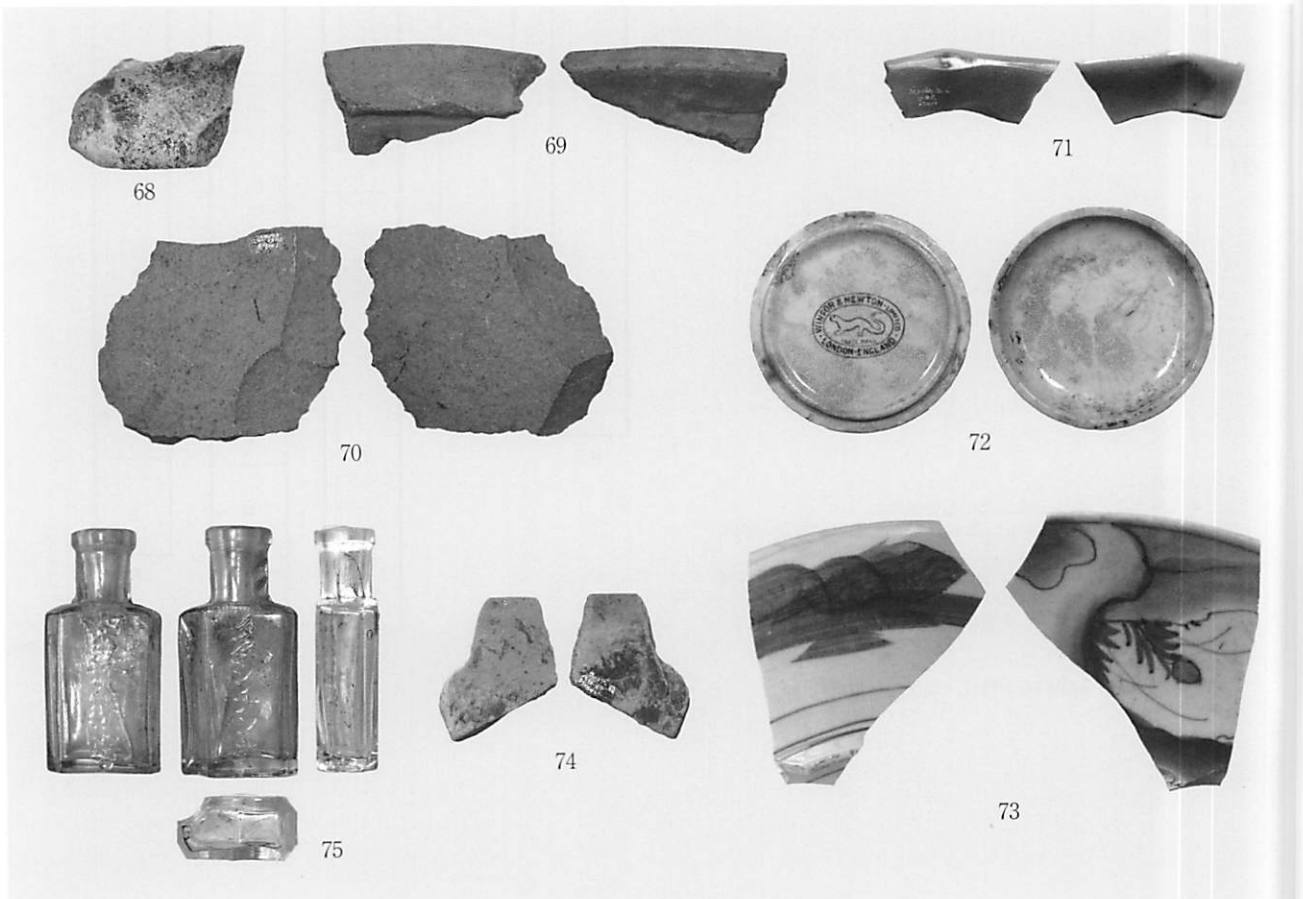


Fig.36 2007-B10 (68)・D11 (69・70)・P4 (71～73)・Q1 (74)・X9 (75) (S=1/3)



PL. 27 2007-B10 (68)・D11 (69・70)・P4 (71～73)・Q1 (74)・X9 (75)

ラが検出され、桜ヶ丘団地のサツマテフラは厚さ140cm程度あるので、遺物包含層への影響はほとんどないと考えられた。

後日行われたD9地点では地表下75cm深で、D10地点では113cm深でそれぞれサツマテフラが検出された。D11地点は西側に黒ボク土、東側にアカホヤテフラ二次堆積土が検出された。D11地点では、東から西にむかって5か所を確認調査したが、最も東側のD11地点で旧耕作土（桜ヶ丘団地造成前）と縄文時代晩期～古墳時代前期の黒ボク土、最も西側のD15地点ではサツマテフラのみが検出されたことから、同地点の旧地形が現地形と同様に、東から西へと高くなっていく様相が確認された。D11地点排土中より、刻目突帯文土器、弥生時代前期甕、加飾文壺、沈線文壺、弥生時代中期壺、弥生時代終末期～古墳時代甕、須恵器片、薩摩焼（加治木・始良系）小皿、薩摩焼、磁器小杯、打製石斧、多数の土器胴部片などが出土した。そのうち、内面に突帯状の張り出しのある弥生時代中期壺1点、打製石斧1点を図化した（Fig.36-69・70）。

70は、安山岩製打製石斧と考えられるもので、上下端は破損している。両サイドが調整されている。

2007-E 工学部消火管漏水修繕工事 (Fig.30・37)

調査地点 郡元団地I-12区

調査期間 2007年4月8日

調査担当 埋蔵文化財調査室 中村直子

工学部において、消火管の漏水箇所を緊急に立会調査することになり、鹿児島市教育委員会と協議のうえ、埋蔵文化財調査室単独で調査にあたった。配管既掘部の壁にプライマリーな層を確認したが、既掘部のみを掘削することになり、調査を終了した。遺物は得られていない。

2007-F 環境バイオ研究棟等改修施設整備等事業に伴う電気土木工事 (Fig.32・37)

調査地点 郡元団地C・D-7区

調査期間 2007年7月12日

調査担当 鹿児島市教育委員会 立部剛
埋蔵文化財調査室 中村直子

農学部3号館の電気配管設置に伴い立会調査を行なった。5か所を確認したが、F1・5地点は地表下120cm深で攪乱であった。残りの地点は、全て90cm深以内で攪乱であった。遺物は得られていない。

2007-G 桜ヶ丘駐車場・スロープ設置工事 (Fig.31・35)

調査地点 桜ヶ丘団地D・E-7・8区

調査期間 2007年5月8日

調査担当 埋蔵文化財調査室 新里貴之

桜ヶ丘団地の2箇所の駐車場が中央診療棟の建設地となり、教職員の駐車場が不足することから、臨時的に駐車場と駐車場にいたるスロープ部分の設置が行なわれ、立会調査が行なわれた。G3地点は地表下30cm深で攪乱であった。G1・2地点は、工事連絡を受けた際には既にスロープ部が掘削されており、一部に縄文時代早期層やアカホヤテフラ二次堆積層が確認された。この2か所の土層の観察からは、西から東へ傾斜する、現地形と同様の旧地形を想定することができる。スロープ駐車場部分は地表下30cmで攪乱であった。

2007-H 工学部ガス漏れ修繕工事 (Fig.30)

調査地点 郡元団地H・I-9区

調査期間 2007年9月5・19日

調査担当 鹿児島市教育委員会 佐々木幸男
埋蔵文化財調査室 中村直子

工学部電気・電子工学科棟の南北において、ガス漏れ修繕のための立会調査が行われた。南側（H1）地点、北側地点（H2地点）ともに地表下80cm深で攪乱であった。遺物は得られていない。

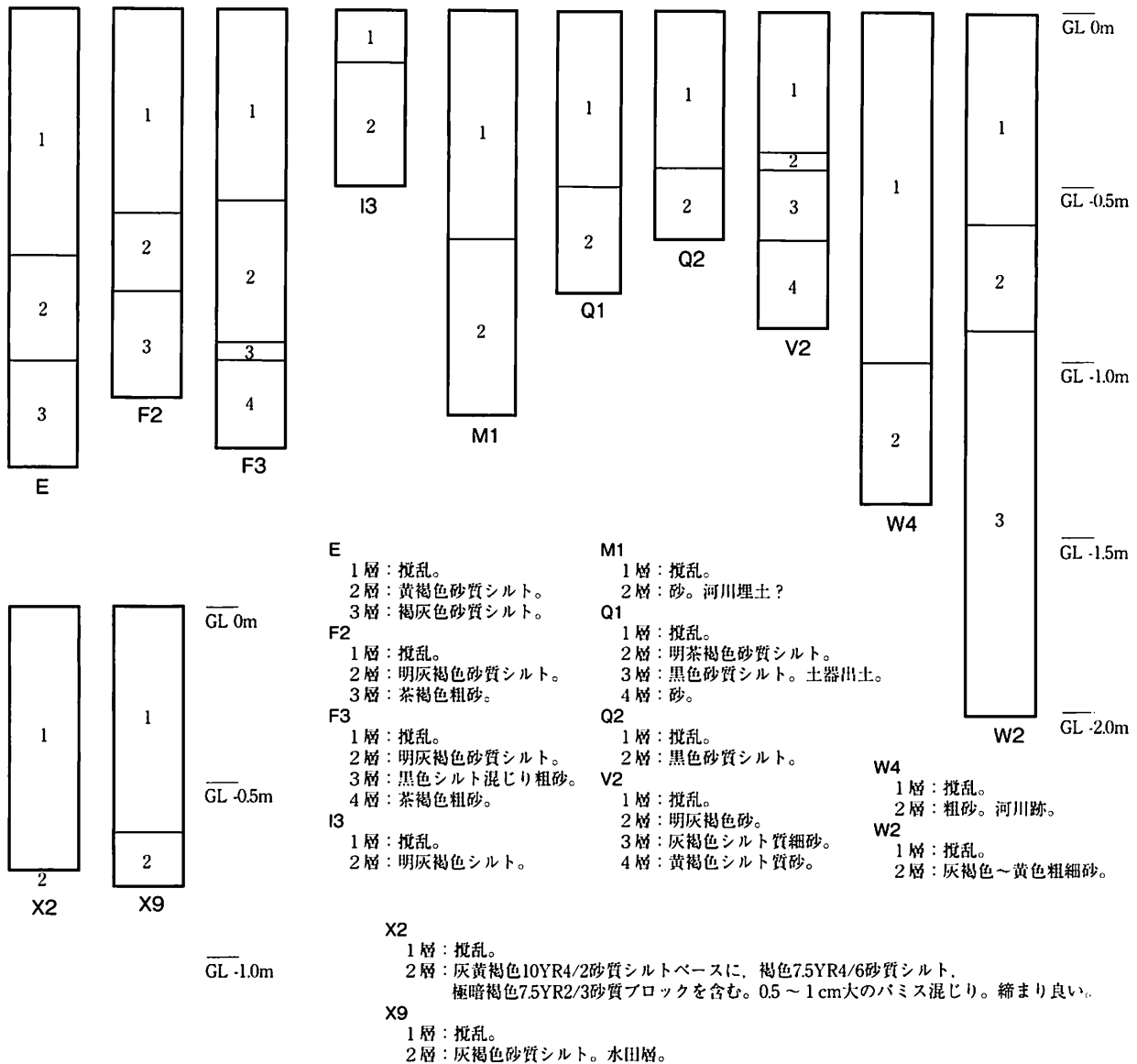


Fig.37 2007-E・F・I・M・Q・V・W・X土層柱状図

2007-I 共通教育棟樹木移植工事 (Fig.30・37)

調査地点 郡元団地J4～6区

調査期間 2007年7月4日

調査担当 鹿児島市教育委員会 佐々木幸男

埋蔵文化財調査室 中村直子

共通教育棟1号館の南側と西側において、掲示板移動先の掘削と移動樹木の掘削に伴う立会調査が行われた。掲示板移動先は、I1・2地点ともに、地表下45cm深で攪乱であった。18本の移動樹木地点(I3)は、約50cm深程度の掘削となったが、西側は表土が浅く、15cm深で水田層らしき土層を確認、東側は攪乱層であった。遺物は得られていない。

2007-J 工学部ガス漏れ修繕工事 (Fig.30)

調査地点 郡元団地I-11区

調査期間 2007年5月7日

調査担当 埋蔵文化財調査室 新里貴之

ガス漏れのための緊急工事のため、調査室が急遽、立会調査を行うこととなった。調査地点は建築学科棟の北側で、地表下45cm深まで攪乱であった。遺物は得られていない。

2007-K 桜ヶ丘駐車場敷地地盤調査 (Fig.31・35)

調査地点 桜ヶ丘団地H-3・4区

調査期間 2007年7月9・10日、8月8日

調査担当 鹿児島市教育委員会 佐々木幸男

埋蔵文化財調査室 新里貴之

桜ヶ丘団地の中央診療棟等を建築するに伴い、駐車場が著しく減少することになった。このことから、立体駐車場の設置を検討するため、桜ヶ丘南側駐車場の地盤調査に伴い、立会調査を実施することとなった。平板載荷試験地点K1・K2地点ともに地表下1m深までATテフラであった。ボーリング地点K3は地表下1.5m深まで攪乱層、-1.5～-2.5mまでは桜ヶ丘造成前の旧耕作土、-2.5m～-15mまでATテフラであった。K4・K6地点はそれぞれ、-1.0m・-0.7m深まで攪乱で、それ以下-20mまでATテフラであった。K5地点のみが土層の残りがよく、上部から旧耕作土、黒ボク土、アカホヤテフラ二次堆積層、縄文時代早期層、サツマテフラ層、チョコ層、ATテフラ層が確認されている。最も上部の包含層である旧耕作土上面で地表下-3.35m、最も下部の包含層であるチョコ層上面は-10.6mであり、旧地形は、シラス台地の崖部か深い谷地形であると想定された。

2007-L 桜ヶ丘清掃員控え室新営工事 (Fig.31)

調査地点 桜ヶ丘団地G-6区

調査期間 2007年9月25日

調査担当 鹿児島市教育委員会 児之原博寿

埋蔵文化財調査室 新里貴之

桜ヶ丘団地内に清掃員の控室を設置することになり、その基礎部分となる地点を立会調査した。掘削深度は、地表下0.5m深まで、攪乱層の範囲内であった。遺物は得られていない。

2007-M 農学部3号館給排水配管工事 (Fig.32・37)

調査地点 郡元団地C-7・8区

調査期間 2007年10月10日

調査担当 鹿児島市教育委員会 佐々木幸男

埋蔵文化財調査室 中村直子

農学部3号館建物に接した周辺で、給排水配管工事に伴い立会調査を行なった。M2・3・4地点は、それぞれ地表下60cm・90cm・115cm深まで攪乱されていた。M1地点は河川層が確認されている。遺物は得られていない。

2007-N 桜ヶ丘保育施設建設に伴う地盤調査 (Fig.31・35)

調査地点 桜ヶ丘団地K-4区

調査期間 2007年8月28・30日、9月3・6日

調査担当 埋蔵文化財調査室 新里貴之

桜ヶ丘団地南駐車場に、託児所を設置する計画があり、平板載荷試験とボーリング調査を行なった。平板載荷試験地点N1・2地点ともに地表下-1mまで攪乱層であった。ボーリングは同一地点で行われた。どちらも包含層は良好に残っているが、地表下-12.6～-12.8m以下であり、託児所設置工事に際して、建物基礎が及ぶ範囲ではないと判断された。

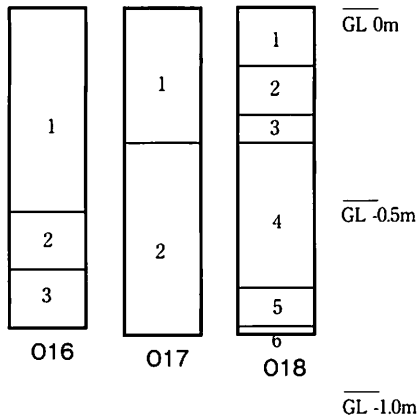
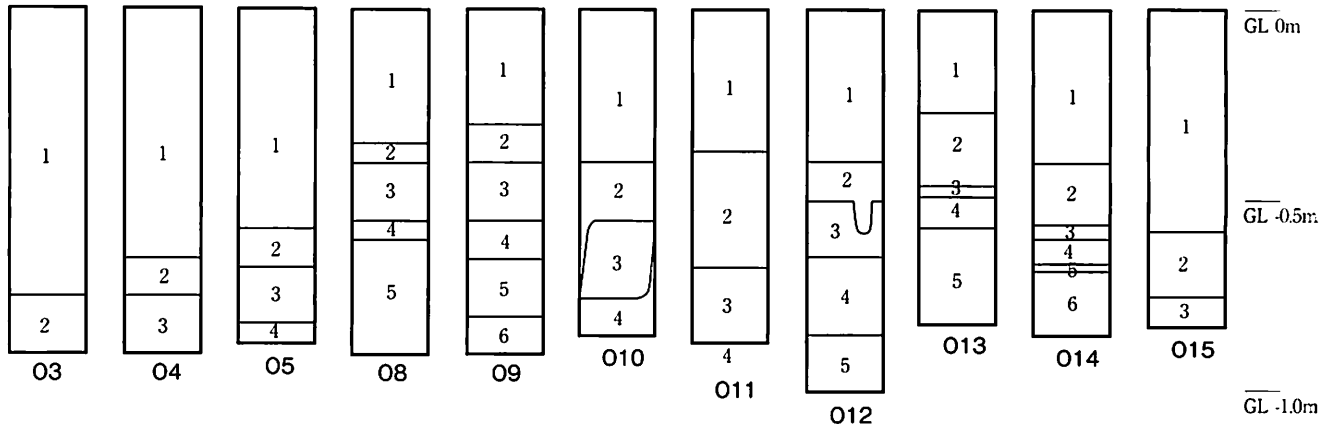
2007-O 郡元ガス管改修工事 (Fig.30・38)

調査地点 郡元団地F～O-6～11区

調査期間 2007年12月7・19・20・25～28日、2008年1月7日

調査担当 鹿児島市教育委員会 佐々木幸男・児之原博寿・立部剛

Ⅳ 立会調査



- O03**
1層：攪乱。
2層：河川跡。
- O04**
1層：攪乱。
2層：黄褐色河砂。軽石製品？出土。
3層：河砂と灰色水田土が混じったような土。
- O05**
1層：攪乱。
2層：水田層。
3層：シルト質砂。水田層。
4層：灰褐色シルト。水田層。土器出土。
- O08**
1層：攪乱。
2層：淡灰色シルト。水田層。
3層：灰色シルト。水田層。
4層：黄色シルト。水田層。
5層：白灰色シルト。水田層。
- O09**
1層：攪乱。
2層：淡灰色シルト。水田層。
3層：黄褐色シルト。水田層。
4層：灰色シルト。水田層。
5層：黄褐色シルト。水田層。
6層：灰色シルト。水田層。
- O10**
1層：攪乱。
2層：白灰色シルト。
3層：2層と4層の混じり土。遺構？
4層：暗灰色シルト。遺物多量出土。
- O11**
1層：攪乱。
2層：暗灰色シルト。水田層？
3層：黄灰色シルト。水田層？
4層：黒褐色シルト。弥生～古墳時代包含層。遺物出土。
- O12**
1層：攪乱。
2層：紫灰色シルト。水田層。
3層：黄灰色シルト。水田層。
4層：灰色シルト。水田層。
5層：暗灰色シルト。土師器出土。
- O13**
1層：攪乱。
2層：灰色シルト。水田層。
3層：淡灰色シルト。水田層。
4層：黄灰色シルト。水田層。
5層：茶褐色シルト。水田層。
6層：黒褐色シルト。包含層？遺物は無い。
- O14**
1層：攪乱。
2層：淡灰色シルト。水田層。
3層：黄褐色シルト。水田層。
4層：灰色シルト。水田層。
5層：黄褐色シルト。遺物多量出土。
6層：灰色シルト。
- O15**
1層：攪乱。
2層：淡灰色シルト。水田層。
3層：黄褐色シルト。遺物多量出土。
- O16**
1層：攪乱。
2層：淡灰色シルト。水田層。
3層：黄褐色シルト。遺物多量出土。
- O17**
1層：攪乱。
2層：明赤褐色5YR5/8細砂とにぶい橙色5YR6/3細砂のマーブル。0.5～3cm大のバミス混じり。締まり悪い。河川跡？
- O18**
1層：攪乱。
2層：灰黄色10YR4/2砂質シルト。0.5～2cm大のバミス混じり。締まり良い。水田層。
3層：褐色10YR4/6砂質シルト。0.5～2cm大のバミス混じり。締まり良い。水田層。
4層：にぶい黄褐色10YR5/3砂質シルト。0.5～2cm大のバミス混じり。水田層。
5層：黒褐色10YR3/2砂質シルト。0.5cm大のバミス混じり。水田層。
6層：灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。水田層。

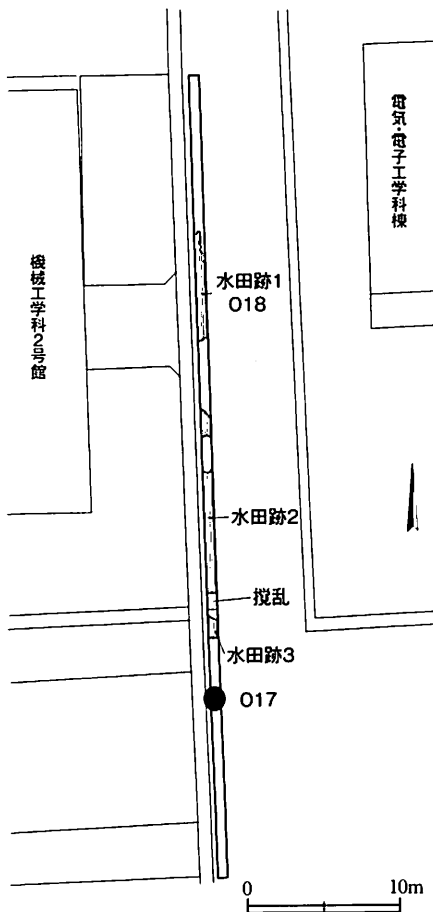


Fig.38 2007-O土層柱状図とO17～O18地点検出遺構平面図 (S=1/500)

埋蔵文化財調査室 新里貴之・中村直子

郡元団地内の広範囲にわたり、旧ガス管の改修工事が行なわれることになり、立会調査を行なった。ピンポイントで各地点の状況を確認し、重要である地点については、後日、O8～O10地点、O14～O18地点、O11地点を中心に立会調査が行われることとなった。埋蔵文化財調査室西側のO1地点は地表下82cm深まで攪乱、生協食堂前のO2地点は90cm深まで攪乱であった。また、工学部O6地点は、85cm深で攪乱、O7は103cm深まで攪乱であった。

共通教育棟2号館西側のO4地点2層の河砂層から軽石1点が出土している。

同じく共通教育棟2号館西側のO5地点4層からも土器胴部片1点が出土している。

工学部のO8～O10地点では、水田層と河川層が確認され(O17・O18地点)、水田面(水田跡1～3: Fig.38)を確認することができた。古墳時代の遺物も一定量出土したO10地点4層よりも下層で検出され、古墳時代後期以前の水田層である可能性もある。成川式(笹貫式)甕口縁部片2点、成川式甕突帯1点、同高坏脚台1点を図化した(Fig.41-80～83)。

中央図書館前のD11地点4層では、土器小破片が主体であるが、比較的多くの遺物が出土している。安山岩製の磨石兼敲石1点と成川式甕脚台部1点を図化した(Fig.40-76・Fig.41-84)。中央図書館地点の古墳時代の住居跡群が検出される箇所に隣接する。

D12地点の5層において、土師質の土器胴部片が1点出土している。

理学部地点O14～O16地点間では、時期不明の水田層と弥生時代～古墳時代の包含層が確認された。特に、O14・O15地点間は、理学部の密集した古墳時代住居跡群に隣接し、土器を主体として、極めて多量の遺物が出土している。石器は頁岩製の微細剥離のある石器が1点(Fig.40-77)と砂岩製で上下に敲打痕のある石器が1点(78)、安山岩製で刃部に部分的に磨滅痕を持ち、裏面に部分的な被熱痕を持つ石器1点(79)が出土している。土器は数種得られているが、3層上より縄文時代末の刻目突帯文土器口縁部片1点(Fig.41-85)のほか、最も多いのは古墳時代の成川式土器である。甕の口縁部資料はほとんどが、笹貫式段階の資料で、外反(89)、直口(90・94・95)、内弯(91・92・93)するものなどが得られている。突帯は成川式に特徴的な絡縄突帯(87・91・92)や布目圧痕を持つ刻目突帯(86・57)のほか、刻目突帯(26)、一条突帯(90・93)などが得られている。壺は小型のものが得られており(Fig.42-108・109)、口部の短いものに属するようである。底部ではややくびれ部を持つ安定した平底がある(116)。埴底部は外面に赤色顔料が塗布されている(110)。高坏も一定量出土しているが(111～115)、赤色顔料が塗布されるのは少ない。

2007-P 農学部インフラ整備工事 (Fig.32・39)

調査地点 郡元団地A～E4～6区

調査期間 2007年10月17・18日

調査担当 鹿児島市教育委員会 佐々木幸男・児之原博寿
埋蔵文化財調査室 中村直子・新里貴之

農学部2号館の東西の道路部にガス管を設置する工事に伴い、立会調査が行われた。P1・3地点は、地表下90cm深

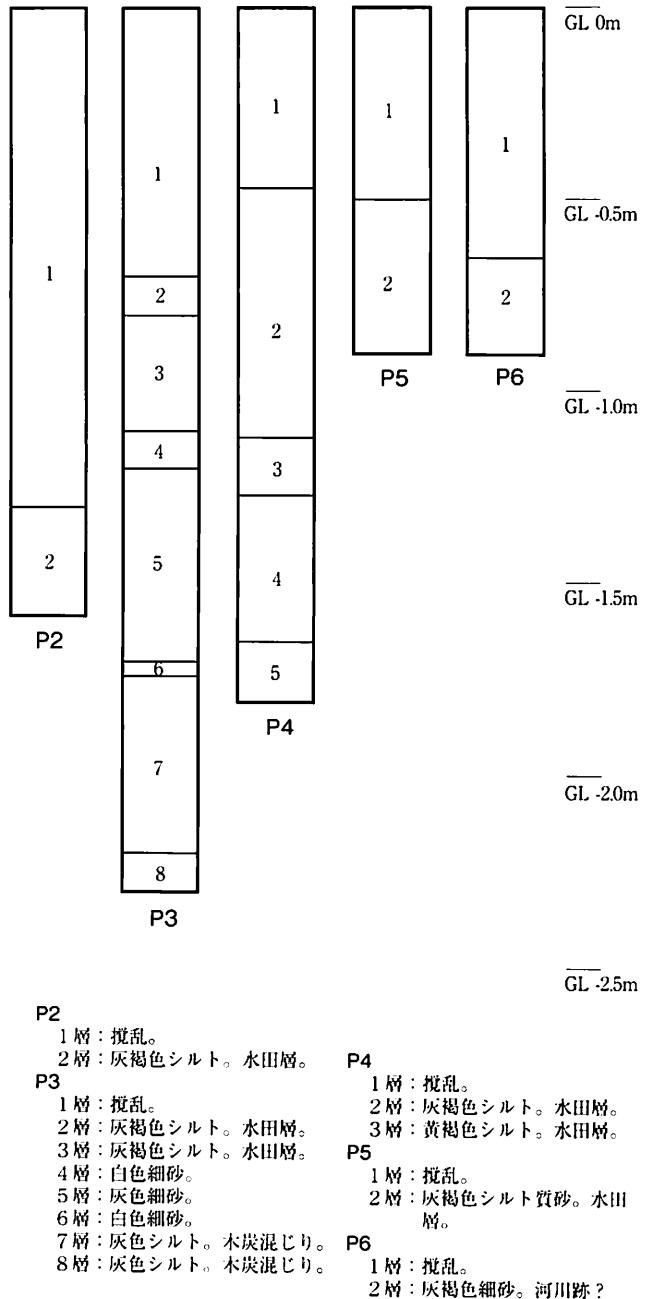


Fig.39 2007-P土層柱状図

で攪乱であった。P2～P4地点では水田層が確認されている。

P4地点において、水田層より青磁皿片1点、表土層より大ぶりの染付盤片1点、パレット1点、陶管片1点、薩摩焼と思われる陶器片1点、近現代の磁器碗1点が出土したが、うち3点を図化した(Fig.36-71～73)。

71は、青磁八角皿と思われるものである。

72は、ウィンザー&ニュートン社の重ね式の絵具用パレットで、外底面に黒色の二重楕円形の中央に左向きのサラマンダーを描き、「TRADE MARK」の文字がある。楕円形の枠内には「WINSOR&NEWTON・LIMITED・LONDON・ENGLAND」の文字がある。ロゴの様子から1860年頃から1900年にかけての商品である可能性が高い¹⁾。所々変色しており、被熱した可能性もある。鹿児島高等農林学校時代の遺物であろうか。

73は、内外面にコバルトによって草花文を描く染付の大皿で、近代以降のものと考えられる。年代的には鹿児島高等農林学校時代のものかもしれない。

2007-Q 運動場水漏れ修繕工事 (Fig.30・36)

調査地点 郡元団地N-8・10区

調査期間 2007年10月30日

調査担当 埋蔵文化財調査室 中村直子

教育学部運動場内に埋設された配管から水漏れしているとの連絡があり、鹿児島市教育委員会との協議で急遽、埋蔵文化財調査室単独で立会調査することになった。Q1・2地点ともに、弥生～古墳時代の包含層が確認された。Q1地点では成川式の埴らしき口縁部片が1点出土し、これを図化した(Fig.36-74)。

2007-R 工学部プレハブ設置新築工事 (Fig.30)

調査地点 郡元団地J-11区

調査期間 2007年12月14日

調査担当 鹿児島市教育委員会 児之原博寿

埋蔵文化財調査室 新里貴之

応用科学工学科の北側にプレハブを新築する工事に伴い、立会調査を行なった。基礎部になる個所を観察したが、35cm深で攪乱であった。遺物は得られていない。

2007-V 工学部機械工学科1号棟等空調整備工事 (Fig.30・37)

調査地点 郡元団地H-11区

調査期間 2008年2月4日

調査担当 埋蔵文化財調査室 新里貴之

工学部機械工学科1号棟等空調整備工事に伴い、情報工学科棟東側(V1)と中央実験工場南側(V2)で立会調査を行なった。V1地点は、地表下80cm深まで攪乱されており、V2地点では水田層らしきプライマリーな土層を確認した。遺物は得られていない。

2007-W 農学部環境バイオ研究棟電気工事 (Fig.32・37)

調査地点 郡元団地B・C-4～6区

調査期間 2008年3月25日

調査担当 鹿児島市教育委員会 岩戸孝夫

埋蔵文化財調査室 中村直子

農学部2号館と7号館の間で、電気の配管工事に伴う立会調査が行われた。W1地点は、地表下85cm深まで攪乱されており、W2・3地点では河川層が確認された。同層より土器胴部片1点が得られている。

2007-X 農学部2号館改修・インフラ整備工事 (Fig.30・37)

調査地点 郡元団地E・F-6・7区

調査期間 2008年3月25日、4月2・15日

調査担当 鹿児島市教育委員会 岩戸孝夫

埋蔵文化財調査室 中村直子・新里貴之・寒川朋枝

農学部で広範囲にわたって配管工事等のインフラ整備事業に伴い、14地点中、包含層の残存が見込まれる4か所の立会調査を行なった。その結果、X8・14地点では、各々地表下75cm・85cm深まで攪乱されていた。X2・X9地点は、水田跡らしき土層が確認された。

X9地点表土層より、「株式会社小林大薬房」(現・小林製薬株式会社)の「タムシチンキ」の無色透明ガラス容器(完形品)が得られた。高さ6.8cm、幅(底径)1.8～3.3cm、口径(内径)1.8(1.1)cmを計る。胴部表面には陽刻縦書きでタムシチンキとあり、体部に沿って側面端に凹部がある。裏対面には扇状の枠内に「大」の字の入る社章と、小林大薬房が縦書きで陽刻される。底面には棒で仕切られた楕円形状の窪みが認められる(Fig.36-75)。1894(明治27)年から1939(昭和14)年頃まで販売されていたものであるという²⁾。鹿児島高等農林学校時代のものであろうか。

まとめ

2007-Dの桜ヶ丘団地の西部のグラウンド付近には、弥生時代～古墳時代の土層が良好に残っていた。2007-Oの郡元団地内では、中央図書館近隣や理学部の古墳時代住居跡群検出地点の近隣では弥生時代～古墳時代の包含層とともに極めて多量の遺物が出土する。ほかにも、工学部付近では水田跡のほか遺物も比較的多く出土し、これらの地点における工事は、より慎重に行なわれる必要がある。

註

- 1) ウィンザー&ニュートン社よりご教示いただいた。
- 2) 小林製薬株式会社お客様相談室よりご教示いただいた。

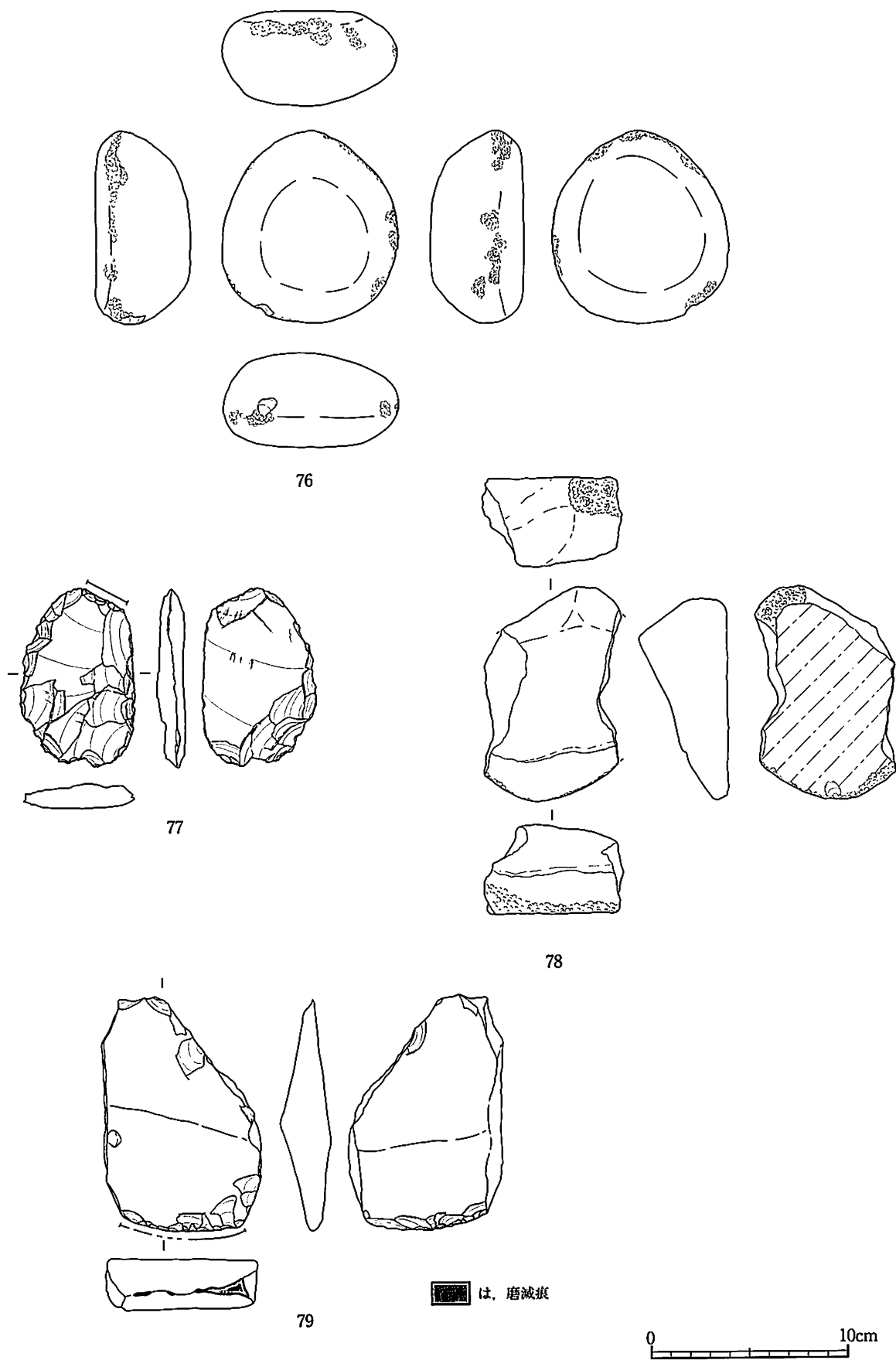
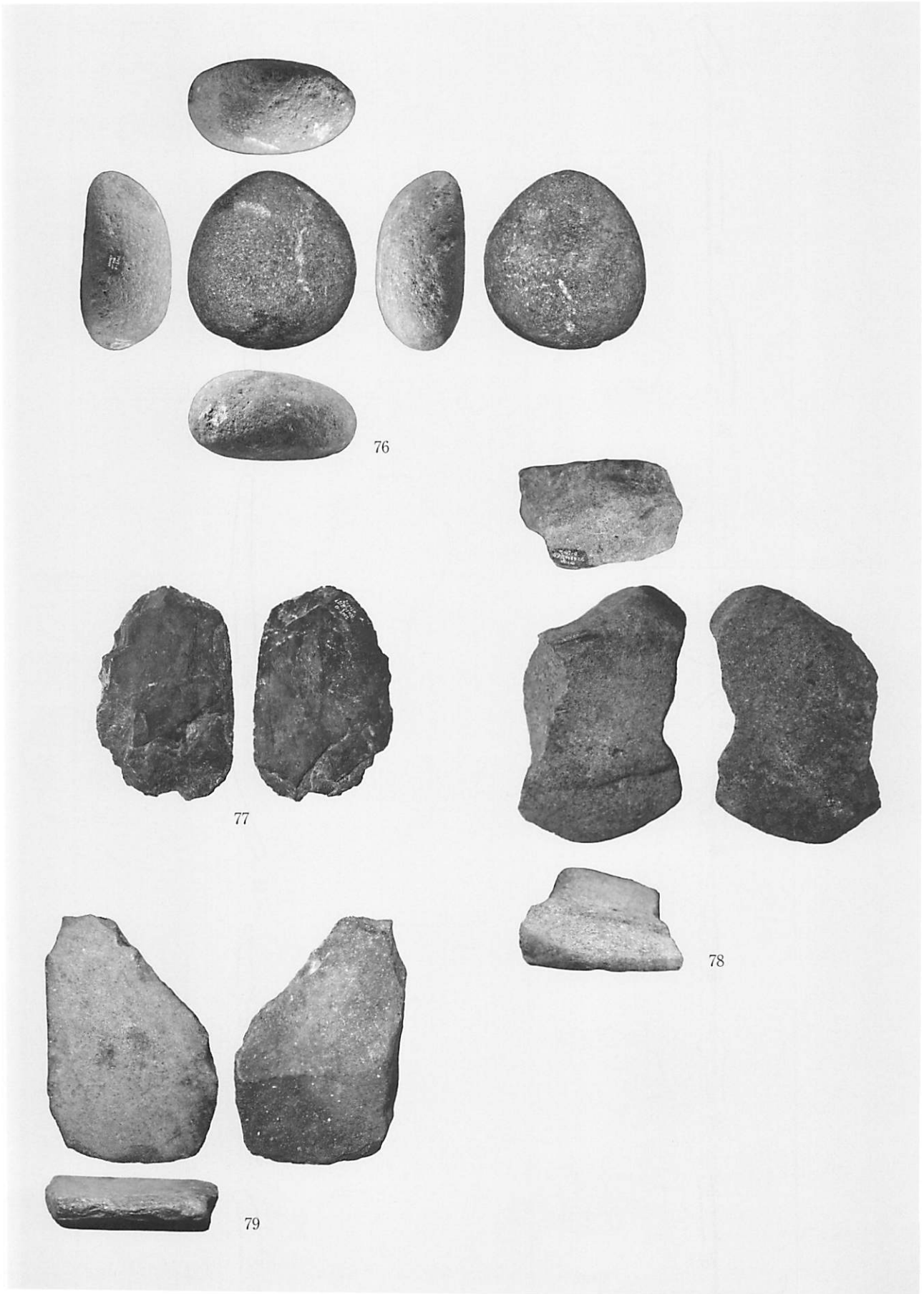


Fig.40 2006-O11 (76)・O14 ~ O16 (77 ~ 79) (S=1/3)



PL.28 2006-O11 (76)・O14 ~ O16 (77 ~ 79)

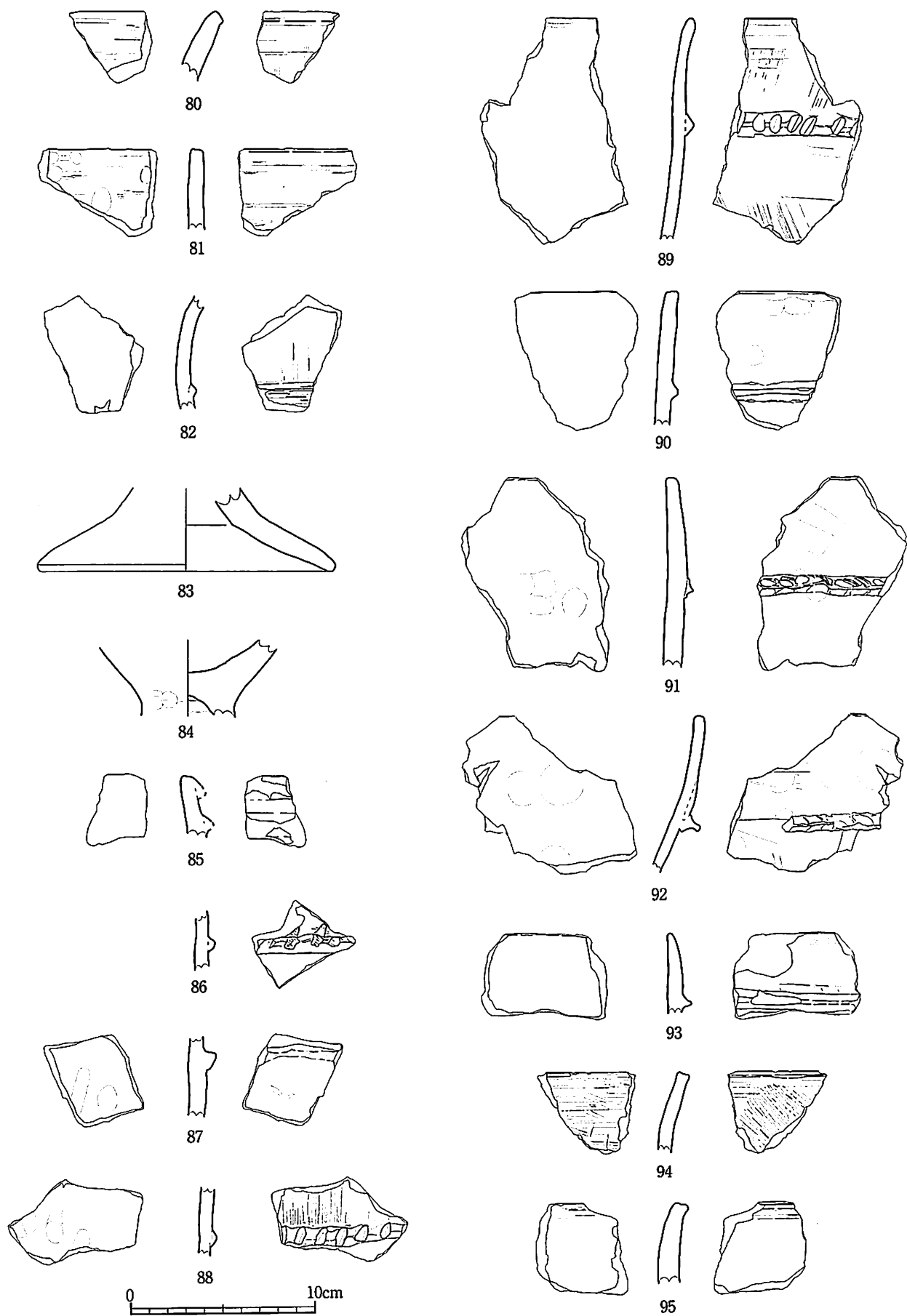
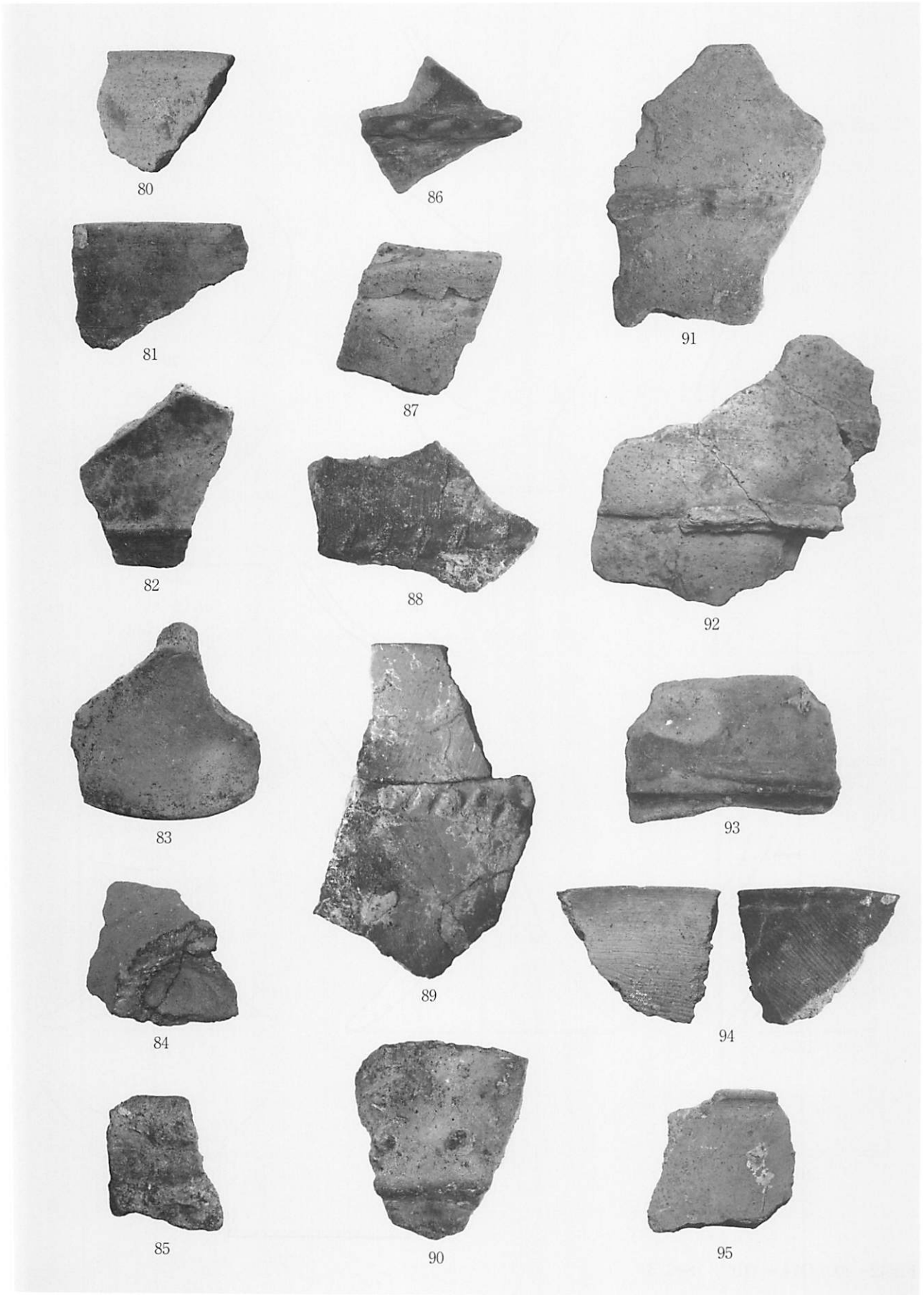


Fig.41 2007-08 ~ O10 (80 ~ 83)・O11 (84)・O14 ~ O16 (85 ~ 95) (S=1/3)



PL.29 2007-08 ~ O10 (80 ~ 83) · O11 (47) · O14 ~ O16 (85 ~ 95)

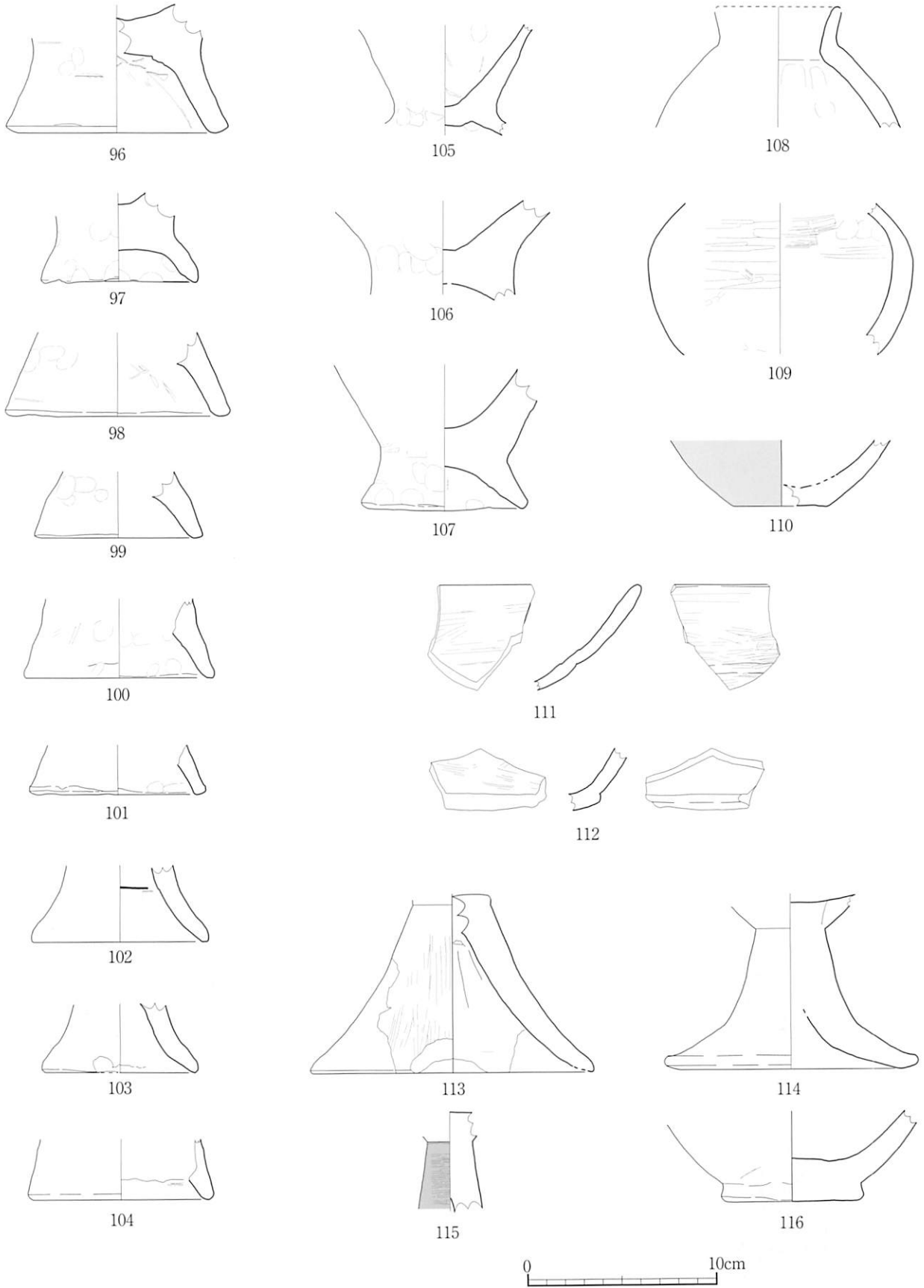
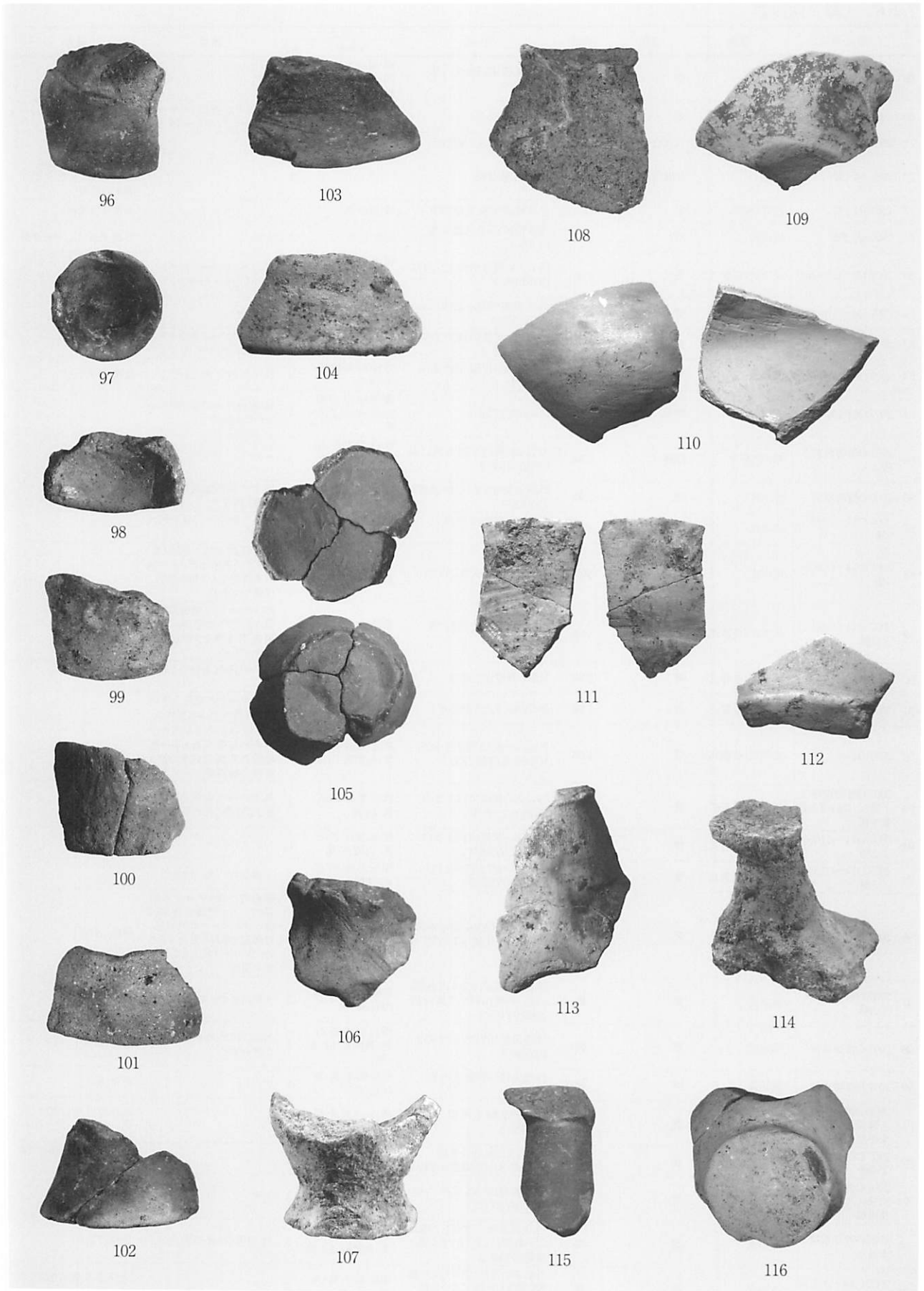


Fig.42 2007-O14 ~ O16 (S=1/3)



PL.30 2007-O14 ~ O16

Tab.6 土器・陶磁器

番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	胎土		調整	備考
						混和材	多量		
68	2007-B10-5b層	成川式	甕	脚	外-浅黄橙10YR8/3,内-橙7.5YR6/6	礫・粗砂・頁岩・角閃石・石英・赤・黄・砂・細砂・白・黒	3	ナデ	底径(8.3)
69	2007-D11-排土	弥生土器(中期)	壺	口縁	明赤褐5YR5/6	礫・石英・黒・粗砂・砂・石英・赤・黒・白	3	外:ミガキ,口唇部:ミガキ→ナデ(一),内:ハケ→ミガキ	
71	2007-P4-2or3層	青磁	八角皿	口縁	胎土:白,釉:緑灰7.5GY6/1		1		外面連弁,中世
72	2007-P4-1層	磁器	絵具用ノレット	完形	胎土:白,釉:透明		1		口径6.8,底径6.0,器高1.55,底面に社章,全面に細かい貫入
73	2007-P4-1層	磁器(染付)	皿	口縁~底	全施釉,透明釉,文様:群青	礫・粗砂・黒	1		高台:皿付釉刺
74	2007-Q1-3層	成川式	埴?	口縁	浅黄橙10YR 8/4,顔料:橙5YR6/6	細砂・石英・白	2	ナデ	外面・内面上に赤色顔料
80	2007-O8~O10-4層	成川式(笹貫式)	甕	口縁	外:にぶい黄橙10YR7/2,内:灰白10YR8/2	礫・粗砂・角閃石・石英・砂・角閃石・石英・赤・橙	3	外:ハケ()→ナデ(一),内:ハケ(一)→ナデ(一)	
81	2007-O8~O10-4層	成川式(笹貫式)	甕	口縁	外:灰黄褐10YR4/2,内:にぶい橙7.5YR7/4	礫・粗砂・砂・石英・角閃石	3	ナデ(一)	スス附着
82	2007-O8~O10-4層	成川式(笹貫式)	甕	口縁	外:にぶい黄橙10YR7/3,内:浅黄橙10YR8/3	粗砂・石英・角閃石・砂・赤	2	外:カキアゲ→丁寧なナデ,突帯部:(一)ナデ,内:ナデ	
83	2007-O8~O10-4層	成川式	高杯	脚	外:灰黄褐10YR6/2,内:黄灰2.5Y5/1	粗砂・砂・細砂・石英・白・赤	2	外:ナデ,内:丁寧なナデ	底径(15.9)
84	2007-O11-4層	成川式	甕	脚	にぶい橙5YR6/4	礫・粗砂・赤・白・粗砂・砂・赤・白・石英・黒	4	外:脚台内:ナデ,体部内:ヘラナデ→ナデ	
85	2007-O博物館前-3層上	刻目突帯文	深鉢	口縁	外:にぶい褐7.5YR5/4,内:にぶい橙7.5YR7/4	礫・白・赤・粗砂・石英・砂・粗砂・石英・白	3	ナデ	
86	2007-O博物館前	成川式	甕	口縁	外:灰黄褐10YR4/2,内:浅黄橙7.5YR8/3	砂・粗砂・石英・角閃石・黒	2	外:ナデ,突帯部:刻み:布目圧痕?,内:ナデ	スス附着
87	2007-O14~O16①-3層	成川式	甕	突帯	外:灰白10YR8/1,内:灰白10YR8/2	礫・白・粗砂・砂・石英・粗砂・黒	3	外:ヘラナデ(一),内:ナデ,ユビオサエ	
88	2007-O14~O16①-1層	成川式	甕	突帯	外:黒N2/0,内:灰褐7.5YR4/	粗砂・白・砂・粗砂・石英・白・赤・黒	3	外:突帯より上部:ハケによるカキアゲ,突帯:ナデ(一)(刻み工具使用か),刻み:布目圧痕?,内:ナデ	
89	2007-O14~O16区①-3層	成川式(笹貫式)	甕	口縁	外:橙5YR6/6,内:にぶい橙5YR6/6~6/4	礫・白・赤・粗砂・砂・石英・白・赤・黒	3	外:ハケ→ナデ(突帯より上部カキアゲ),突帯:刻み:ヘラ刺突,内:丁寧なナデ,口唇部:ナデ(一)	
90	2007-O14~O16①-3層	成川式(笹貫式)	甕	口縁	にぶい黄橙10YR7/3	粗砂・砂・石英・白・角閃石	3	外:ナデ,内:付着物のため不明	
91	2007-O15-3層	成川式(笹貫式)	甕	口縁	外:5YR6/8,内:5YR7/6	粗砂・砂・石英・角閃石・白・赤	4	外:ハケ→ナデ,突帯上下:爪痕あり,外:ナデ,ユビオサエ	
92	2007-O15-3上層	成川式(笹貫式)	甕	口縁	外:にぶい橙7.5YR7/4,灰白10YR8/2,内:10YR7/2	礫・赤・粗砂・砂・石英・角閃石・白・赤	4	外:ハケ→ナデ(一),内:ハケ→ナデ,突帯:爪痕あり,一部突帯剥落,突帯直下の粘土帯:接合線明瞭	
93	2007-O博物館前-3上層もしくは2層土器集中部	成川式(笹貫式)	甕	口縁	外:にぶい黄橙10YR5/3,内:7.5YR8/2~8/3	礫・白・粗砂・砂・石英・白・赤	4	外:ナデ(一),突帯上部に爪痕,内:剥落のため不明	
94	2007-O14~O16区①-3層	成川式(笹貫式)	甕	口縁	外:にぶい黄褐10YR4/3,内:にぶい橙7.5YR6/4	礫・灰・粗砂・砂・石英・角閃石・黒	2	ハケ→ナデ(一)	
95	2007-O14~O16区①-3層	成川式(笹貫式)	甕	口縁	外:にぶい橙7.5YR6/4,内:にぶい黄橙10YR7/3	礫・灰・粗砂・砂・石英・角閃石・黒・赤	3	丁寧なナデ(外:ハケか?)	
96	2007-博物館前	成川式	甕	脚	外:明黄褐10YR6/6,内:体部:黄灰2.5Y6/1,脚台:7.5YR7/6	礫・白・灰・赤・粗砂・砂・石英・角閃石・白・赤・黒	4	脚台内:ヘラナデ→ナデ,体部内:ヘラナデ,脚台内:脚部はヘラナデ→ナデ,天井部は体部と脚部を接合するための貼り付け粘土をならす荒い擦過	脚径(11.6)
97	2007-O14~O16区①-3層	成川式	甕	脚	外:にぶい橙5YR7/4,内:体部:にぶい黄橙10YR7/3,脚台:灰黄褐10YR5/2	粗砂・砂・石英・角閃石・赤・黒	3	ナデ,ユビオサエ顕著	底径8.1
98	2007-O博物館前	成川式	甕	脚	外:浅黄橙10YR8/4,内:灰白10YR8/2	礫・白・粗砂・砂・石英・角閃石・白・赤・黒	4	外:剥落のため不明,内:ヘラナデ→ナデ	底径(11.8)
99	2007-O博物館前	成川式	甕	脚	外:浅黄橙10YR8/3,内:橙5YR6/6	粗砂・砂・石英・角閃石・白	4	ナデ	底径(8.8)
100	2007-O博物館前-3上層もしくは2層土器集中部	成川式	甕	脚	外:橙2.5YR6/6,内:橙2.5YR6/8	礫・赤・白・粗砂・砂・石英・白・黒	4	ナデ	底径(9.8),接合部にて欠損
101	2007-O14~O16区①-3層	成川式	甕	脚	外:橙2.5YR6/6,淡赤橙2.5YR7/4,内:灰黄褐10YR5/2	石英・白・赤	2	ナデ	底径(8.4),接合部にて欠損
102	2007-O博物館前-3上層もしくは2層土器集中部	成川式	甕	脚	外:灰黄橙10YR5/2,内:にぶい黄橙10YR7/2	粗砂・砂・白・黒・石英	3	ナデ	底径(9.2)
103	2007-O博物館前-3上層	成川式	甕	脚	外:上部:黄灰2.5Y5/1,下部:にぶい黄橙10YR7/3,内:にぶい黄橙10YR6/3	礫・白・粗砂・砂・石英・角閃石・白・黒	3	外:剥落のため不明,内:ナデ	底径(7.7)
104	2007-O14~O16①-3層	成川式	甕	脚	外:にぶい黄橙10YR7/4,一部橙2.5YR6/8,内:にぶい黄橙10YR7/3,淡赤褐2.5YR7/4	粗砂・砂・石英・角閃石・白・黒	2	ナデ	底径(9.3),接合部にて欠損

Ⅷ 立会調査

105	2007-博物館前	成川式	甕	脚	外にぶい・褐7.5YR5/4,内:体部10YR6/3,脚台:橙5YR6/6	礫:白・粗砂・砂・石英・角閃石・白・赤・黒	3	外:ナデ(一),体部内:ハケーナデ,脚台内:ナデ,エビオサエ	
106	2007-O14~O16①-1層	成川式	甕	脚	外にぶい・黄橙10YR7/4,内にぶい・黄橙10Y5/4,橙2.5YR6/6	礫:灰・白・粗砂・砂・石英・黒・白・赤	3	外:ヘラナデーナデ,体部内:ナデ?,脚台内:ヘラナデーナデ	
107	2007-O博物館前	成川式	甕	脚	灰白10YR8/2	粗砂・砂・石英・赤・白・黒	2	ヘラ→ナデ	底径8.9
108	2007-O14~O16①-3層	成川式	甕	口縁~肩	外:浅黄橙10YR8/4,内:灰白10YR8/2	砂・細砂・石英・白・黒	3	外:(付着物のため)不明,内:ハケー→ナデ	口径6.4
109	2007-O博物館前	成川式	埴	胴	外:浅黄橙10YR8/3,内にぶい・黄橙10YR7/4	砂・細砂・石英・角閃石・白・黒,精製	2	外:ミガキ,内:ハケー→丁寧なナデ	胴部最大径(14.0)
110	2007-O博物館前-3層	成川式	埴	底	外:橙7.5YR7/6,内:灰黄2.5Y6/2,顔料にぶい・赤褐2.5YR4/4	砂・細砂・白・黒	2	外:ミガキ?内:ナデ?	赤色顔料,底径(4.9)
111	2007-O14~O16①-3層	成川式(笹貫式)	高杯	口縁	外:橙5YR6/6,内:浅黄橙10YR8/3	細砂・石英,精製	1	外:ナデ→ミガキ(一),段部のみ無調整,内:太いハケー→ナデ	
112	2007-O14~16区①-3層	成川式	高杯	口縁	外:浅黄橙10YR8/3,内:灰白5Y7/1	砂・白・細砂・石英・白・赤	2	外:ミガキ?,内:ハケー→ナデ	表面摩滅著しい
113	2007-O博物館前	成川式	高杯	脚	外にぶい・黄橙10YR7/3,内:浅黄橙10YR8/3	砂・細砂・石英・赤・白	2	外:ミガキ(),内:ハケー→ナデ	底径(15.1),坏部は接合部で欠損,黒斑
114	2007-O14~O16①-3層	成川式	高杯	脚	外:橙7.5YR7/6・灰白10YR8/2,内:橙5YR7/6	砂・細砂・石英・角閃石・白・赤	2	(表面剥落,付着物のため不明)ナデ?	脚径13.4
115	2007-O15-3層	成川式	高杯	脚	外:橙5YR7/6,内:灰5Y5/1,顔料:赤褐2.5YR4/6	礫:白・粗砂・砂・石英・白・赤	2	外:ミガキ(一),杯部内ナデ	赤色顔料
116	2007-博物館前	成川式	甕	底	外:橙7.5YR7/6,内:橙7.5YR7/6・(にぶい・黄橙10YR7/3	砂・細砂・石英・白・黒,精製	2	外:(摩滅のため不明瞭)ナデ,内:(剥落)ヘラナデ,底:無調整	底径7.5



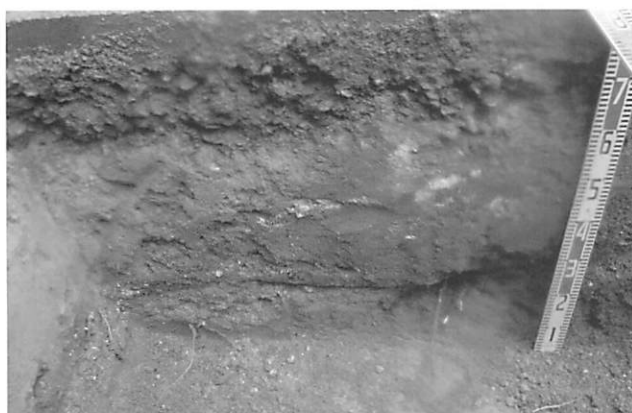
B2地点



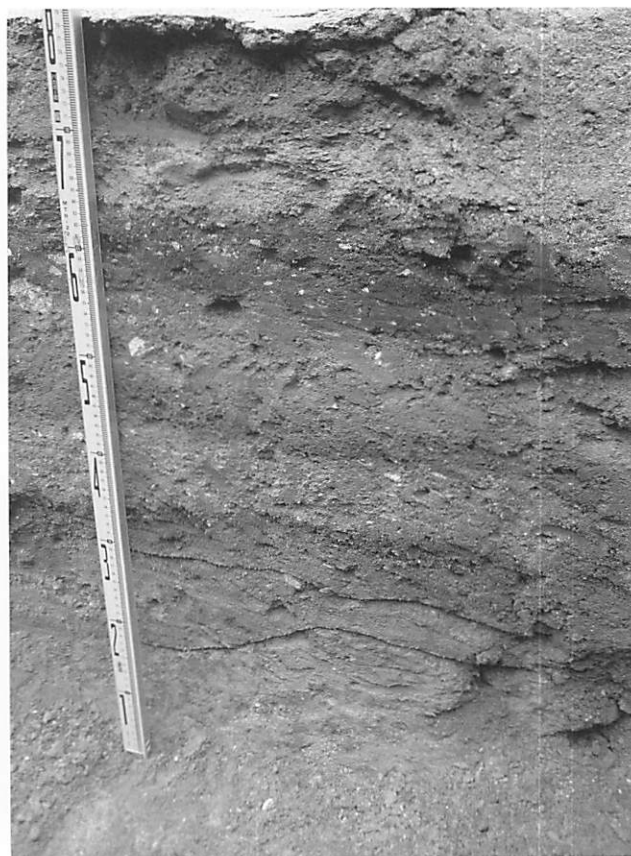
B18地点



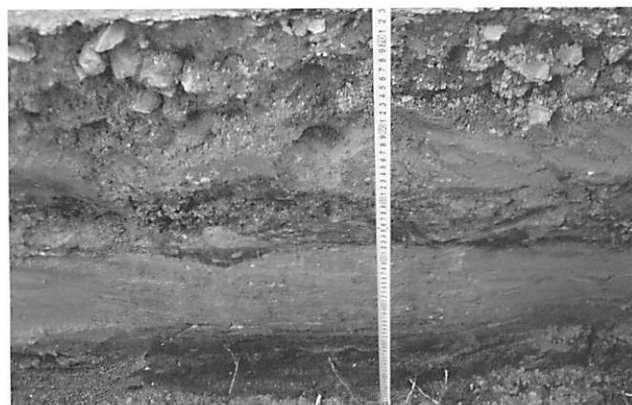
B8地点



B6地点



B7地点



B15地点

Ⅷ 立会調査



D4地点



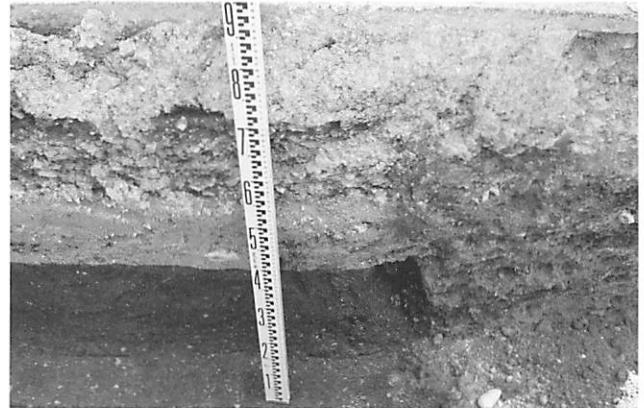
D5地点



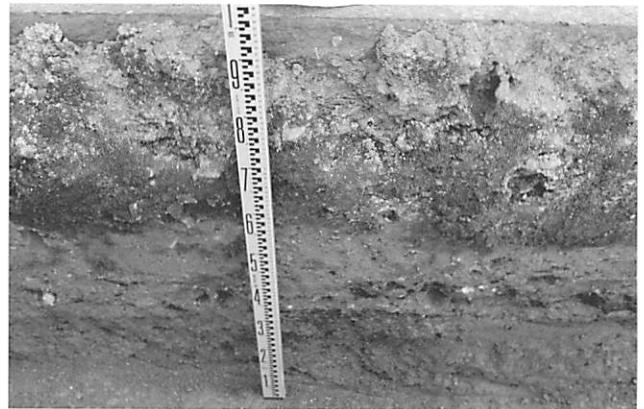
D11~15地点



D11地点



D13地点



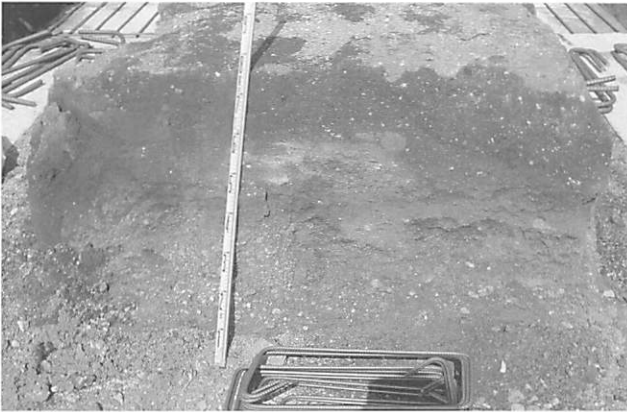
D15地点



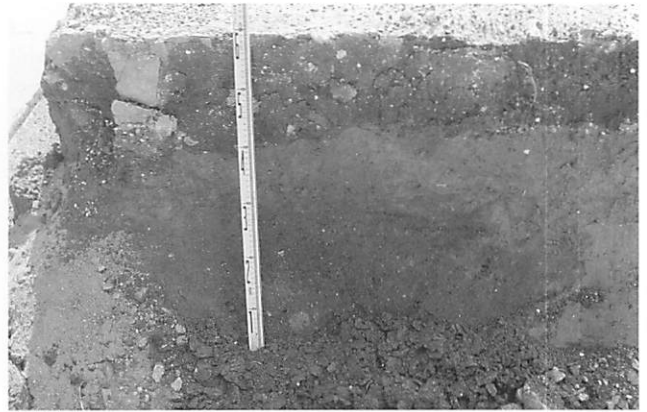
E地点



F2地点



G1地点



G2地点



M1地点



O4地点



O5地点



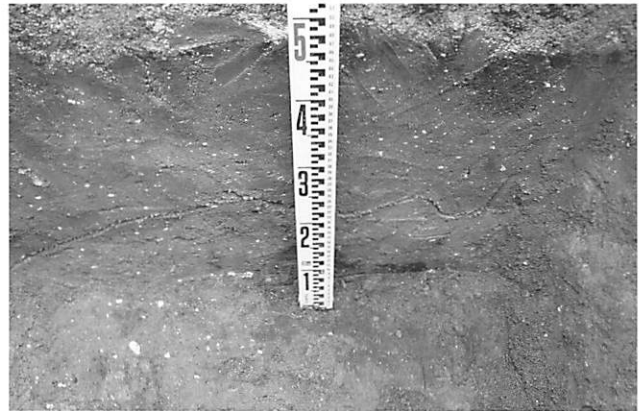
08地点



09地点



010地点



011地点



012地点



013地点



014地点



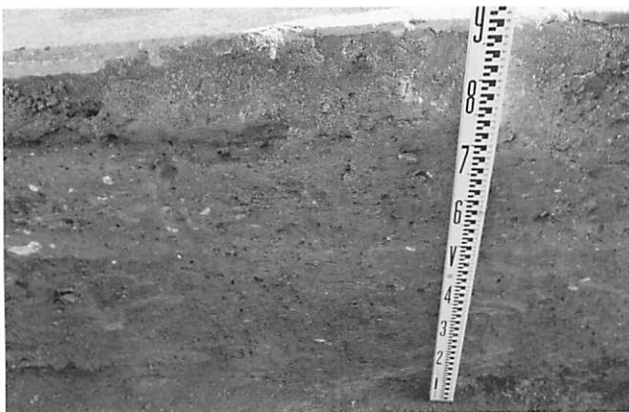
015地点



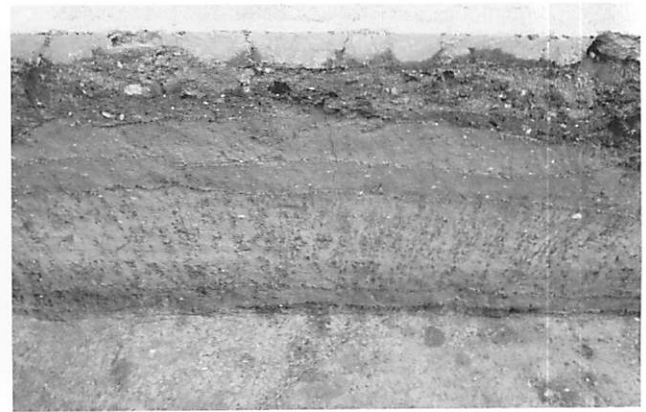
水田跡1



水田跡2・3



017地点



018地点

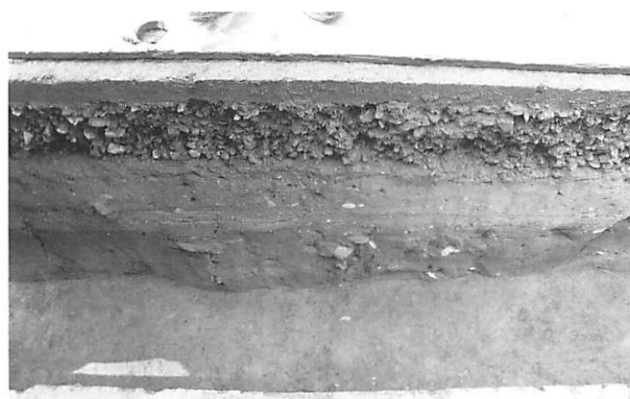
Ⅷ 立会調査



014～015地点間



014～015地点間



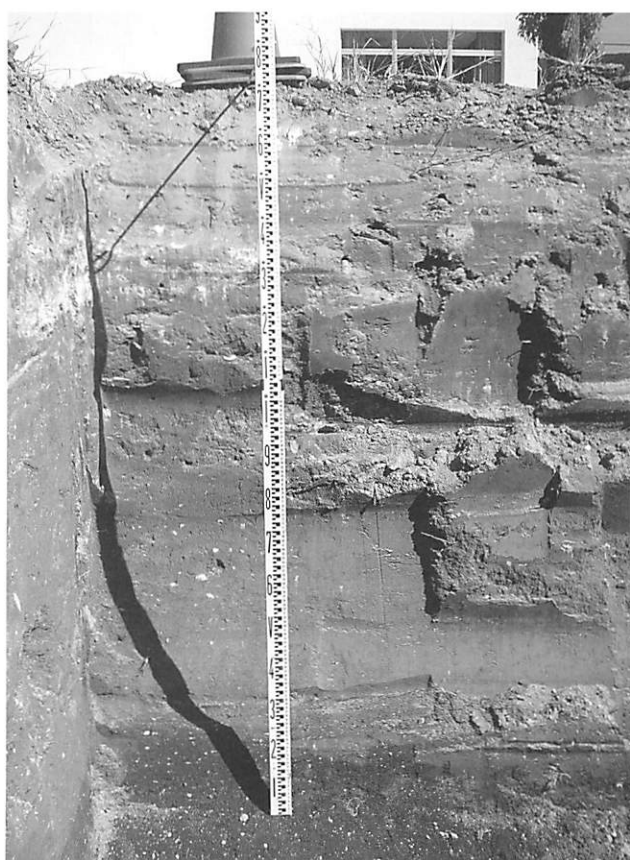
014～015地点間



014～015地点間



P3地点



P4地点

Ⅷ 立会調査



Q1地点



V2地点



W4地点



W2地点



X2地点



X9地点

PL.37 2007年度立会調査(7)

IX 遺跡説明会

2007-2共通教育棟2号館の発掘調査に伴い、調査中の2007年12月15日に一般市民向けの遺跡説明会を開催した。鹿児島大学大学院生を主体に、パブリックアーケオロジーの実施を兼ねており、事前アンケートの実施、公表、パネル・遺物の展示、図版解説など、このような説明会を開催するのは、調査室では初めての試みであった。この状況と内容については、『考古学研究』第55巻第2号において公表されている¹⁾。一般市民ほか約90名の参加があった。



PL.38 遺跡説明会の様子

註

- 1) 真邊彩・大屋匡史・河野裕次・榎原えりこ 2008「双方向性の遺跡説明会を目指して－鹿児島大学構内遺跡説明会における取組み－」『考古学研究』第55巻第2号 考古学研究会 20-23頁

X 体験発掘

2007-1中央診療棟発掘調査において、共通教育講義を受講する鹿児島大学学生23名の体験発掘を7月20日に行なった。

また、共通教育棟2号館の発掘調査における体験発掘は、8月21日に小中学生5名、10月31日に共通教育講義を受講する鹿児島大学学生23名、10月22日に鹿児島女子短期大学7名をそれぞれ受け入れた。



PL.39 2007-1体験発掘（鹿児島大学生）



PL.40 2007-2体験発掘（小中学生）



PL.41 2007-2体験発掘（鹿児島女子短期大学生）



PL.42 2007-2体験発掘（鹿児島大学生）

XI 公開講座

『鹿大キャンパスで遺跡を探る－土器や石器をさわってみよう－』と題して、2回にわたる一般市民向けの公開講座(聴講無料)を実施した。第1回講座は2007年10月20日、総合研究棟(文系棟)において、講座形式で考古学の基礎的な講話と鹿児島大学構内遺跡の概要を説明した。参加人数は20名。第2回は2007年10月27日で、直に遺物や遺構に触れてもらうことを目的に、2007-2共通教育棟2号館の体験発掘を実施した。40名の参加があった。



PL.43 公開講座の様子



PL.44 体験発掘後の修了式

XII 整理作業

1995-1教育学部幼稚園舎建設に伴う発掘調査の遺物接合・実測・トレース作業、2005-4農学部5号館・2006-2農学部1号館改修工事・2006-4農学部2号館改修工事に伴う発掘調査遺物の注記・接合・実測作業、1999-1文系総合研究棟建設に伴う発掘調査遺物の注記、2007-1医学部中央診療棟新営その他工事に伴う発掘調査遺物の洗浄・注記、2007-2共通教育棟2号館改修工事に伴う発掘調査遺物の洗浄、2007-4南九州地区軽種馬医療体制整備事業に伴う発掘調査遺物の洗浄・注記作業を行なった。

また、教育学部第2講義棟の改修工事に伴い、同校舎屋上倉庫に1963年調査遺物他が保管されていることが新たに判明した。しかしながら、これらの遺物は保管経緯も不明であった。2007年11月7・9日の2日間にかけて、遺物は腐食寸前の木箱から箱ごとにプラスチックコンテナに移し、教育学部の遺物収蔵場所へ保管した。

2007年12月14日、農学部2号館改修工事に伴った研究室引っ越しに際して、農学部松本光春先生より埋蔵文化財調査室に遺物の寄贈があった。農学部林田先生が農学部2号館(昭和40・41年築)を建設していた昭和39年に採集したとされる。木製リング箱からプラスチックコンテナに移動し、農学部の遺物収蔵場所へ保管した。



PL.45 教育学部屋上倉庫の遺物



PL.46 農学部寄贈の遺物

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報22・23

2009年3月発行

編集・発行 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

鹿児島市郡元一丁目21-24
TEL 099-285-7270

印刷 斯文堂株式会社

鹿児島市南栄2-12-6
TEL 099-268-8211

Kagoshima University

Research Center for Archaeology

Report Vol.22·23

CONTENS

Chapter

1	Report of archaeological research in fiscal year 2008.....	3
2	Report of text excavation at Area C ~ G-5 ~ 9 in Sakuragaoka Campus.....	8
3	Report of rescue surveys 2008.....	25
4	Report of archaeological research in fiscal year 2009.....	63
5	Report of rescue surveys 2009.....	67

Published by
Kagoshima University Research Center for Archaeology
2009